1995年2月1日発行（毎月1日発行）通巻第六号

Japanese Rock Newsmedia

J-ROCK magazine



200YEN
PRE-PUBLISHING
VOL.006
FEB·MAR 1995

2·3

Artists Newsを見よ。

本誌は日本のロックミュージックに焦点を当てていく音楽専門誌としてここに名乗りを上げる。
まず本誌中のJ-ROCK Artists Newsを見てほしい。基本的にこのリストのアーティストたちに注目していくつもりだ。リストはわが編集スタッフが次の5つの条件を基に際限の無い論議の末、独断と偏見のもとに作り上げている。

1.ルーツ（ロックスピリッツ、ブルースフィーリングを持っている）
2.実力（歌唱または演奏力がある。声に魅力がある）
3.クリエイティビティ（作詞・作曲能力に優れている）
4.パフォーマンス（カリスマ性がある、ライブパフォーマンスもしくはビジュアルがいい）
5.生き様（芸能人、タレント化していない）

以上の5項目を有していれば、当然売れているわけで、そうしたアーティスト、もしくは売れるべきだと思えるアーティストを選出させてもらった。

CONTENTS

表紙：THE MAD CAPSULE MARKET'S
撮影：金原 誠

J-ROCK magazine

2・3月号(創刊準備6号)

1995年2月1日発行(毎月1日発行)通巻第六号
発行:株式会社ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋1-10-25
コモド西心斎橋403
PHONE : 06-243-3611/FAX : 06-243-3651
印 刷:株式会社大伸社
発行人:辻村和周
編集長:里居正裕



昨年12月に発表されたLOUDNESSの2年半ぶりのアルバム『HEAVY METAL HIPPIES』は、新しいLOUDNESSの新境地を切り開いた。やはり、オリジナル・メンバーが高崎晃ただ一人になってしまったことに大きな要因があるようだ。サイケデリックな要素を取り入れたこのアルバムでは、怒涛のアイテム・ラッシュで人気をつかんでいるような化粧系若僧バンドの速いだけの薄っぺらいサウンドなんぞは、全く足元に寄せ付けない重くすごみのあるサウンドを聞かせてくれる。更に、今回のツアーから空席だったベースの座に、元ANTHEMの柴田“NAOTO”直人を迎え、より強靭なバンドとして完全な形でよみがえった。

ヴォーカルの山田“MASAKI”雅樹と共にE.Z.Oでプレイしていたドラムス本間“HIRO”大嗣とベースの柴田が加入した新生LOUDNESSの初のライブ・ツアー『BADTASTE TOUR 1994』の最終日となった地元大阪のIMPホール（大阪出身者は高崎だけになってしまったが、LOUDNESSは大阪のバンドだ！）。オールスタンディングとなったホール内には、ライダースジャケットで身を固めたようなメタル・キッズ…ちょっとキッズとは言いがたい年齢層の高いロック・ファンが多く、中には会社帰りのスーツ姿のファンもいる。それも男性のファンがほとんどで、本当のLOUDNESSファンが足を運んできている。もう以前のような黒服の女の子達の姿はない。

そんな落ち着いた（？）雰囲気が漂う中、定刻通りに客電が落とされ、メンバーがステージに現れた。ドラムのHIROが力強いビートをたたき出し、最新アルバムの中でも前作の香りが残る「DESPERATION, DESECRATION」でオープニング。全くスキがない完璧な演奏から生まれる重たいグルーヴが初っぱなからファンを直撃し、それに応えるかのようにファンも拳を高く振りかざす。次の「PRAY FOR THE DEAD」のイントロのドラミングが鳴り響くと、「オー！」という大きな歓声が上がり、そこに高崎のギターが絡むとファンの振り上げられた拳にもより一層の力が込められた。そして、容赦なく迫り来るヘヴィーなサウンドにヘッド・バンキングで応戦するのだった。

セットもシンプルで何の演出っぽさもなく、演奏できない箇所をテープでごまかすようなインチキもしない（する必要ない）生のLOUDNESS。硬派なヴォーカル・スタイルを貫くMASAKIはMCでも、ロック・ヴォーカリストらしく「大阪のパワーを俺等LOUDNESSにぶつけてくれ！」と煽った後、「ちょとクサいけどよぅ（笑）」とひと言入れ、自分のスタンスを崩さない。

「EYES OF A CHILD」では、新生LOUDNESSの見どころでもあるHIROのツー・バスが威力を発揮し、その壮絶なドラミングに絡む高崎のギターがまた圧巻。世界に名を轟かせるギターヒーローだけに『上手い』というレベルではなく『ものごっつい（大阪弁で“ものすごい”という意味）』というテクニックを見せつけ、高崎の指使いを喰い入るように見つめていた熱心なギター・キッズをうならせた。

また、メンバー紹介でもMASAKIに「みんな良く知っている柴田さんだよ」と言われ、ファンからも「柴田ー！」や「ナオトー！」という声援が掛けられていたNAOTO。そんな声からも、いかに『ANTHEM』というバンドがファンに惜しまれて解散したかが分かる。NAOTOもその声援に負けない力強いプレイを披露し、ドラムのHIROとのコンビネーションも良く、新しいLOUDNESSのサウンドを底辺から支えていることを立証していた。

後半1曲目は「HOWLING RAIN」。スローテンポの曲ではあるが、溜め込まれたパワーを活かしたヘヴィーなパンチでボディー・ブローを喰らわされ、炸裂する高崎のギター・ソロには、もう、ただただ感服するばかりだった。生半可な気持ちでライブに挑むとノック・アウトされそうな、『王者』と呼ばれるにふさわしいサウンドである。更に、ブルージーな始まりを見せた「BLACK WIDOW」から本編最後の「PARALYZED」へのスパートでパワーを増し、激しいヘッド・バンカー達を完全に打ちのめしてしまった。

アンコールでの「明日、ニューヨークに帰って子供と遊ぶわ」というMASAKIのMCに、すかさず「お前、何まじめなこと言うてんねん」と突っ込みを入れる高崎。メンバー紹介の時にも「今のLOUDNESSの方がええと思えへんか？（笑）」と冗談まじりに言ったりと、今までのライブでは見られなかった和やかなムードがステージ上に漂っていた。高崎自身もリラックスしてプレイしているようだ。やはり地元大阪でのライブのせいなのだろうか？

MASAKIの「CRAZY DOCTOR」という声にホール中が沸く。スピード感に重みが加わりパワーが増した上、日本語バージョンでプレイされた往年の名曲にファンのノリ方もかなり激しくなり、サビの部分では一緒になって歌っている。2回目のアンコールでも「S.D.I.」が披露されたため、最後に残った力を振り絞るかのようなヘッド・バンキングの嵐。終演後は、すべての力を出し尽くしたファンが満足顔で会場を後にしていた。

（文・石田博嗣　撮影・金原 誠）



LOUDNESS 1994.12.27 IMP HALL ～ BADTASTE TOUR 1994 ～



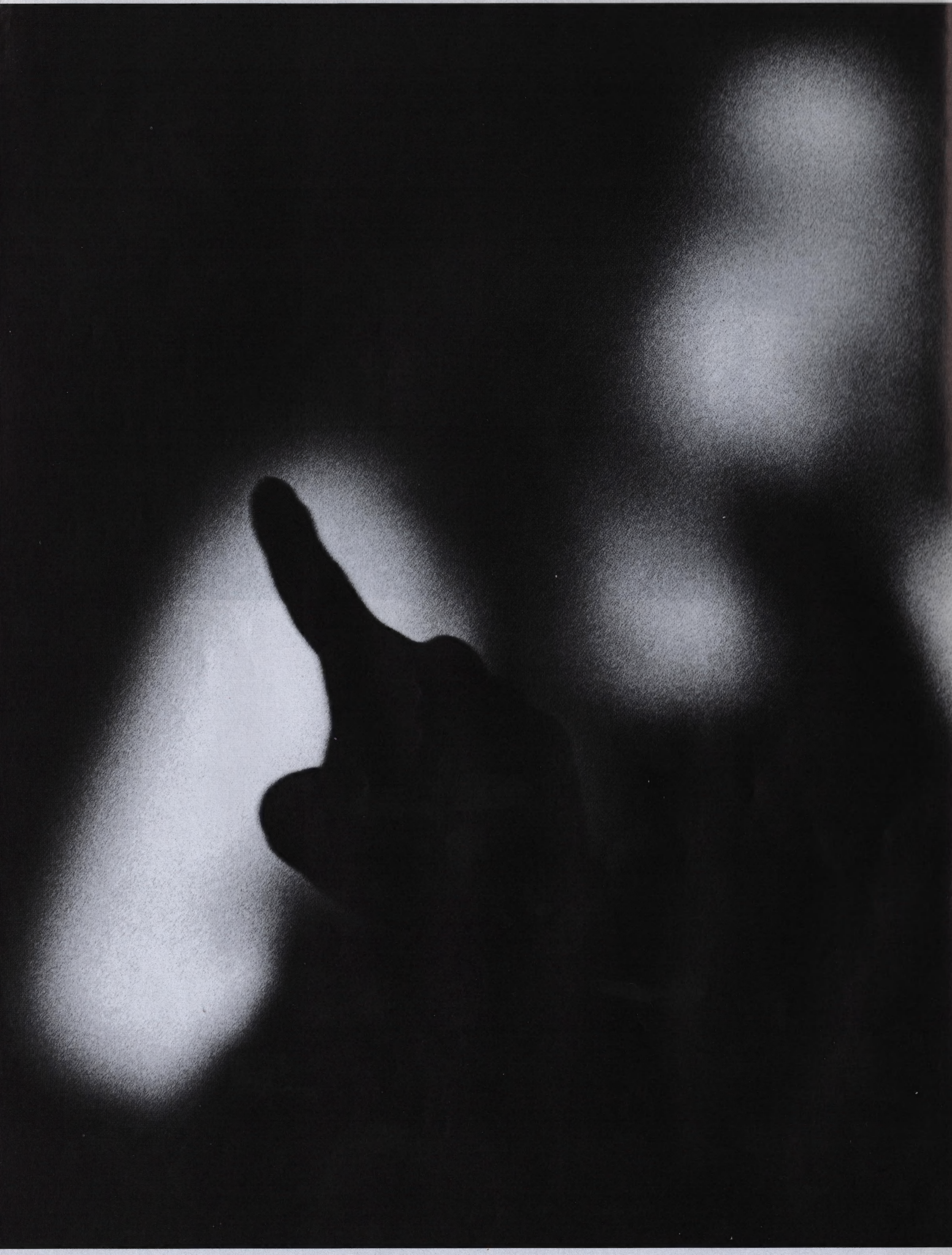






PLAY List

1 DESPERATION,DESECRATION
2 PRAY FOR THE DEAD
3 DOWN'N' DIRTY
4 ELECTRIC KISSES
5 222
6 EYES OF A CHILD ～ SOLO
7 HOWLING RAIN
8 BLACK WIDOW
9 SLAUGHTER HOUSE
10 HELL BITES
11 PARALYZED
encore
E1 BROKEN JESUS
E2 CRAZY DOCTOR
encore
E3 FREEDOM
E4 S.D.I

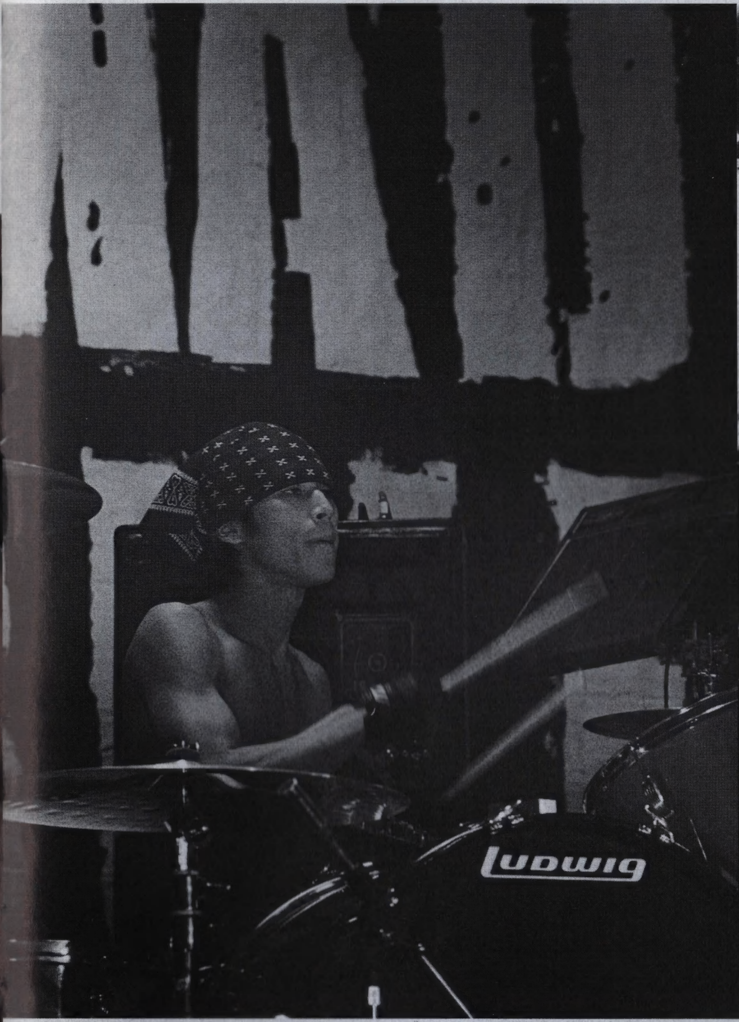




THE MAD CAPSULE MARKET'S

TOUR '94〜'95 “HIGH-INDIVIDUAL〜SIDE” 1994.12.21 大阪御堂会館







15分遅れ。鮮血のように赤いライトの中、ステージは『MIX-ISM』の強靭なビートでその幕を開けた。客席は最近のメジャーコンサートで見られる、FUCKIN'でヘドが出る仲良しミーハーノリとは次元の違う、第三者にコントロールされない高尚で無秩序なノリを見せる。2曲目の『HI-SIDE』のオープニングカウントを聴くころには会場には神聖な汗の匂いが広がり始めた。

彼らのサウンドは、スタジオで作られたCDという足かせの多いステージでも、とてつもなく暴力的な音で暴れ回っているが、その肉や骨は俺達の無垢なオツムには理解できないくらいに緻密な音で成り立っている。様々なギターやアンプ、エフェクターによるたくさんのオーバーダビングが施されたISHIG∀KIの刺激的なギターサウンド。MOTOKATSUのドラムスもレコーディングスタジオのアンビエンス効果(自然の残響)を最大限に生かす微妙なマイキングで出来上がった音で無駄のないビートを刻む。ライブステージは、そんな緻密な面を後退させ(せざるを得ないとも言えるが)、よりワイルドなライブ感にしっかり力点を置いたものになっている。この潔い割り切りがそのステージに勢いと充実感を充満させる。CDはCD!　ライブはライブ!　上等じゃないか!!

THE MAD CAPSULE MARKET'Sはアンコールを含めた全16曲を1時間弱で突っ走る。曲間のMCは一切なし(2~3回、KYONOの意味不明の雄叫びはあったが)。エンターテイメントという"やわ"なぜい肉を一切そぎ落としたシャープな鋼(はがね)を思わせるステージ。メンバーは客を煽動するような意図を持たない野生動物のようだ。計算ではない本能のままに自分たちだけの音をたたき出す。客席も何かを強要されるでもなく、本能のままにその一撃に身体(からだ)をあずける。会場全体が大きなウエーブを共有し、強烈なオーラを発する瞬間。

ステージの流れは「起・承・転・結」という構成を完全に否定した勢いで一直線に進む。オープニングからエンディングまでのすべての出来事が「結」であったようなテンション。何だか殺人的に濃度の高いエネルギーのかたまりを直接脳髄にぶつけられたような衝撃で、軽い眩暈(めまい)が起きる。この瞬間、もし、脳味噌の血管が破裂しても「仕方ないか」と安易にあきらめることさえできるかも知れない。客は冷静なんていう腐った心のブレーキはとうの昔に踏み抜いて、その精神は暴走の真っ最中だ。マッドカプセルの過激な曲が時折見せるポップなメロディーも、その暴走の緩和剤にはなり得ず、火に油を注ぐばかり。本編は『だんだん』で巨大な斧でぶった切られたように唐突にその幕を降ろす。メンバーはセルフトレーニングを終えたボクサーのように、汗を光らせながら傍観者である観客の声援に応えるでもなくステージを後にする。「アンコール!　アンコール!」「?」　アンコールのコールやハンドクラップはどこに?　客席はとにかく叫んでいる。何だか分からない言葉で叫び続ける。その雄叫びの塊は「ゴーッ」というノイズとなって場内を不気味に反響しながら駆けめぐり、メンバーをステージにおびき出す。

アンコールで放出されるエネルギーもますますこの熱狂をブースト。奴等の情け容赦ない攻撃のフィニッシュは『ギチ』。「ギチ!ギチ!ギチ!ギチ!」KYONOも観客も声を合わせて歌うというより、何かにとりつかれたように吠える。俺の左前方で踊っている少女は、頭の中の大切なものが少なくとも2~3本切れてしまったよう。完全に狂人と化し、自分の腰を支点に上半身を200度ばかりグルグルと回転させて周りの者を攻撃する。客席最後部の立ち見席界隈は、完全にレッドゾーンを超えてしまった。

メンバーは再びステージから姿を消し二度と現れることはなかった。しかし、このあまりにも短い熱狂の瞬間を不服とする者は皆無。観客もその瞬間で燃焼しているのだ。「チケット代が〇〇〇〇円したのに……」なんて表面的な損得勘定しかできない物質人間は、彼らのライブには来なくていいということだ。

あるライターがマッドカプセルについて「何でこの人達は自分を語るべき言葉をあそこまで持っていないのか!」と彼らのインタビュー記事のつまらなさを嘆いていたが、ライブを見た俺は、そんなことはどうでもいいことのように思えてしまった。奴等は自分たちを説明したり弁解したり、ファンをだますような言葉なんて必要としない音楽の野獣でしかない。この超高濃度な56分を全力で投げつけ続けるだけでいい。もうメディアでしゃべることはないよTHE MAD CAPSULE MARKET'S。俺が欲しいのは奴等の音だ。俺はもう彼らのインタビュー記事なんか焼き払う決心をした。

(文・西原 朗　撮影・金原 誠)



PLAY List

1 MIX-ISM
2 HI-SIDE(HIGH-INDIVIDUAL-SIDE)
3 LIMIT
4 IN SURFACE NOISE
5 ハリネズミとＸＸ
6 マスメディア
7 セルフコントロール
8 G.M.J.P
9 HUMANITY
10 ギラギラ
11 NEO SUNDAY ～新しい日曜日
12 パラサイト（寄生虫）
13 ラ・ラ・ラ（僕がウソつきになった日）
14 だんだん
encore
E1 3秒間の・・
E2 ギチ

TOMOYASU HOTEI GUITARHYTHM SERIOUS! CLIMAX ARENA TOUR



創造と破壊。布袋寅泰が7年を費やした「GUITARHYTHM」を終結させようとしている。

掲げた一つの目標を見いだすのに、7年という歳月は長いのだろうか。新しいもの（例えばアルバム）を創るごとに「前作を否定する」という格好の良い体裁を吐いている、安っぽいミュージシャンには気の遠くなる時間だろう。「GUITARHYTHM」というゴールを見据え、それに近づくために創造と破壊を繰り返してきた布袋寅泰とその時間を共にし続けたファンそれぞれにとって、この7年という歳月が長かったのか短かったのかは、このライブが終わった時に答えが出るだろう。アーティストの自己満足の域で終わってしまうのか、コンサートでその答えを示し、ファンを新しい音に向かせることができるのか。「GUITAR」と「RHYTHM」、ギターとコンピュータの融合という一つのスタイルを示し、かたくなに「GUITARHYTHM」の創造にこだわってきた布袋寅泰が見いだした結論、「GUITARHYTHM SERIOUS! CLIMAX ARENA TOUR」が大阪からスタートした。

2回目のアンコールが終わり、メンバー、成田忍（G）・小森茂生（Key）・浅田孟（B）・椎野恭一（Ds）とつないだ手を高く挙げファンからの歓声に応えた時、「つくづく布袋寅泰はアーティストだな」と深く感じいった。彼の音楽性に対する周囲の評価は高く、それを疑っていたわけではけっしてないのだが、改めてそう感じさせられる。4thアルバム「GUITARHYTHM Ⅳ」で使われた生の音と、前作までの打ち込みを中心とした計算し尽くされたデジタルな音、正反対の音が一つのプログラムに混在しても違和感はなく、コンサート全体がまとめ上げられ、それらの音を完全に自分のものにしている。その時々にベストな音として送り続けたそれぞれの「GUITARHYTHM」をコントロールできるまでになれた今、このコンセプトを終結させる意味を布袋寅泰は感じたのかも知れない。

ライブの幕開け、アルバム「GUITARHYTHM Ⅳ」のオープニングと同曲順で3曲「SURRENDER」まで一気に歌った後に初めて布袋が口にした、「今日は広いめの会場で、みんなとはちょっと距離があるんだけど、ハートはすぐ近くに感じて、ライブハウス気分で楽しんで…」のひと言に集約されていた今夜のライブ。前半7曲、「MERRY★-GO-ROUND」を含むアップテンポ曲の後、「YOU」「ANGEL WALTZ」「薔薇と雨」と立て続けのスローバラードを舞台中央に腰掛けて歌う布袋。中世の城を型どった大がかりなセットの中に演劇の舞台のような広いステージが組まれ、そこに彼が一人座っている。他に動く人影のないこのステージをまったく広く感じさせないことに気づいたその時には既に、僕はこのライブの大きなうねりに引き込まれていた。

中盤、ステージの左右に、大阪城ホールのスタンド席と丁度同じ高さで設けられた踊り場に「OUTSIDER」のイントロと共に布袋が登場。アリーナクラスでは何か忘れられたような感じのするスタンド席のファンへの演出。届きそうな布袋寅泰に向かって突き出された無数の手の向こうには、それぞれの「GUITARHYTHM」が形として見えているかのように感じてしまうほどライブ感のあるものだった。

「7年間『GUITARHYTHM』ということで活動してきましたがこのツアーでこれを終結させます。この長い間に会った人、そしてその時間に『GUITARHYTHM』は託されていて、だれがどのように言おうと満足しています」と、1回目のアンコール前のMCでようやく、「GUITARHYTHM」に対する思いが語られた。時々の「GUITARHYTHM」をコントロールする彼を目のあたりにし、良いと思う音を一方的に投げつける感の強かった布袋から、聴き手も大切にしていることを知らされた会場内には「終結させないで」の叫びはなく、次を見てやろうという空気だけがある。

そして、このMCの直後、新曲「ポイズン」が演奏されたのだが、この曲が「GUITARHYTHM」を終結させた布袋寅泰の新しい音への宣言とし、たった1曲を一度聴いただけで今後を語るのは時期尚早だということを承知で語らせてもらうと、「GUITARHYTHM Ⅳ」で少し見せたような、生のサウンドを重視したバンドサウンドに、より近づいているように感じられた。そして、それは彼のギターにも。これまでの正確な、計算し尽くされた〝リズムを刻むギター〟から、もっとフリーな、生と偶然性が入り込む、隙間のある楽しさが味わえるような〝リズムを奏でる〟方向が見えたのだが、同じ会場にいた人はどうだったろうか。

（文・大西智之）

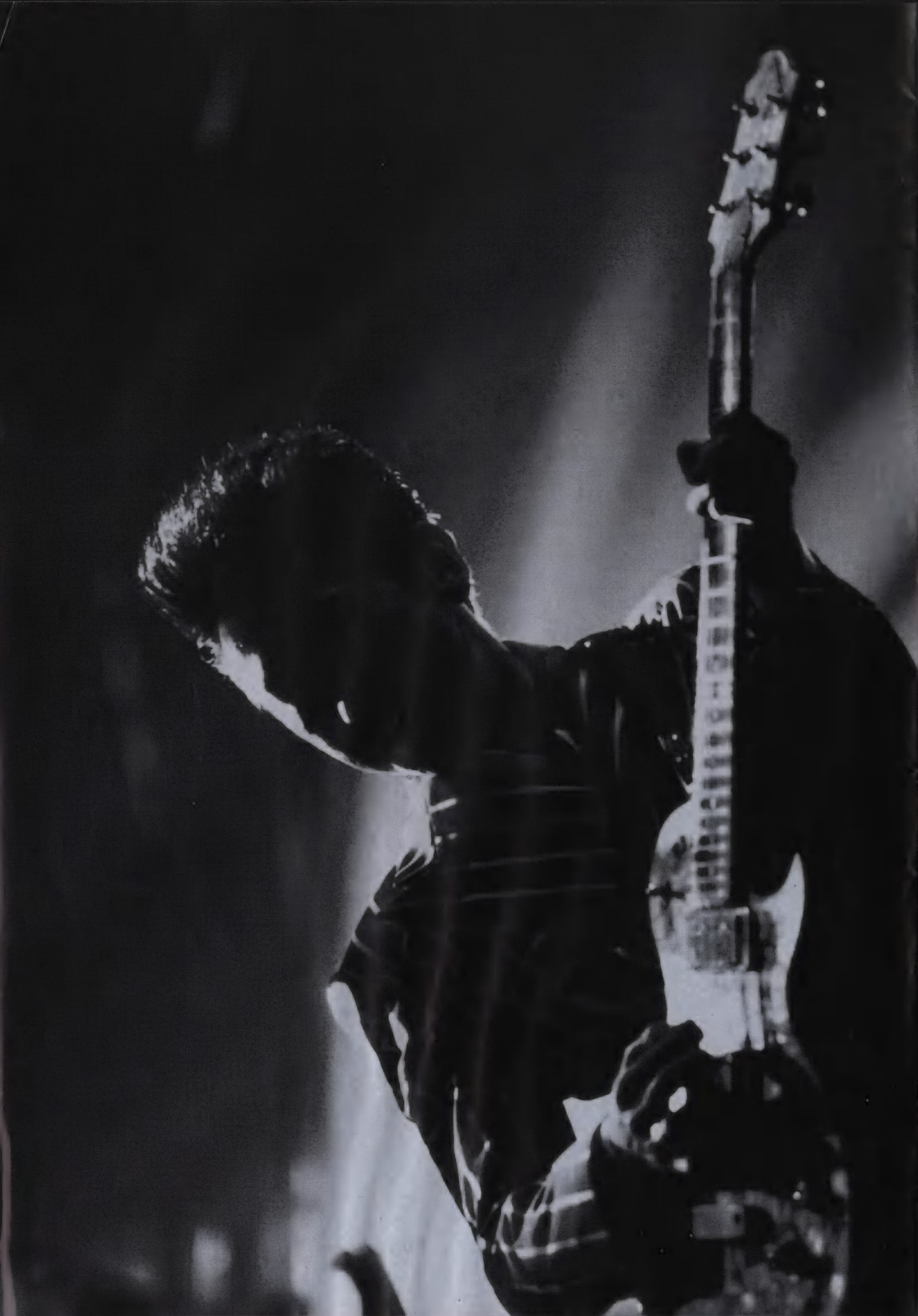
PLAY List

1.TIME HAS COME
2.SERIOUS?
3.SURRENDER
4.気まぐれ天使
5.さよならアンディ・ウォーホル
6.MERRY★-GO-ROUND
7.7年目の幽霊
8.YOU
9.ANGEL WALTZ
10.薔薇と雨
11.FLY INTO YOUR DREAM
12.INTERMISSION
13.OUTSIDER
14.C'MON EVERY BODY
15.GLORIOUS DAYS
16.UPSIDE-DOWN
17.RADIO! RADIO! RADIO!
18.DIVING WITH MY CAR
19.LONELY★WILD
encore
E1. ポイズン（新曲）
E2.さらば青春の光
E3.ESCAPE
encore
E4.RUN BABY RUN

TOMOYASU HOTEI GUITARHYTHM SERIOUS! CLIMAX ARENA TOUR

1994.11.22 OSAKAJO HALL





桑田佳祐 LIVE TOUR “さのさのさ”

1994.12.27 大阪城ホール



最新作「孤独の太陽」の衝撃を胸に、ぼくは大いなる期待を持ってコンサート会場に足を運んだ。それはそうでしょう、今回のアルバムは桑田氏の新境地なのだから。１曲１曲がスルスルと耳に入ってくる。待っていたものが体にしみ込んでくるといった方がいいのかも知れない。

　なぜだろう。こんな感じで彼の音楽を聴くのは初めてだ。

　偉大なメロディーメーカーが作ったものだから、当然といえば当然なのだが、曲だけでなく、詞も不思議なくらい自然に浸透してくるのだ。一体、この感じをどう説明すればよいのか。

　新境地、新境地と心に思いながら、ＪＲ大阪城公園駅に降り立った。既に多くの人たちが集まっている。開演の７時までには少し時間があり、ヘッドホンステレオで最終のおさらいを始めた。

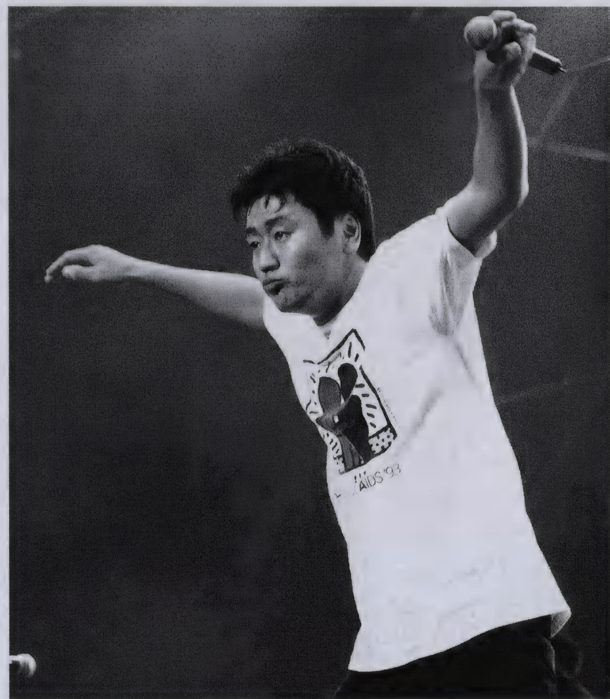
　このところ、70年代ものが大はやりだ。ファッションしかり、音楽しかり。個人的には好きなのだが、レニー・クラビッツなんかを聴いていると、これが最新の音なのかと思ってしまう。デジタル録音を嫌い、あくまでアナログにこだわっているという。わざわざ雑音なんかも取り込んだりして。その一方ではブルースなんていうのもはやっている。ブルースをやっているライブハウスなんか、ぎっしりとお客さんが入っているのですよ。うーむ、時代は変わった。

　その流れに沿っているのか、この「孤独の太陽」も大変にアコースティックである。それにブルースである。生ギターやハーモニカが多用され、もう70年代そのもの。70年代ロックやブルースの好きなぼくにはうれしい。だが、うれしいうれしいと言うだけでは能がない。

　実は、このアコースティックでブルースなのが重要だと思うのである。初めに書いた「スルスルとしみ込んでくる感じ」と大いに関係があると思うのだ。それは、ぼくが個人的に好きな音楽だから、という表面的なものではない。もっと深いところで「スルスル……」と結びついていると思うのだ。

　いや、こんなことを考えているとコンサートが始まってしまう。早く会場に入らなくては。

「桑ちゃんでーす。ウィー」



勢いよく、桑田佳祐が登場。もう、会場は割れんばかりの歓声。危ない危ない、もう少しで登場の瞬間を見逃すところだった。

「ウィー、ウィー」

　いやあ、ぞくぞくしますね。このウィーというのは、プロレスラーのスタンハンセンが試合のときに発する雄叫び。桑ちゃんの雄叫びもいいぞ。

　生ギター一本で桑ちゃんは歌いだした。軽いオープニングの後、一曲目は「漫画ドリーム」。いきなりアリーナ席は総立ち。シンプルな「ミスブランニューデイ」もいい。

　４曲目からバンドのメンバーが加わり、「エロスで殺して（ＲＯＣＫ　ＯＮ）」「太陽が消えた街」など、最新アルバムからのナンバーを中心に演奏。待ってました「月」。これが泣けます。これこそブルースです。演歌です。ソウルです。もう、サイコーです。

　コンサート中盤からは、「ボディスペシャルⅡ」「ＢＡＮ　ＢＡＮ　ＢＡＮ」などサザンやＫＵＷＡＴＡ　ＢＡＮＤの曲もやったりして、こんなに盛り上げてどうするんですか、もう。

　アンコールでは生ギター一本で「いとしのエリー」も歌ったりして、２時間30分なんてあっという間に終わってしまった。いや、満足満足。

　コンサートも終わり、ぼくはＪＲで帰路についた。そして、思考を再開した。なぜ、「孤独の太陽」が「スルスルと体にしみ込んでくる」のか。ぼくはこう思うのである。

　このアルバムは、さっきも述べた通り、アコースティックでブルースな作品である。そう、ここが怪しいのだ。特にブルースが怪しい。

　ブルースといえば、心情吐露という言葉がぴったりだ。そもそも、ブルースとは、かつてアメリカに労働力として連れてこられた黒人が身の上を憂い、歌った音楽である。邦訳では憂歌という。悲しいこと、うれしいことなどの感情がストレートに歌われている。なかには「ぶっ殺してやりたい」など、物騒な内容のものもある。

　そこで「孤独の太陽」である。ここでは、まさしく心情が吐露されている。これまでは考えられなかったような、心の中に一歩踏み込んだ内容が吐露されていると思うのだ。

　整理するとこうなる。アルバムを作るに当たり、70年代でブルースなテイストでいこう、とコンセプトが決まる。さて、どんな詞にするか。こんなに踏み込んだ内容の詞を乗せるはずではなかったのに、ブルースが持つ音楽性が桑田佳祐をして心情吐露させた。一方、ファンはちまたにあふれている現実味のない作品には飽き飽きしている。そこへ、心情吐露である。現実味がたっぷりとある。もう、自分の悩みのようだ。ぼくの体に「スルスルとしみ込んでくる」のも当然のはず、というわけだ。

　しかし、心情吐露だからブルースになった、という言い方もできるかも知れない。また、これまでのサザンやＫＵＷＡＴＡ　ＢＡＮＤで試行錯誤し、紆余曲折（うよきょくせつ）を経た後の作品ということを考慮すると、出るべくして出た作品という言い方もできるが、さて、どうなんだろう。うーむ、これではぼくの思考の結果に説得力がなくなってしまう。

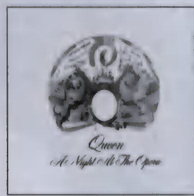
　シートにもたれ、あれこれ考えていた。ゴトゴトという電車の音が体に伝わってくる。規則正しくしっかりとした振動を感じていると、もう考えることなんてどうでもいいと思い始めた。スルスルとしみ込んでくるならそれでいいではないか。

　ゴトゴト、スルスル、ゴトゴト、スルスルと。

　もう一度「孤独の太陽」が聴きたくなって、ヘッドホンを耳に入れた。

（文・もりもともりと）



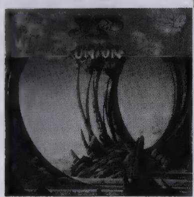


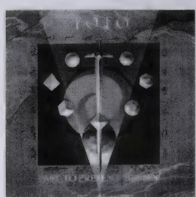


















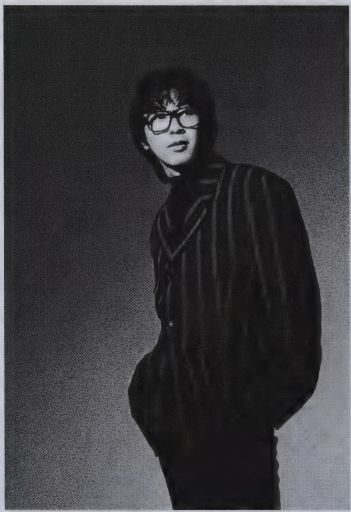




WANDS

SELECTED FAVORITE ROCK SONGS

From「LIVE JUNK 1st」



SHINYA KIMURA



SHOW WESUGI



HIROSHI SHIBASAKI

コンサートが開演する寸前の緊張感と期待感に支配された会場の動かない空気。あと少しで、この会場は歓声と熱気の中で爆発する。客電は明々と光り、ステージは暗転したままスタッフによる楽器やマイクのチェックが行われている。そのバックに流れる沢山の音楽……。

実は、この瞬間にもアーティストから客席へのメッセージは始まっている。このスピーカーから流れる音楽がその大切なメッセージなのだ。

94年6月22日、東京渋谷公会堂「LIVE JUNK 1st」。ファンならずとも注目したWANDS初のライブ、初日開演前の会場。メンバーである上杉昇、木村真也、柴崎浩それぞれが思い思いにチョイスしたロックミュージックがホール内に響きわたっていた。

彼らが選んだ曲達は、バカなメディアが無知をさらしてまくしたてる彼らについてのつまらない記事よりも、多くを語ってくれる。自らが作り出す音楽、影響を受けた音楽、お気に入りの音楽。音楽を生業(なりわい)とするミュージシャンのメッセージは音楽以外にあるはずはない。

アグレッシブで骨太な新境地を聴かせ、安易なコマーシャリズムをあざ笑うかのような豪快ささえ感じさせるニューシングル「Secret Night」のリリース、そして、4月に決定した大阪でのコンサートを前に、彼ら自身が選曲したフェイバリットソングに充満する〝ロック・ファンWANDS〟の姿から、〝ロックバンドWANDS〟を、より深く感じたいと思う。

【上杉 昇】

予言者の歌（「オペラ座の夜」より）・INNUENDO（「イニュエンドウ」より）／Queen

73年にイギリスでデビューしたブリティッシュ・ハードロックの代表的バンド。ヴォーカリスト、フレディ・マーキュリーのカリスマ性とクラシックから影響を受けたソングライティング、ギターオーケストレーション、オペラチックで重厚なコーラスハーモニーを多用したセンスあふれるアレンジなど、独創的なサウンドを聴かせた。残念ながら91年のフレディのエイズ死によりバンドは活動を停止したが、現在でも彼らに影響された数え切れないミュージシャンは生き続けている。この2曲はクイーンのナンバーの中でも比較的重くドラマチックなタイプ。上杉の音の好みが分かるような気がする。

HEART SHAPED BOX（「イン・ユーテロ」より）／NIRVANA

88年、オルタナティヴロックの聖地シアトルからデビューしたトリオバンド。ギタリストでありヴォーカリストでもあるカート・コバーンのカリスマと、ポップなメロディーを持ちながらも、破壊的なギターをフューチャーした重く憂うつなサウンドで若者の大きな支持を受けていた。94年、ショッキングなカートのライフルでの自殺により、バンドはその短く激しい歴史を閉じた。上杉はこのヘヴィーな音のみでなく、カート・コバーンというヘヴィーなカリスマに対しても共感しているのかも知れない。

OF CORSE（「リテュアル・デ・ロ・ハビテュアル」より）／JANE'S ADDICTION

88年にデビューしたオルタナティヴ系バンド。メタルともファンクとも言えそうなタイトなビートに絡むノイジーなギターと、ペリー・ファーレルのヒステリックな歌声。ジャンル分けできない方向性不明なそのサウンドは、神経を覚醒するかのようで、たくさんの中毒患者を生んだ。バンドは91年に解散したが、ペリーはPORNO FOR PYROSを結成し、現在も〝危ない〟活動で注目されている。

PACKIN'25・BLOOD RAG（「ポルノ・フォー・パイロス」より）／PORNO FOR PYROS

その奇才ペリー・ファーレルが92年に結成。彼の呪文を思わせる超個性的なヴォーカルと、ある時はノイジーに、ある時は繊細に神経をさかなでるサウンドは麻薬的で不可思議な世界を見せてくれる。ペリー・ファーレルも彼のアイドルなのか。

この選曲を見ると〝ヘヴィー〟〝過激〟という言葉がイメージされる。WANDSが「世界が終わるまでは…」、そして「Secret…」で感じさせた重さが今後どう進化していくのか、かすかな予感もするが……。

【柴崎 浩】

BURNING WATER・DREAM OUT, DREAM IN・SLAVE MY PASSION（「バーニング・ウォーター」より）／BURNING WATER

L.A.のトップクラスのセッションギタリスト、マイケル・ランドウが自身の音楽を追求するべく93年に結成。70年代の熱さを感じさせる骨太なブルース・ロックは、荒削りにうねっている。多くのミュージシャンがこのアルバムを愛聴しているという。「Secret…」での柴崎のギターサウンドやフレーズに感じられる同質の〝骨太さ〟は今後、WANDSの重要な顔になって来るのだろう。

JUDY（「テールズ・フロム・ザ・バルジ」より）／MICHAEL LANDAU

マイケル・ランドウがBURNING WATER結成以前の90年にセッション活動のかたわら発表したソロ・アルバム。このころはブルースというよりも浮遊感のあるフュージョンタッチな大人のギター・インストゥルメンタルを聴かせる。テクニックも完璧だ。

SOUL CHILD（「トリック・オア・トリート」より）／PAUL BRADY

アメリカのAOR(アダルト・オリエンティッド・ロック＝大人向けロック)の渋い男性シンガー。このアルバムには全編ギタリストとしてマイケル・ランドウが参加している。彼はたぶんシンガーよりもツボを心得たギタープレイに注目しているのだろう。柴崎のランドウへの傾倒ぶりがうかがわれる。

紫の煙（「クロニクル」より）／PAUL RODGERS

68年イギリスに登場した伝説のブルースロックバンド、フリーのヴォーカリストであるポール・ロジャース。そのパワフルで、霧のかかったようなディープな声は日本人のわれわれにもブルースの何たるかを教えてくれる。フリー解散後バッドカンパニー、ファームといったビッグバンドを経て現在はソロ活動中。この曲には元ジャーニーのギタリスト、ニール・ショーンが参加し、ブルージーで生きているかのようなフレーズを聴かせている。

ANIMAL（「グレイテスト・ヒッツ」より）／TOTO

L.A.の有名セッションミュージシャン、スティーブ・ルカサー(G)、ジェフ・ポーカロ(Ds)、デヴィッド・ペイチ(Key)などによって78年に結成された職人バンド。バラード、ファンキーからハードロックナンバーまで、ポップなサウンドの中に高度なテクニックやアレンジのセンスを聴かせる。

このルカサーと先述のランドウはL.A.屈指のギタリスト。ニール・ショーンも名手と言われるギタリスト。当然のことながら、ギタリストが気になる柴崎である。

【木村真也】

MASQUERADE・LIFT ME UP・SILENT TALKING（「結晶」より）／YES

69年イギリスからデビューしたプログレッシブ・ロックの代表的バンド。メンバー各自の超絶テクニックと、クラシックやジャズ等の要素を巧みにロックに取り入れた楽曲やサウンドは正しく進歩的で、当時は小さなオーケストラとまで呼ばれた。メンバーチェンジに伴いサウンドをポップに変化させながら現在も第一線で活躍している。

やはりキーボードプレイヤーはキーボードアレンジに凝ったプログレものが好みということか。セレクトされた曲のキーボードは複雑ではないが、少ない音数で印象的なフレーズを聴かせる。静から動への曲の流れも素晴らしい。

SPEND THE NIGHT（「千年伝説」より）／EARTH WIND & FIRE

69年アメリカはシカゴで結成され、71年にデビューした黒人グループ。ジャズ、ロック、ソウルといった様々な音楽の要素を柔軟に取り入れたファンキーでグルーヴィーなサウンドで世界的な人気を得た。全くの余談ながら、「宇宙のファンタジー」「ブギー・ワンダーランド」などのヒット曲は当時の日本のディスコで欠かせない曲だった。バンドは現在もコンスタントに活動中。

いわゆるブラック系のバラードだが、その楽曲の良さと同時に散りばめられたセンス抜群のシンセサウンドが印象的。

いい楽曲を更に盛り立てるセンスあるプレイに敏感な木村。彼の音に対する冷静なバランス感覚は、新しいWANDSサウンドでも実証されている。

（カッコ内は収録アルバム）

（文・西原 朗）

J-ROCK HISTORY BUCK-TICK

歌の前にあるタバコ屋
か？」のひと言で、一つ
は、今井寿。今まで
興味があったのだが
触発され、幼なじみ
そして、一番気心の
した自分の部屋に出
だった。

「やろーぜ」と返事を返したのは、樋口豊と櫻井敦司。更に、樋口はヴォーカリスト候補として星野英彦に声を掛けた。ヴォーカルにはアキラが決まっていたのだが、星野もギタリストのつもりで返事をしていた。ヴォーカルはアキラ、ギターは今井と星野、ベースには樋口、ドラムが櫻井という編成が半ば強引に決定。ヴィジュアル面にこだわり、髪を立て、派手なメイクを施し、演奏よりも過激なステージングと常に『カッコいい』を念頭に置いたバンド『非難GO-GO』(名付けたのは今井)が誕生した。このバンド、その名の通り非難を浴びまくったのは言うまでもない。なにせ、初ライブが結成から一週間後の『リトルロック』というイベント。もちろん、メンバーも楽器を手にして一週間だった。特に今井は左利きなのに右利き用のギターを使っていた(普通の人と弦が逆になり、コードも上下逆になる)。

そんな彼らだが、バンドに夢中になり毎週末の練習を楽しみにするようになっていた。この年の春に高校を卒業した今井とアキラは群馬を離れ、東京の専門学校に通っていたが、週末にはバンドの練習のために戻ってきていた。やがて、東京へは戻らなくなってしまったが…。

バンド結成から三ヵ月。スターリン等のパンク・バンドのコピー中心だったレパートリーにオリジナル曲が生まれ始めた。そして今井が初めて曲を作ってきた(「PLASTIC SYNDROME TYPE 1」)時、バンド名も『BUCK-TICK』へと変わった。命名したのは、やはり今井である。コンスタントに樋口がスケジューリングするライブをこなし、一年後には地元ではライブハウスを卒業し中ホールを満杯にできる人気バンドに成長していた。そうなると当然のことながら「東京に出てプロになりたい」と思い始めた彼ら。この年の暮れ『ポプコン(ヤマハ・ポピュラー・コンテスト)』の高崎地区大会で特別賞を受賞し、その熱は更に上昇した。

85年の春、高校を卒業した樋口と星野は今井達を追って東京の専門学校に入学し群馬を離れた。しかし、父親に引け目を感じた櫻井は地元で就職。今度は週末に櫻井が東京へ通うこととなった。東京へ来て三ヵ月後、樋口がデモ・テープを持って都内のライブハウスへ売り込みを開始。そして、初ライブの日が決定した。8月4日の日曜日、新宿ＪＡＭではあったが昼の部だった。やがて新宿ＪＡＭを拠点にライブ活動が出来るようになり、櫻井も仕事を辞めて上京してきた。

11月にはBUCK-TICKが企画する「BEAT FOR BEAT FOR BEAT」というギグを行い、バンド活動も動員はまだまだだったが軌道に乗り始め、サウンドも過激な曲からメロディアスでポップな曲中心へと変わって行った。しかし、そうなると過激なサウンドに合っていたアキラのヴォーカル・スタイルや声質が、メロディアスな曲になると粗さを感じさせるようになってしまい結局、彼は脱退。

新しいヴォーカリストの候補を今井はメンバーに告げたが、ドラマーとしての限界を感じヴォーカルを志願していた櫻井の熱意が通じ、新ヴォーカリストに櫻井が決まった。櫻井がヴォーカリストになると、今度はドラマーを探さなくてならない。しかし、メンバーの思いは同じだった。BUCK-TICKのドラマーは、樋口の兄、ヤガミ・トールしかいないと。『トール』は彼の亡くなった兄の名、『ヤガミ』はゴロがいいから付けたという『ヤガミ・トール』は彼の本名ではない。勿論、樋口豊の兄なので名字は『樋口』なのだが、名前は公表されていない。音楽とプライベートを完全に分けて考える彼のポリシーがあり、それだけ音楽に執着していることが分かる。そんな彼がプロ志向のバンド『SP』を解散させ、音楽を趣味の範囲で楽しむようになってしまっていたが、以前から演奏は下手だが今井の作る曲にセンスを感じていたBUCK-TICKにヤガミは賭けてみた。12月の新宿ＪＡＭのステージがこのメンバーで初めてのライブとなった。

86年3月。パンク系音楽誌「DOLL」で紹介され、その小さな記事によって思った以上に動員数が急増し、メンバー全員で次の展開を考えるミーティングの日々が続いた。そして、その答えが『レコード制作』だった。発売元も発売予定日も決めることなく、ヤガミの知り合いの「ＹＡＭＡＨＡ日吉センター・スタジオ」で、わずか1日で「PLASTIC SYNDROME TYPE 2」「TO-SEARCH」「ONE NIGHT BALLET」「SECRET REACTION」の4曲をレコーディング。

そして運命的な出会いとなる、7月の新宿屋根裏。この日の彼等のライブが『太陽レコード』というインディーズのレーベルを持つサワキカスミ氏の目に止まった。サワキ氏は別のバンドを見に来ていたのだが、BUCK-TICKの感性とパワーに惹かれたらしい。そして、サワキ氏のプロデュースで10月21日にBUCK-TICK初の音源、A面に「TO-SEARCH」、B面に「PLASTIC SYNDROME TYPE 2」のシングル盤を発表した。しかも、レコード発売記念ギグを念願の新宿ＬＯＦＴで行ったのだった。このレコードはインディーズ・チャートで6位を記録し、その後の動員数の増加は言うまでもないであろう。

87年1月21日から2週間で、前回と同じスタジオで、今度はアルバムのレコーディングが行われた。延べ１００時間で13曲。睡眠時間も1日2～3時間というハード・スケジュールの中「HURRY UP MODE」は完成した。発売日は4月1日。インディーズ界で初のＣＤ盤(ＬＰより2曲多く「VACUUM DREAM」「NO NO BOY」を収録)も同時にリリース。このアルバムの発売記念ギグに選ばれた会場は豊島公会堂。キャパシティーは９００人。この無謀と言われたギグは『バクチク現象』と名付けられた。そして、サワキ氏のアイデアで黒の白抜きで『バクチク現象　4月1日豊島公会堂』と書かれたステッカー約３０００枚が渋谷と原宿を中心に電柱、公園など目に付く至る所に張り巡らされた(また、サワキ氏は『世界で三番、日本で一番』というキャッチ・コピーをBUCK-TICKに付け

ていた」。この無謀なギグ、しかし、BUCK-TICKは約８００人のファンを動員。その勢いのままツアー『HURRY UP MODE TOUR』を決行し、関西方面まで足を延ばした。その甲斐あってか、「HURRY UP MODE」はインディーズ・チャート１位に輝いた。

このころ、サワキ氏の元へ、いくつかのメジャー・レーベルからデビューの話が舞い込むようになっていた。BUCK-TICKは、『髪型やメイク等のバンド・イメージはこのまま』『メンバーは現在の５人のまま』『レコーディングでは自分達だけでプレイする』『セルフ・プロデュース』等の条件を提示し、それに応じられるレコード会社との契約を望んだ。そして、6月12日の渋谷ライブインで行われた『バクチク現象Ⅱ』と名付けられたギグの中で、ビクターからデビューすることが発表された。結成からわずか３年後のことである。

7月26日からレコーディングに入り、発売日は11月21日に決定。そのアルバムに先駆けて6月12日のライブ・ビデオ『BUCK-TICK現象 at LIVE INN』が９月21日にリリースされた。いかにもBUCK-TICKらしくヴィジュアル・デビューを果たしたのだった。雑誌等に登場し始めたことによって彼らの髪型やファッション、またビート系のサウンドが話題となり、このビデオはオリコン・チャートで初登場４位を記録した。

9月20日から全国ツアー「バクチク現象ツアー」を行い、東北へも初めて訪れた。客入りは散々なものだったが、逆にそれが彼らを力付けた。12月11日にはデビュー後初のライブが決定。会場は日本青年会館でキャパシティーは約１３００人。しかし、チケットは発売２日後にＳＯＬＤ　ＯＵＴとなった。11月21日、『こんなもんかと思っていると頭にチョップが来るゾ』のキャッチ・コピーでリリースされた、デビュー・アルバム『SEXUALxxxxx!』は初登場33位を記録。当時では新人バンドで33位は異例な売り上げだった。そして、12月11日の『バクチク現象Ⅲ』と名付けられた日本青年会館も成功を納め、12月31日には『ROCK'N' ROLL BAND STAND』で新潟産業振興センターで５０００人の観客の前に立ち、他のバンドのファンに大きなインパクトを与えた。

88年。３月にリリース予定のミニ・アルバムのレコーディング中ではあったが、１月24日の樋口の誕生日に新宿ＬＯＦＴで『BLUCK-TLICK』というBUCK-TICKがモデルになった少女漫画『HEARTS（ハーツ）』（作・姫野くみ）に登場するバンド名でシークレット・ライブを行った。２月21日にはビデオ・クリップ集『MORE SEXUAL!!!!!』をリリース。３月21日には人気の高かった『HURRY UP MODE』に収録されている『ROMANESQUE』のニュー・バージョンを含む４曲入りのミニ・アルバム（ＣＤは５曲入り）を発表。ＬＰ盤の初回プレス分のみジャケットに付いているミシン目に沿って切ると内側にメンバーの写真がプリントされており、更にそれが２種類存在し、買うまでどちらか分からないという凝りようだった。

３月から33カ所を回る全国ツアーを行い、なおかつ『東北ロック・サーキット』にも参加。それと並行してセカンド・アルバムのレコーディングも行うという超過密スケジュール。そして、６月21日。セカンド・アルバム『SEVENTH HEAVEN』をリリースし、オリコン・チャート初登場３位を記録。セカンド・アルバムの発表も束の間、年内にもう一枚リリースしなければならない彼らは、サード・アルバムのレコーディングのため、９月から１カ月間ロンドンへと渡った。

レコーディングを終え帰国後のスケジュールは前アルバムでのツアーだった。頭を切り替えて、10月13日の渋谷公会堂を皮切りに全国36カ所のツアー。そして、ツアー・ファイナルは武道館2DAYS（チケットは即日完売）。更に10月26日にはファースト・シングル『JUST ONE MORE KISS』をリリース（初回プレスのレコードはポスタージャケット、ＣＤはカレンダー付き）。当然のごとく、ベスト10内にランク・イン。ＴＶの音楽番組への出演も積極的に行い、たった１曲、３分ばかりのスポットではあったが、派手なビジュアルとポップなナンバーで、ブラウン管の向こうのロックに縁の無い人達にもインパクトを与えたのだった。この年の暮れの12月31日には『レコード大賞新人賞』も受賞。

89年１月18日、サード・アルバム『TABOO』を発表。このアルバムは予約だけで25万枚のセールスを記録し、オリコン初登場１位を飾った。そして同、19、20の両日。バンド結成約５年、デビュー１年と４カ月で武道館のステージに立った。

『SEVENTH HEAVEN TOUR』が終了すると、即『TABOO TOUR』に入ったBUCK-TICK。そのツアーに入る前の２月３日には、新宿厚生年金会館のイベントに出演。それは、アンジーとLA-PPISCHによって盛り上げられた『P-ROCK（ポコチン・ロックの略）』のイベントだった。BUCK-TICKはLA-PPISCHの曲を歌い、そこには普段けっして見られないハメを外したメンバーの姿があった。当然、BUCK-TICKの出番ではビデオ撮影、写真撮影が一切禁止されていた。

４月21日。今井が麻薬取締法違反（ＬＳＤの不法所持）で逮捕という、ショッキングなニュースが流れた。奇しくも武道館のライブ・ビデオの発売日だった。その日以降のBUCK-TICKのスケジュールは白紙となり、今井を除くメンバーには分刻みの過密スケジュールから一転、空白の日々が訪れたのだった。しかし、この事件によってファンは、よりBUCK-TICKを愛し、今井のカリスマ性が高まった。また、その後のBUCK-TICKのサウンドを確立するための時間ができたと言えよう。もし、あのままハードなスケジュールをこなしながらレコーディングやライブ活動を行っていたのなら、現在のようなサウンドが確立できただろうか？　バンドの存続も危うかったかも知れない。BUCK-TICKの音楽性が高められたことも事実だ。

再び東京の街の至る所に『バクチク現象』と書かれたステッカーが張られた。そして、12月29日、東京ドームでBUCK-TICKは復活を遂げたのだった。ライブ後半で櫻井の叫んだ『つぶされやしねーぞ！』という声が、この事件で今後の活動を心配していたファンへのうれしいメッセージとなって届いたことであろう。80年代の最後を飾る最高のライブとなったことは言うまでもない。

90年に入ると今までの借りを返すかのように、１月24日にシングル『悪の華』、２月１日には４枚目のアルバム『悪の華』、その１週間後の２月８日には高額なプレミアを付けられて売買されていた『HURRY UP MODE』のリミックス盤を立て続けにリリース。それらすべてがオリコン初登場１位を飾った。事件後の復活を飾るアルバム・タイトルが『悪の華』とジャケットから漂うダークで危険な香りが、いかにもBUCK-TICKらしい。また、４月にはアルバム全曲を映像化したビデオクリップ集『悪の華』を発表し、この作品もオリコン初登場１位を記録した。８月には『A MID SUMMER NIGHT'S DREAM』と名付けられた屋外コンサートを東京と大阪で開催し、12月に『5 FOR JAPANESE BABIES』と名付けられた体育館クラスのツアーを行い、スケール感を増して復活したBUCK-TICKの勇姿をファンの前に現したのだった。

91年。２月21日にアルバム『狂った太陽』をリリース。11月にはデビュー当時からのビデオクリップを集めたヒストリークリップ集も発表。10月には星野のソロ・ワークや今井がSOFT BALLETの藤井麻輝と組んだインダストリアル・ノイズのユニット『SCHAFT』のナンバーを収録したオムニバス・アルバム『DANCE 2 NOISE 001』がリリースされ、両者共BUCK-TICKとは全く異なったエレクトロニクス・サウンドでファンを驚かせた。また、DER ZIBETが10月21日にリリースした『思春期Ⅱ』に櫻井と今井がゲスト参加し話題となる。11月27日に東京、12月９日は名古屋、大阪は12月11日というクラブクアトロでのクラブ・ギグも決行。久々のライブハウスでの熱いライブで懐かしいナンバー（『PLASTIC SYNDROME TYPE 2』等）も披露され、運良くチケットを入手できたファンを喜ばせた。

92年。３月21日にベストアルバム『殺シノ調べ』をリリース。しかし、原曲の再録などではなく、全曲新アレンジ新録音で、原曲の影を留めていない曲もあり、更に、アルバムのサブ・タイトルは『This is NOT Greatest Hits』と付けられた。同日に発売された『DANCE 2 NOISE 002』には、櫻井が英国のニューウェイヴ・ユニットXYMOXと組み参加。収録曲の『予感』は隠れた名曲ではあったが、ベスト盤の話題に喰われた感があったのは残念だった。９月10、11日には横浜アリーナで『Climax Together』と名付けられたライブを行い、その模様を収録したライブ・ビデオが12月に発表された。

93年。５月19日に新たなBUCK-TICKの方向性を打ち出したシングル『ドレス』を発表。６月23日に約２年ぶりとなるオリジナル・アルバム『darker than darkness -style 93-』をリリース。このアルバムには、シークレット・トラックとして、93トラック目に『DARKER THAN DARKNESS』というナンバーが収録されている。

94年。約５年ぶりとなる野外ワンマン・ライブ『シェイプレス』を行い、LUNA SEAとSOFT BALLETと共に『L.S.B.』というイベントで全国５カ所を回った。８月24日には１００ページに及ぶコンセプチュアル写真集とBUCK-TICKのナンバーを海外のミキサーによって料理（？）された究極のリミックス・アルバムを発表。収録された楽曲は原形を留めておらず、ヴォーカルも排除されたナンバーがほとんどで、果たしてファンにとって本当にうれしいアルバムだったのか（完全限定生産で価格が５０００円）は疑問だが、日本のロック・シーンにおいて問題作となり、新しいジャンルの道を広げた功績は大きい。また、櫻井と星野がDER ZIBETのヴォーカリストＩＳＳＡＹのソロ・アルバムにゲスト参加し、今井も『DANCE 2 NOISE 001』で結成したSOFT BALLETの藤井とのユニット『SCHAFT』の活動を本格化。アルバムを発表、東京と大阪でのライブ、アルバムのリミックス盤の発表やライブ・ビデオのリリースとBUCK-TICKやSOFT BALLET以上のサイクルで活動を展開した。

95年。現在は５月15日リリース予定、２年ぶりのアルバムのレコーディング中である。

基本はポップなのだが、けっしてヒット・チャートに上がるようなカラオケ用のポップ・ナンバーでなく、独自のポップ性を追求しアーティスト志向な活動を続けるBUCK-TICK。それでいてシングル・ヒットをキッチリ飛ばしている、日本で希少なロック・バンドである。『TABOO』『悪の華』『狂った太陽』と来て『darker than darkness -style 93-』にたどり着いたダークなサウンド。現在レコーディング中のアルバムがどんなものになるのか非常に楽しみである。きっと、いい意味で期待を裏切るすごい作品が届けられることであろう。

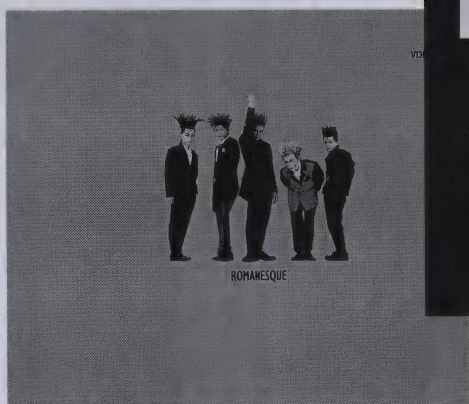
（文・樹音欅橡）

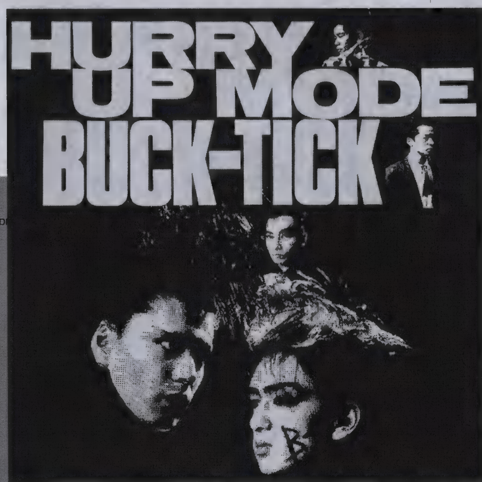












●「BUCK-TICK」(86年10月21日発売、インディーズチャート最高6位)
収録曲：A面「TO-SEARCH」、B面「PLASTIC SYNDROME TYPE 2」
「TO-SEARCH」は、演奏レベルを苦にさせない勢いがあってロカビリーっぽくてカッコいい曲。曲にスリルを感じる。「PLASTIC SYNDROME TYPE 2」は、サビの部分を櫻井が鼻歌のように歌っていたメロディーを聴いた今井が曲に仕上げたというナンバーで、初期のBUCK-TICKの代表曲。アルバム(「HURRY UP MODE（殺シノ調べ）」)とは少しヴァージョンが違う。

●「HURRY UP MODE（殺シノ調べ）」(87年4月1日発売、インディーズチャート最高1位)
収録曲：「PLASTIC SYNDROME TYPE 2」「HURRY UP MODE」「TELEPHONE MURDER」「FLY HIGH」「ONE NIGHT BALLET」「VACUUM DREAM」「NO NO BOY」「MOON LIGHT」「FOR DANGEROUS KIDS」「ROMANESQUE」「SECRET REACTION」「STAY GOLD」
メタル系のアーティストが幅を利かせていたインディーズ・シーンに発表されたアルバム「HURRY UP MODE」は、派手なヴィジュアルとビート系のポップなサウンドで、それらのファンまでも多くつかみ、見事インディーズ・チャート1位に輝いた。
もう今ではプレイされなくなってしまった名曲とも言えるメロディアスなナンバーが収録され、変則的なリズムの曲からモータウンやスカっぽいものまで、5人のメンバーが持てるアイデアをすべて出し尽くしたような楽曲が聴ける。

●「SEXUALxxxxx!」(87年11月21日発売、オリコンチャート最高33位)
収録曲：「EMPTY GIRL」「FUTURE FOR FUTURE」「DREAM OR TRUTH」「DO THE "I LOVE YOU"」「ILLUSION」「SEXUALxxxxx!」「SISSY BOY」「MIS-CAST」「HYPER LOVE」「MY EYES & YOUR EYES」
数カ月前に発表したインディーズ盤「HURRY UP MODE」と比較すると雲泥のクオリティーの差を感じさせるものの、プロ・デビューのアルバムとして聴くと、勢いだけで御世辞にもうまいといえない演奏をヤガミのドラムが引っ張っているという印象を受ける。しかし、ポップでキャッチーなメロディーでセンスのいい曲は並の新人バンドのデビュー・アルバムでないことを実証している。

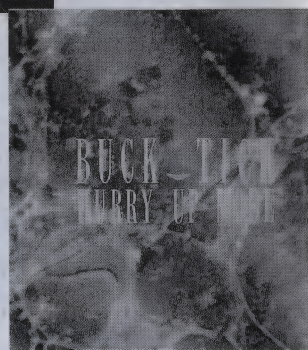
●「ROMANESQUE」(88年3月21日発売、オリコンチャート最高25位)
収録曲：「MISTY ZONE」「ROMANESQUE」「AUTOMATIC BLUE」「HEARTS」「ROMANESQUE（SENSUAL PLEASURES MIX）」
ライブで人気が高かった2曲(入手不可能状態の「HURRY UP MODE」に収録されていた「ROMANESQUE」のニュー・バージョン、未発表曲の「AUTOMATIC BLUE」)と新曲2曲を含む4曲入りミニ・アルバム(「ROMANESQUE（SENSUAL PLEASURES MIX）」はＣＤのみ)。演奏レベルは相変わらずだが、それが逆に個性的なフレーズを生み出しているとも言える。「ROMANESQUE（SENSUAL PLEASURES MIX）」は、後の「殺シノ調べ」「シェイプレス」を彷彿させるリミックスが施されている。

●「SEVENTH HEAVEN」(88年6月21日発売、オリコンチャート最高3位)
収録曲：「FRAGILE ARTICLE」「…IN HEAVEN…」「CAPSULE TEARS -PLASTIC SYNDROME TYPE 3」「CASTLE IN THE AIR」「ORIENTAL LOVE STORY」「PHYSICAL NEUROSE」「DESPERATE GIRL」「VICTIMS OF LOVE」「MEMORIES…」「SEVENTH HEAVEN」
派手なルックスとポップな曲で爆発的な人気を博し、オリコンチャート初登場3位を記録(アナログ盤はブックレット付きの限定盤もリリースされた)。サウンドは前作の延長線上にあるもので、センスのいい超メロディアスなポップナンバーが聴ける。
また、10曲中5曲の歌詞を櫻井が担当。描写的な今井の歌詞に対し、櫻井の自分の内側の感情を現した歌詞は、バンドのサウンドがダークな方向へと向かった大きな要因なのかも知れない。

●「TABOO」(89年1月18日発売、オリコンチャート最高1位)
収録曲：「ICONOCLASM」「TOKYO」「SEX FOR YOU」「EMBRYO」「"J"」「FEAST OF DEMORALIZATION」「ANGELIC CONVERSATION」「SILENT NIGHT」「TABOO」「JUST ONE MORE KISS」
ロンドン・レコーディングされた3 rdアルバム。前作のレコーディング終了後、すぐにレコーディングが開始されたアルバムではあるが、前作までのポップなサウンドにサイケデリィックなダークさが加わった。これまで持たれていたアイドル的なイメージを打破したアルバムである。BUCK-TICKのサウンドに『ダーク』『デカンダンス』の兆候が現れ始めたアルバムでもある。













●「悪の華」(90年2月1日発売、オリコンチャート最高1位)
収録曲：「NATIONAL MEDIA BOYS」「幻の都」「LOVE ME」「PLEASURE LAND」「MISTY BLUE」「DIZZY MOON」「SABBAT」「THE WORLD IS YOURS」「悪の華」「KISS ME GOOD-BY」

7カ月間の謹慎期間を終え発表したアルバムは、今井が「1920年代の雰囲気を狙った」と言っていたようにレトロなイメージを漂わせながらも、BUCK-TICKが追求する現代的なメロディアスでポップな曲を聞かせる(映画「メトロポリス」のような雰囲気)。しっかりと練って作られただけあってアルバムのクオリティーも高く、ネオアコやスカ調などバラエティーに富んだ楽曲も、BUCK-TICKのサウンドの幅となって吸収されている。だが、イメージの描写のようで退廃的な歌詞に、ちょっとついていけない所もある。

●「HURRY UP MODE (1990 MIX)」(90年2月8日発売、オリコンチャート最高1位)
収録曲：「PLASTIC SYNDROME TYPE 2」「HURRY UP MODE」「TELEPHONE MURDER」「FLY HIGH」「ONE NIGHT BALLET」「MOON LIGHT」「FOR DANGEROUS KIDS」「ROMANESQUE」「SECRET REACTION」「STAY GOLD」

悪徳な業者によって超高額なプレミアを付けられ売買されていたインディーズ時代のアルバム「HURRY UP MODE」(20万円で売られているというのを聴いたことがある)。そんなファンの悲鳴を聴いて、BUCK-TICKが解消。それもリミックスを行い、数段カッコ良くしてリリースされた。

ただアナログ盤のリミックスだったので、CDのみに収録されていた「VACUUM DREAM」「NO NO BOY」が聴けないのが残念。だから今でもCD盤の方のプレミアムは5万円を下らない。

●「狂った太陽」(91年2月21日発売、オリコンチャート最高2位)
収録曲：「スピード」「MACHINE」「MY FUNNY VALENTINE」「変身[REBORN]」「エンジェルフィッシュ」「JUPITER」「さくら」「Brain,Whisper,Hate is noise」「M・A・D」「地下室のメロディー」「太陽ニ殺サレタ」

今までのダークネスなサウンドは変わらないが、重たくのしかかってくるダーク感だけでなく、ストレートでスリリングなスピード感がある。何か、吹っ切れたような独創的各パートのフレーズからも、今までBUCK-TICKの持っていた勢いを出し尽くしたアルバムに仕上がっている。櫻井の歌詞も、型にとらわれず自然な自分の言葉でつづられているようだ。

●「殺シノ調べ」(92年3月21日発売、オリコンチャート最高1位)
収録曲：「ICONOCLASM」「悪の華」「DO THE "I LOVE YOU"」「VICTIMS OF LOVE」「M・A・D」「ORIENTAL LOVE STORY」「スピード」「LOVE ME」「JUPITER」「…IN HEAVEN…」「MOON LIGHT」「JUST ONE MORE KISS」「TABOO」「HYPER LOVE」

自らの選曲で全曲ニューアレンジで、収録されているベスト・アルバム。シングルで発表された曲は原型を重視してアレンジが施されているが、他の曲は完全に原曲のイメージを壊してくれる。普通ベスト盤というのは、ファンよりもファン以外の人へのアピールといった商業的な匂いを放っているのだが、このアルバムをファン以外の人が聴くと違ったイメージを持つかも知れない。

そんな中でも「M・A・D」が異常にカッコ良く、ライブでこのバージョンを狂ったように歌う櫻井敦司の姿を見てみたいと思ってしまった。

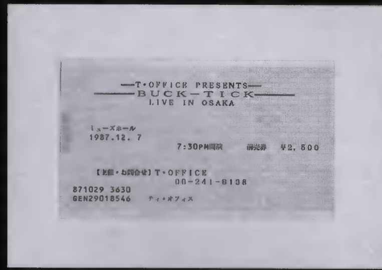
●「derker than darkness -style93-」(93年6月23日発売、オリコンチャート最高2位)
収録曲：「キラメキの中で…」「Deep Slow」「誘惑」「青の世界」「神風」「ZERO」「ドレス」「LION」「Madman Blues ーミナシ児ノ憂鬱ー」「die」「DARKER THAN DARKNESS」

シングルで先行発売された「ドレス」が、現在のJ-ROCKシーンにはない、ダークなポップスで話題を集めたが、アルバム中ではその「ドレス」が一番メジャーっぽく聴こえる。「悪の華」の持つ懐古的で新しいポップさと「狂った太陽」の独創的なスピード感を、うまく取り入れた仕上がりとなっている。リズム隊の斬新なアレンジや、ノイジーにエフェクト処理されたヴォーカルなど、ブラックホール化したサウンドに引きずり込まれそうだ。

●「シェイプレス」(94年8月24日発売、オリコンチャート最高5位)
収録曲：「Jupiter」「D.T.D」「In The Glitter PT1」「Brain,Whisper,Head,Hate is Noise」「Iconoclasm」「In The Glitter PT2」「Killing」「Evil Flowers」「Dress」「Hyper Love」

異国の凄腕ミキサーによってリミックスされたBUCK-TICKのオリジナル・ナンバーは「ニューアルバムだと思って聴いてもらった方が逆にいい」と櫻井がコメントしているほど、曲が元の形を留めていない。生身の人間がサイボーグとして、それもロボットとなって甦ったと表現できるぐらいに、原曲から受けたイメージをサウンド化していると言った方が理解に苦しまなくてよさそうだ。それだけ、パワーアップしたとも言えるが、このサウンドを何人のファンが理解できたのだろうか…。

1987.12.7 心斎橋ミューズホール



PLAY List

1 TO SEARCH
2 VACUUM DREAM
3 PLASTIC SYNDROME TYPE Ⅱ
4 TELEPHONE MURDER
5 MIS-CAST
6 DO THE "I LOVE YOU"
7 ONE NIGHT BALLET
8 ROMANESQUE
9 MISTY ZONE
10 SEXUALxxxxx!
11 SECRET REACTION
12 STAY GOLD
13 FLY HIGH
14 FUTURE TO FUTURE
15 HURRY UP MODE
16 HYPER LOVE
encore
E1 EMPTY GIRL
E2 MY EYES & YOUR EYES
encore
E3 MOON LIGHT

男のファンも目立つ会場内は後方にスペースがあるものの熱気があふれている。客電が落とされ、大きな歓声の中メンバーが登場。1曲目の「TO SERCH」で、もうパニック寸前までファンのテンションが一気に上昇した。曲の途中でアッシが「押すんじゃねーよー」と注意するほど、過熱したステージ前方。案の定、曲が終わると中断。「もうちょっと下がれよ。2曲目できないよ」「人が倒れているのに下がれねぇのか」「後に余裕があるなら、少し下がろうぜ」とステージ上からも再三アッシがファンに指示を出すほどだった。

ステージ前方では「下がらんかー!」と怒鳴るスタッフの声も聞こえてくる。倒れた女の子がステージに上げられ、せっかく上昇したテンションも下がってしまうほどの長い中断が続いた。アッシ自身も本当は、こっちはうれしいが、そみたいのがあると雰囲気がガラッと変わっちゃう。スタッフが困っているうちは、まだいいよ」と彼のテンションも下がってしまったようだ。

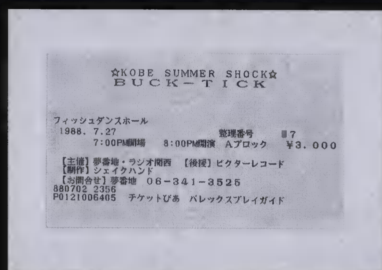
ようやく2曲目がプレイされたものの妙な緊張感が残り、どうもぎこちない。しかし、「運ばれた子に本当に一いだ。今から本当に始めよう! 今の曲はナシだー」とアッシのひと言で始まった「PLASTIC SYNDROME TYPE 2」で、今までのもやもやしていた何かが吹っ切れ、バンド側もファン側も、いつもの調子を取り戻した。立て続けにノリのいいナンバーをファンに浴びせ、取り戻したテンションが再び上昇しはじめた。それを察してか「ONE NIGHT BALLET」が終わるとアッシが「その辺ちょっと余裕ない? 後」とパニック状態になる前に、前方で潰れかけているファンを気遣う。ステージ前方から「潰れちゃうよー」と悲鳴に似た女性の声も聴こえてくる。再び中断寸前になってしまったためか「楽しんでほしい。苦しんじゃ、つまんない」とトーンを落としてMCを取るアッシに、逆に「あっちゃん、元気出して」とファンに力付けられていた。

そのひと言で気を取り直したのか「楽しめよー!」と大声で、自分も気合いを入れるかのようにファンを煽り「ROMANESQUE」へ。人気の高い曲にファンも気持ちも良く上がっている感じだ。トールのカウントで始まった「SEXUALxxxxx!」で、一段とノリも良くなり前方へ押し寄せるファンもいなくなった。

「[illegible]してくれる奴が増えてくれー」とタドタドしいアッシのMCとメンバー紹介が終わると後半。おなじみとなった「FLY HIGH」の掛け合いで一体感が生まれた場内は、もうパニックに陥ることなくアッシの「高へー、上にー」という指示通り、ファン自分のスタンスを決めていく。アッシもステージ上から「女に負けるな男ー、男に負けるな女ー」と煽り、「OK? Oneself to the fly high ~」の掛け合いで大きな盛り上がりを見せた。

本編最後は「HYPER LOVE」。メンバーが退場すると、すぐさまアンコールの手拍子が巻き起こった。アンコールも2回行い、最後の「MOON LIGHT」が終わると「サンキュー」と本当に心底から言っていると思えるアッシのひと言を残しメンバーは退場。再びアンコールの手拍子が起こったが客電が灯された。

1988.7.27 神戸フィッシュダンスホール
~KOBE SUMMER SHOCK~



PLAY List

SE FRAGILE ARTICLE
1 ...IN HEAVEN...
2 EMPTY GIRL
3 PHYSICAL NEUROSE
4 DO THE "I LOVE YOU"
5 MIS-CAST
6 DREAM OR TRUTH
7 MISTY ZONE
8 ROMANESQUE
9 VICTIMS OF LOVE
10 HYPER LOVE
11 SEXUALxxxxx!
12 TO SEARCH
13 MEMORIES...
14 MY EYES & YOUR EYES
encore
E1 FLY HIGH
E2 FUTURE TO FUTURE
encore
E3 AUTOMATIC BLUE

ライブ会場には全く向いていない神戸フィッシュダンスホールの柱の多い空間。柱を避けてステージは作られているものの見る場所によっては、柱でステージが区切られたり、メンバーが陰に隠れて見えなくなってしまう。そんな中でBUCK-TICKを見なければならなかったのは残念だが、オールスタンディングでライブハウスと同じ環境で見られたのは、ステージ前方で暴れるように飛び跳ねていたファンにとってはうれしかったことだろう。

定刻を少し回って客電が落ちSEの「FRAGILE ARTICLE」(アッシの声が入っていないヴァージョン)が場内に流れた。まだ、ステージ上にはだれも居ないのにファンはメンバーの名前を叫んでいる。その声も女の子の黄色い声というよりも、悲鳴のように甲高い声で絶叫しているようだった。やがてトール、ユータ、ヒサシ、ヒデが姿を現した。1曲目「...IN HEAVEN...」のイントロが流れるとアッシが登場。泣き叫ぶような「アッシー」「あっちゃん~」という歓声が起こったのは言うまでもないだろう。また、ヒサシのギターソロでも、それに近い歓声が沸き起こった。場内は「I CAN'T…」とアッシに合わせての大合唱となり、1曲目からテンションは高まった。

バンド側は、この場内のテンションを更に高めるかのようにノリのいいナンバーを立て続けにプレイ。それだけBUCK-TICKのメンバーのテンションも高い。1曲の演奏が終わる毎に沸き起こるファンの声援の中には「アッシー」という男の力強い声援もあった。そして、「最高に狂っちゃいそうな、この曲をいくぞー」と「PHYSICAL NEUROSE」へ。トールとユータの樋口兄弟の息の合ったリズム隊から繰り出される激しいビートに、ファンは体を預け飛び跳ね続けていた。

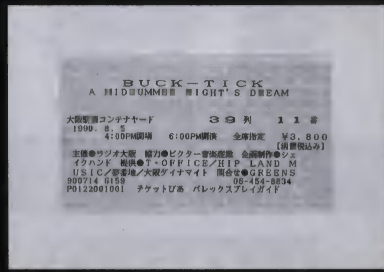
MCでは前回のツアーで神戸に訪れてメリケン波止場に行った話で「男5人でアベックがジャグジャグいる所に行って、寂しかった」「俺は男でも女でもいい(笑)」と一瞬ではあったが和やかな雰囲気を漂わせた。

中盤は「VICTIMS OF LOVE」「HYPER LOVE」と重たいナンバーを立て続けにプレイ。現在のダークなサウンドの片鱗を感じさせるような曲順。これにファンは大声で歌っていた。また、アッシのうめき声で始まる「SEXUALxxxxx!」でだが、隣にいた女の子二人組の「何言うとん?」「わからん」という会話を耳にした。

ノリのいいファンと、ノリのいいアッシ。「神戸はずっと上品な街だと思っていた。街もきれいだし、家もカッコいいし、海もきれいだし。そうじゃなくていいから…。そうじゃない人だから、いいこれで」「『SEVENTH HEAVEN』6月21日発売の…。自慢話するけどレコード部門で一番になった。どうも、ありがとう」といったMCを入れ、メンバー紹介。その後「いくぞー」アッシのひと言で後半が始まり、本編ラストの「MY EYES & YOUR EYES」までテンションの高いライブが繰り広げられた。

メンバーがステージから去るとアンコールの手拍子が起き、ファンの「ヒデさん~」「アッシー」とメンバー名を呼ぶ声が場内のあっちこっちで上がっている。更に、途中コールする声が「アッシ」コールに変わる。アンコールの「FLY HIGH」では、曲の途中で歌詞を忘れたアッシが「忘れた!!」と大声で自白する場面もあり、違う意味でもファンを楽しませた。最後の「AUTOMATIC BLUE」が終わっても、アンコールの手拍子は続けられたが、「本日のコンサートは…」というアナウンスがそれを遮った。

1990.8.5 ＪＲ大阪駅西コンテナヤード
～ A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM ～



PLAY List

1 悪の華
2 SEXUALxxxxx!
3 DO THE "I LOVE YOU"
4 HURRY UP MODE
5 MISTY ZONE
6 ROMANESQUE
7 ILLUSION
8 幻の都
9 HYPER LOVE
10 VICTIMS OF LOVE
11 TABOO
12 ANGELIC CONVERSATION
13 FLY HIGH
14 NATIONAL MEDIA BOYS
15 LOVE ME
encore
E1 SILENT NIGHT
E2 ...IN HEAVEN...
encore
E3 KISS ME GOOD-BYE
E4 JUST ONE MORE KISS
E5 MOON LIGHT

BUCK-TICK初の[illegible]大阪で行われた野外コンサート・コンサート『A MIDSUMMER NIGHT'S DREAM』。高いビルが立ち並ぶ大阪の雑踏の中に、一夜だけではあるが異空間が生まれた。訪れたファンも夏の暑さの中、黒ずくめの服装が多い。中にはパンク・ファッションで身を固めた男性ファンの姿もあった。通常の街中で見られないファッションが目の前に広がっている。

場内に流れていた音楽がSEへと変わり、スモークの立ちこめる大きなステージ・セットの奥からトール、ユータ、ヒデ、ヒサシが登場。ファンの大きな歓声の中、1曲目の「悪の華」のイントロがプレイされるとマグネシウムがたかれ、アッシがステージに現れた。座席に立ち上がるファンや危ないノリ方をしているファンを両っ端から、注意して回る警備員。女の子はサウンドよりも、メンバーが目の前にいることに興奮状態に陥っているようで、メンバーの名前を呼ぶ声が、超音波のように甲高く響いている女の子もいる。曲の途中で正気を取り戻したファンは、今度はアッシと一緒に歌い出す。そんな中、入場前に見たパンク・ファッションで身を固めた男性ファンが警備員に連れて行かれるのを目撃した。やはり危ないノリを見せていたファンは彼だったようだ。

アッシのシ[illegible]「SEX!」の[illegible]った「SEXUALxxxxx!」は人気の高い曲だけにファンの一緒に歌う声が凄くて、アッシの声が聴こえなくなるほどだった。しかし、ステージの上を所狭しと左右に駆け回るアッシが、自分の方に来ると、その声は再び歓声の波のような絶叫に変わる。

MCを挟み、ヒサシのギターが鳴り響き「HURRY UP MODE」へ。再び大合唱。ノリのいいナンバーが立て続けにプレイされ、客席のファンの熱狂ぶりもすごい。

今度は、エスニックな音楽が流れ、BUCK-TICKの中でも異色のナンバー「幻の都」。この辺りから独自の世界へファンを引き込み、暗くなり始めた空に合わせてかダークなサウンドが広がった。「VICTIMS OF LOVE」では、ヒサシがギターで「桜」のメロディーを奏でた。ユータとトールのリズム隊から出されるビートを軸に[illegible]シンセサイザーで色々な音色を放って異様な空気を客席に漂わせた。また、それに合わせてか奇声を上げるアッシ。しかし残念ながら、このパートでは退屈しているファンもいたようだ…。

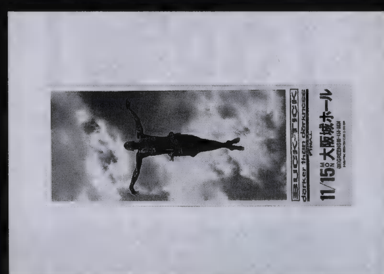
「最高の人工のセットで[illegible]くれて（近くをJR[illegible]いる）、流れる照明[illegible]」「1日目は西武球場、所沢でやって、すごく大自然で面白かった。そして今日、大阪はコンクリートジャングルでビルの谷間に消えていくって感じかな。…ちょっと、カッコよすぎたな。ここに来てくれた、みんなに暑中見舞い、感謝の気持ちを込めて…」といったアッシの照れ気味のMCが入り後半へ。「FLY HIGH」では暴れるように飛び跳ねるファンと一緒に歌っている[illegible]も大きくなった。そして、「LOVE ME」が終わるとメンバーはステージを後にした。

アンコールで登場したのはヒサシ、アッシ、そしてアコースティック・ギターを持ったヒデ。この三人で「SILENT NIGHT」がプレイされた。今までと一転して静かにステージを見つめるファン。しかし、曲中に手拍子をする不届き者も一部いた。「最高のリズム隊を再び[illegible]」とアッシの紹介で、ユータとトールがステージに姿を見せ「…IN HEAVEN…」。メンバーが去った後に起こったアンコールの拍子に混じって、声を枯らしながら「ヒデー」と叫ぶ女の子がいた。

最後にBUCK-TICKから[illegible]ナンバーは「MOON LIGHT」。懐かしい曲がプレイされファンの[illegible]った。残っている力を出し切るかのように飛び跳ね、声を出していた。

演奏が終わるとマグネシウムが盛大にたかれ、メンバーの姿が見えなくなると、すぐさまアンコールの手拍子が起こったが、ステージに現れたのはイベンタースタッフで「本日のBUCK-TICKのコンサートは～」というアナウンスが行われた。

1993.11.15 大阪城ホール
darker than darkness -style93- FINAL



PLAY List

1 darker than darkness
2 Deep Slow
3 青の世界
4 悪の華
5 神風
6 ZERO
7 誘惑
8 ドレス
9 六月の沖縄
10 VICTIMS OF LOVE
11 M・A・D
12 LION
13 キラメキの中で…
14 Madman Blues ―ミナシ児ノ憂鬱―
15 die
encore
E1 PHYSICAL NEUROSE
E2 スピード
encore
E3 JUPITER
E4 太陽ニ殺サレタ

今回は、スタンド席の後ろの方に[illegible]が見える城ホール。やはり「darker than darkness -style93-」の超個性的、アーティスティカルで最高のポップ・アルバムは、好き嫌いがハッキリ出るアルバムだったのだろう。ホール内には開演前から、ダークな空気が漂っているようにさえ思え[illegible]定刻を少し押して照明が徐々に暗くなり始めた。ステージを照らす淡いライトのみの薄暗いホールに、メンバー名を叫ぶ女の子の甲高い声が響き渡る。

ステージに現れたヒサシにスポットが当てられ、彼のギターから発せられたノイズ音がホール内を縦横無尽に駆けめぐる。そして、ニューアルバムの93トラック目に収録された「darker than darkness」のイントロとともにライブが始まった。

バンドとファンが一体となってテンションを上げ一体感を生むような、一般的なライブとは全く異なってい[illegible]BUCK-TICKの持つ圧倒的な存在感からなのだろうか[illegible]BUCK-TICK側とファン側の間に壁のようなものを感じてしまう。BUCK-TICKから放たれる重たく暗いポップ・ナンバーに、ファンは昔のように一緒になって飛び跳ねてライブに参加するのではなく、体をクールにライブを楽しんでいる。フラストレーションが溜まらないものかと心配してしまうが、このダークなサウンドはBUCK-TICKの持つカリスマ性を高め、それさえも押さえつけ[illegible]しまうパワーを誇っている。また、ファンの女の子にとっては、『目の前にメンバーがいる』という現実の方が『生の音』ということよりも大きいようだ。実際、1曲の演奏が終わる度に「アッシー」「ヒデー」という絶叫が繰り返されていた。これは、同性から見ても異常にカッコいいバンドなのだから当然のことだろう。

「いらっしゃい」で始まったMC。「そして、「それじゃ、かっこいい[illegible]を聴いて下さい」と「悪の華」のイントロが流れ、ノリのいいナンバーに飛び跳ねるファン。しかし、その後は再びダークなサウンドがホール内に浸透した。

曲の[illegible]登場するヒサシのシンセ・ギター。「神風」では[illegible]光線銃のような音を発していた。それこそ、子供[illegible]光線銃のおもちゃを手にして、手当たり次第に撃ちまくっているように、サウンドの中でヒサシの放つ色とり[illegible]れていた。トールとユータの安定したリズムとヒデがキーボードも弾くようになりサウンドに奥行きが出たため、ヒサシのシンセ・ギターの音色が効果的に活かされている。

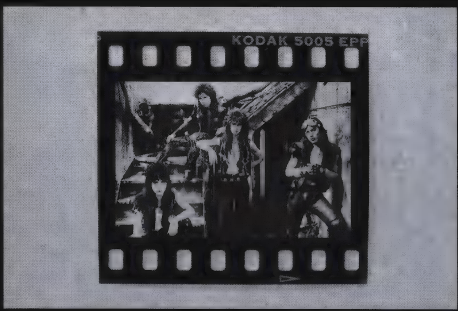
後半1曲目は、今やBUCK-TICKのライブで重要な位置にある「VICTIMS OF LOVE」。トールとユータから出される繰り返されるフレーズにヒサシの[illegible]み、アッシのサックスや奇声も混ざりブラック・ホール化したサウンドがオーディエンスを引きずり込む。

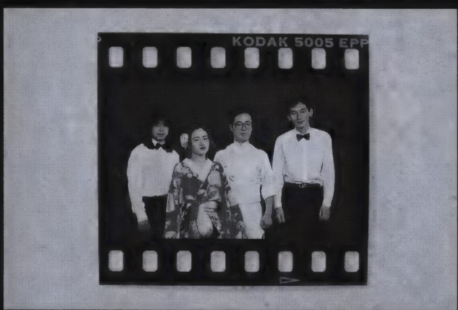
アンコールで登場したアッシは「踊り疲れたコンサートの帰り、もう青春も～」と「大阪で生まれた女」の一節をアカペラで歌い客席を沸かせていた。そして「PHYSICAL NEUROSE」へ。懐かしい曲がプレイされたことと、ダークなサウンドがずっと続いていたせいか、昔のタテノリ・サウンドに異常な盛り上がりを見せるファン。この勢いを消すことなく「スピード」へ。速いナンバーが続いたことで、キレたようにファンは飛び跳ねている。烈風のようにホール内を吹き荒れたタテノリ・ビート。メンバーが去ると、一段と大きなアンコールの声が起こった。

最後にプレイされたのは「太陽ニ殺サレタ」。魂を吸い取られたようになって棒立ちでステージを見つめるファン。熱狂して満足するのではなく、体全体でサウンドを受け止め、そのサウンドに圧倒されてしまったこの満足感が残るコンサート後に、こんな気分に浸れるのはBUCK-TICKのライブだけだろう。

J-ROCK Artists News









ここに挙げたアーティスト達が、J-ROCK magazine独自のセレクトアーティストである。

選択に不満を感じる方もあろうが、ジャーナリズムの精神にのっとり、公平を期して業界との癒着を防ぐために、年に数回の見直しを行うつもりだから、大目に見てもらいたい。

何より大事なのはリストを絞る事で読者に提示できるロックの道筋がはっきりする事だ。きっと「いい音」が見えてくる！そして今後は、いろんな角度からいろんな人間（それは読者でも評論家でも構わない）によって、リストが検証されていくのを待ちたい。

さて、本誌がキャッチした彼らの最新ニュースをお届けしよう。耳より情報がきっとあるっ！

Eins:Vier、ACTION、夜来香（イエライシャン）、THE YELLOW MONKEY、生沢祐一、石田長生、忌野清志郎、Valentine D.C.、上田正樹、VOGUE、X JAPAN、大黒摩季、おかげ様ブラザーズ、奥田民生、尾崎豊、小沢健二、織田哲郎、オリジナル・ラヴ、GARGOYLE、甲斐よしひろ、CASINO DRIVE、喜納昌吉、筋肉少女帯、久保田利伸、GLAY、黒夢、黒百合姉妹、QUNCHO、幻覚アレルギー、cornelius、小室哲哉、米米クラブ、THE COLLECTORS、近藤房之助、ZARD、坂本龍一、サザンオールスターズ、佐野元春、ZYYG、シーナ＆ザ・ロケッツ、シェラザード、塩次伸二、SION、CINNAMON、JUDY AND MARY、JUN SKY WALKER(S)、少年ナイフ、Gilles de Rais、SUPER JUNKY MONKEY、STARLESS、THE STREET BEATS、SLY、妹尾隆一郎、SOUL FLOWER UNION、DIE IN CRIES、高橋幸宏、Char、CHAGE＆ASKA、坪倉唯子、D.T.R、DEEP、T-BOLAN、DEEN、DER ZIBET、DREAMS COME TRUE、永井"ホトケ"隆、長渕剛、NOKKO、PERSONZ、BY-SEXUAL、BUCK-TICK、浜田省吾、浜田麻里、B'z、ピチカート・ファイブ、氷室京介、BILLY＆THE SLUTS、FEEL SO BAD、THE BLUE HEARTS、細野晴臣、BODY、布袋寅泰、松任谷由実、THE MAD CAPSULE MARKET'S、Manish、Mr. Children、MEDIA-YOUTH、MORRIE、MOJO CLUB、THE MODS、矢沢永吉、山岸潤史、山下達郎、憂歌団、LOUDNESS、LOVE TAMBOURINES、L'Arc〜en〜Ciel、LUNA SEA、渡辺美里、WANDS

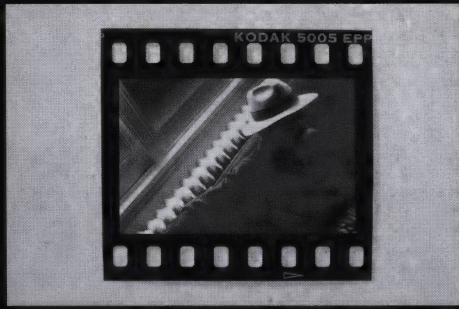
●Eins:Vier
春にはビデオを発売し、ライブも行う予定。

●ACTION
未定。

●夜来香（イエライシャン）
未定。

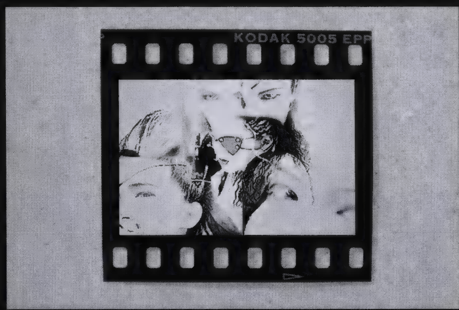
●THE YELLOW MONKEY
2月1日にニューアルバム「Smile」をリリース。またツアー『LOVE COMMUNICATION』が、3月21日の大阪厚生年金会館よりスタートする。ツアーファイナルは、4月11日の日本武道館だ。

























●生沢祐一
TWINZERの3rdアルバムのレコーディングが続いている中、2月22日にはシングル「こんな時君に逢いたい」をリリースする。

●石田長生
未定。

●忌野清志郎
新作のレコーディング中。

●Valentine D.C.
現在レコーディング中のセカンドアルバムは、5月21日にリリース予定。ライブは、2月16日に目黒区公会堂、26日に心斎橋ミューズホールで行われる。

●上田正樹
2月13日に葛飾コンサートシンフォニーヒルズにて、有山じゅんじとアコースティックライブを行う。また3月下旬には、全曲本人のアレンジによるカバーミニアルバムをリリース予定。

●VOGUE
ヴォーカルCHIKAの主宰するイベント『BEHIND THE MASK』が行われる。
2月12・13日　大阪シアタードラマシティ
14・15日　名古屋ダイヤモンドホール
17・18日　クラブチッタ川崎

●X JAPAN
アルバムのレコーディング中。またベースのheathが、2月22日に完全予約限定生産アルバム「heath」でソロデビュー。TOSHIが3月15・16日の日本武道館よりソロライブツアーを行う。大阪は、3月22・23日の厚生年金会館。

●大黒摩季
2月20日に10枚目のシングル「ら・ら・ら」をリリース。この歌の詞は単なるラヴ・ソングではなく、「永遠の夢に向かって」から続く彼女の詞の世界観を踏襲している。

●おかげ様ブラザーズ
デモテープを制作中。ツアーは4月からの予定。

●奥田民生
3月8日に、海外から多数のゲストを迎えたアルバムを発売。ツアーは春以降になりそうだ。

●尾崎豊

●小沢健二
2月22日にまたまたニューシングルを発売。3月にはニューアルバムの発売も予定されている。

























●織田哲郎
プロデュースを手掛けた新人バンドHollywood Motorsが、いよいよ2月25日にアルバム『HOLLYWOOD MOTORS』でデビューする。

●オリジナル・ラヴ
未定。

●GARGOYLE
2月14日、渋谷公会堂にて延期になっていた黒夢とのイベント『帝王切開』を開催。そして3月1日にはニューアルバム『natural』を発売する。ライブスケジュールは
3月17・18日　神戸チキンジョージ
25・26日　福岡Be-1
31日　名古屋クラブクアトロ

●甲斐よしひろ
4月末に、1月に行われた武道館のライブビデオを発売予定。

●CASINO DRIVE
これからの活動の構想を練っている最中。期待しよう。

●喜納昌吉
3月24～26日に新宿日清パワーステーションでライブを行う。

●筋肉少女帯
大槻ケンヂが2月22日にシングル、3月8日にアルバムを発売。

●久保田利伸
1月に発売したビデオ&シングルが好調。現在は、日本とニューヨークを行き来しながらレコーディング中。

●GLAY
3月1日、ファーストアルバム『SPEED POP』を発売。ライブは、4月2日の新宿日清パワーステーションを皮切りに『THE SPEED POP Standing GIG '95』をスタートさせる。

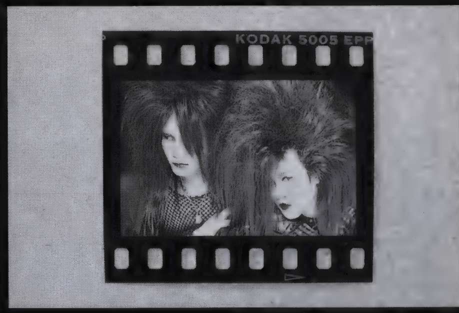
●黒夢
2月14日に延期となっていたGARGOYLEとのイベント『帝王切開』を渋谷公会堂で行う。また3月8日にニューシングル、春にはメジャー3枚目となるアルバムを発売予定。

●黒百合姉妹
未定。

●QUNCHO
2月26日に大阪グランカフェで行われる『SUNDAY BLUES LIVE』に出演する。





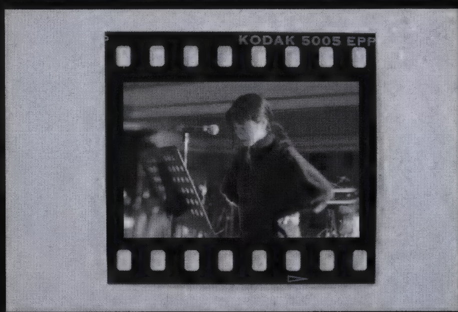




















●幻覚アレルギー

●cornelius
レコーディング中。夏ごろにはニューアルバムを発売予定。

●小室哲哉
プロデューサーとしてレコーディング・ワーク中。

●米米クラブ
2月20日に10周年記念ビデオをリリース。

●THE COLLECTORS
ニューアルバムは4月ごろリリース予定。
2月17・18日　新宿日清パワーステーション
21・22日　大阪クラブクアトロ

●近藤房之助
2月19日に大阪グランカフェで行われる『SUNDAY BLUS LIVE』に出演。それ以外は、次の活動へ向けての準備期間である。

●ZARD
昨年12月に続いて、2月1日に「Just believe in love」をリリースしたばかり。さらに3月10日にはニューアルバムもリリース予定。今年のZARDは目が離せない！

●坂本龍一
2月1日に、ライブビデオを発売する。

●サザンオールスターズ
未定

●佐野元春
1月21日にライブビデオ「They called the band “THE HEARTLAND.”」が発売された。

●ZYYG
昨年末より、50曲近い楽曲の中から絞り込み、シングルのレコーディングを行っている。リリースは、春ごろの予定。

●シーナ&ザ・ロケッツ
レコーディング準備中。夏前にはリリース予定だ。













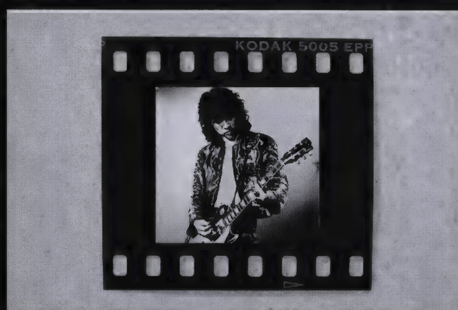












●シェラザード

●塩次伸二
2月12日に大阪グランカフェ『SUNDAY BLUES LIVE』に初登場。当日は、ブルース・ハープの妹尾隆一郎、ウエストロード・ブルース・バンドの松本照夫が参加する。

●SION
曲作り中。

●CINNAMON
4月29・30日にON AIR WESTでライブを行う。

●JUDY AND MARY
3月10～12日、新宿日清パワーステーションの7周年記念イベントに出演する。

●JUN SKY WALKER(S)
3月1日にニューシングル「さらば愛しき危険たちよ」をリリース。

●少年ナイフ
2月23日に、日本未発表曲12曲入りアルバム「グレイテスト・ヒストリー」をリリースする。3月13日には、大阪クラブクアトロでライブ。

●Gilles de Rais
未定。

●SUPER JUNKY MONKEY
2月12日に三軒茶屋HEAVEN'S DOORでライブを行う。

●STARLESS

●THE STREET BEATS
春にニューアルバムをリリース予定。

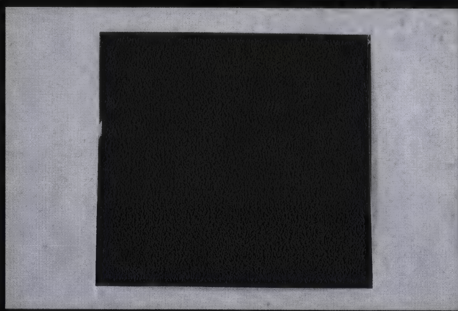
●SLY
レコーディング中。
























●妹尾隆一郎
2月12日に大阪グランカフェで行われる塩次伸二のライブに参加する。彼もまたKBS京都「ROOTS」に出演するなど、大阪のブルースを盛り上げている一人である。

●SOUL FLOWER UNION
デモテープを制作中。

●DIE IN CRIES
曲作りとレコーディング中。2年ぶり3枚目のフルアルバムは、春にリリースの予定。

●高橋幸宏

●Chara
サイケデリックスのフルアルバムをレコーディング中。リリースは4月下旬の予定。

●CHAGE & ASKA
ASKAのソロアルバムが春に発売される予定。

●坪倉唯子
現在は、ニューヨークに滞在。今後に向けて充電中だ。

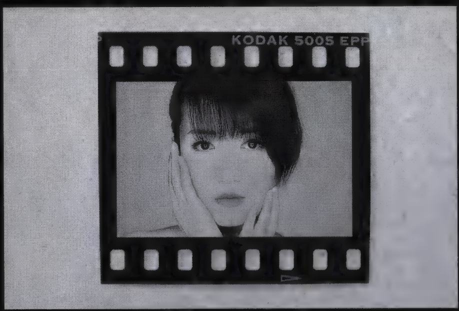
●D.T.R
ニューアルバムのレコーディング中。リリースは初夏の予定。

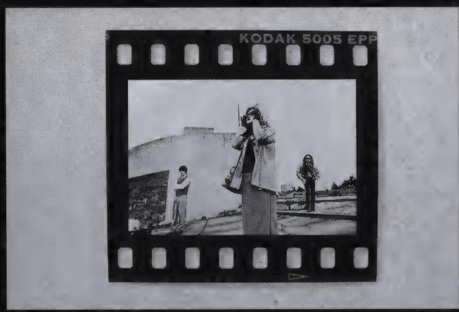
●DEEP
春には2ndアルバムが発売される予定。

●T-BOLAN
現在ツアー中。またその合間を縫ってニューシングル及びアルバムの制作も行っている。
2月4・5日　NHKホール
13・14日　名古屋センチュリーホール

●DEEN
春にリリース予定の次の作品をレコーディング中。また、ライブに向けてのリハーサルも継続して行っている。以前から伝えられているように、彼らの音楽をライブで聴けるのももうすぐだ。

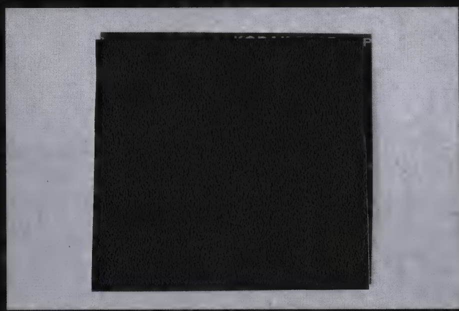
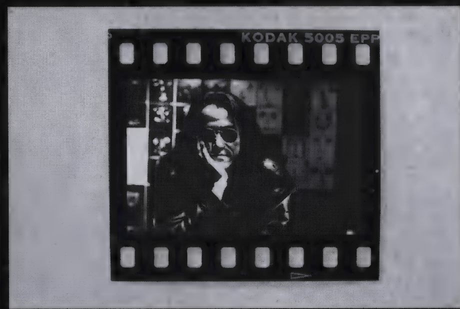
●DER ZIBET
2月12日にISSAYのソロシングル「いとしのマックス」をリリース。2月21日には「いとしのマックス」のリミックスバージョン、ミニアルバムもリリース。

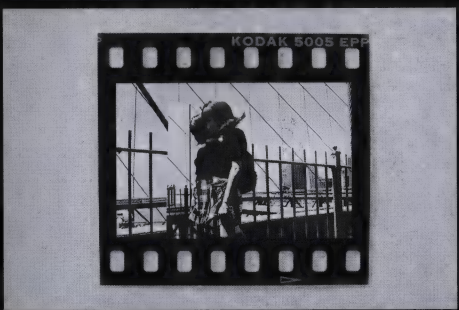












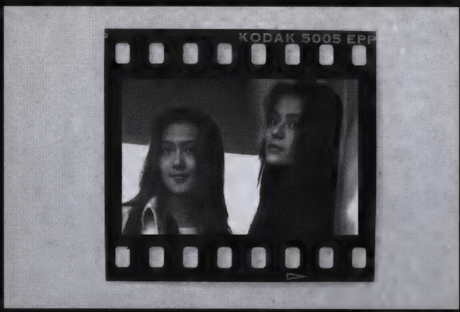


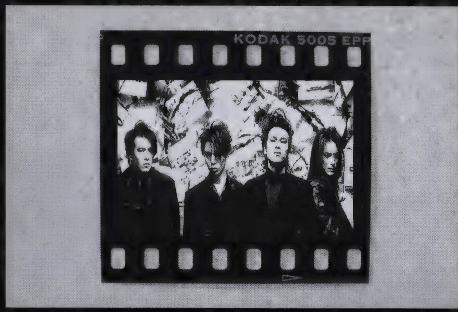






●DREAMS COME TRUE
2月末にシングルを、春にアルバムをリリース。コンサートは夏以降の予定だ。
●永井"ホトケ"隆
2月5日に大阪グランカフェの『SUNDAY BLUES LIVE』に出演。
また初のソロ・アルバム「NIGHT PEOPLE」を2月25日にリリースする。彼が今、大阪で盛り上がっているブルース・シーンの中心にいる人物であることは間違いない。
●長渕剛
現在は静養中。
●NOKKO
未定。
●PERSONZ
3月に9枚目のアルバムをリリース予定。
3月10日　新宿リキッドルーム
4月27日　大阪サンケイホール
●BY－SEXUAL
ヴォーカルＳＨＯが脱退。今後の動向に注目しよう。
●BUCK－TICK
3月24日・4月21日にシングル、5月15日にニューアルバムを発売。
また電車広告でのインフォメーションどおり、ニューアルバムの全貌を最新映像と共に体験できる「新作完全再生劇場版」が、全国7会場で上映される。
●浜田省吾
未定。
●浜田麻里
渡米してレコーディングの予定。国内向けアルバムは、夏に発売されるそうだ。
●B'z
ツアー終了後1か月の休養を経て、次のシングル&アルバムのレコーディングに入っている。
●ピチカート・ファイブ
3月1日にベスト盤をリリース。春には、ワールドツアーを計画している。
●氷室京介
ＯＦＦ。

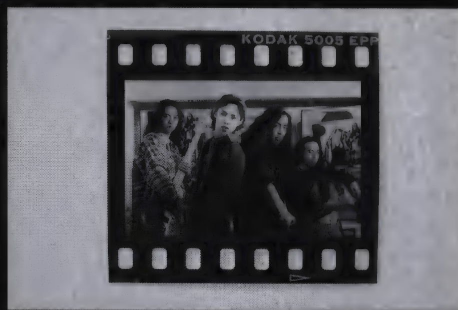




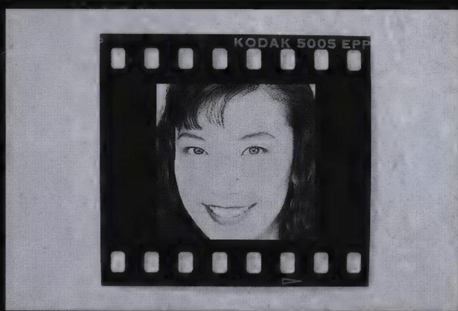








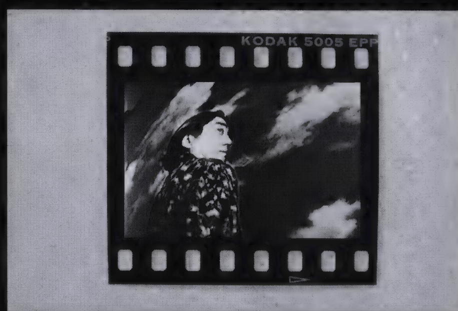












●BILLY & THE SLUTS
2月14日、結成6周年ライブを原宿ルイードで行う。

●FEEL SO BAD
2月10日に心斎橋ミューズホールでライブを行い、彼らの生の姿を見ることが出来る。また、2月8日にはニューシングル「憂鬱な快楽」をリリース。

●THE BLUE HEARTS
3月10日にライブ・ビデオ「オフィシャル・ブートレッグ・ライブ・ビデオ・凸凹ツアー(仮タイトル)」を発売予定。

●細野晴臣
1月21日にLOVE, PEACE & TRANCEのアルバムが発売になった。

●BODY
瀬川と菊池が元ZI:KILLの飯田と元TOY BOYSの濱口からなるニュー・バンドCRAZEを結成。ライブツアー『COUNT DOWN TO FREEDOM TOUR 1995』を行う。
3月 15日 名古屋ダイヤモンドホール
17・18日 大阪W．OHOL
21日 福岡スカラエスパシオ

●布袋寅泰
2月17日にベスト盤「GUITARHYTHM FOREVER」vol.1、vol.2をリリース。

●松任谷由実
『THE DANCING SUN』ツアー中。
3月20・21・23・24日 名古屋レインボーホール
29〜31日 大阪城ホール

●THE MAD CAPSULE MARKET'S
3月24日にビデオクリップ集を発売予定。

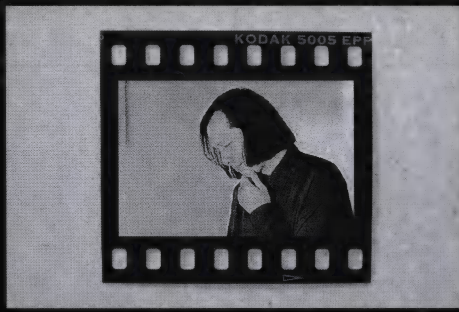
●Manish
昨年8月以来のシングル「煌めく瞬間に捕われて」を2月20日にリリースする。この曲は今年の初めより「ファニイ」のTVCFでオンエアされていたものだ。

●Mr.Children
『'95 TOUR ATOMIC HEART』を展開中。
2月9・10日 大阪城ホール
15・16日 名古屋レインボーホール
18・19日 横浜アリーナ

●MEDIA-YOUTH
1月21日に4thアルバム「死刑台のエレベーター」が発売された。

●MORRIE
約3年ぶりのアルバム「影の饗宴」が、1月21日にリリースされた。

























●MOJO CLUB
新作の制作作業が進行中。
●THE MODS
●矢沢永吉
●山岸潤史
今月も精力的にライブを展開。
2月3・8日 六本木バレンタイン
4日 アルフィー
24・25日 市ヶ谷サンヨーホール
●山下達郎
●憂歌団
未定。
●LOUDNESS
春には全国ツアーを予定。
●LOVE TAMBOURINS
2月25日にファン待望のファーストアルバム「ALIVE」をリリース。
●L'Arc～en～Ciel
2月1日にファンクラブ『Ciel』を発足。
●LUNA SEA
3月17日からスタートする「MOTHER OF LOVE,MOTHER OF HATE」ツアーのリハーサル中。またRYUICHIこと河村隆一が2月11日に渋谷公会堂でプライベート・トーク・ライブを行う。
●渡辺美里
2月1日にニューシングル「シンシアリー」をリリース。
●WANDS
いよいよWANDSが動き出した。約8ヵ月ぶりのシングル「Secret Night」を2月13日にリリース。また延期されていたライブ・ツアーも行われる。大阪は4月17、18日の大阪厚生年金会館た

DISC REVIEW



「colored」
NOKKO

自分らしさってどう定義したらいいのだろうか？ 他人から思われている自分像と、自分自身で思い込んでいる自分像って、意外に食い違っていたりする。NOKKOのソロデビュー以来、3枚目のアルバムにあたる「colored」は、入りすぎていた肩の力を抜いて、自分らしく自然体で歌っているという印象を、聴くものに与えてくれる。

今回は『今まで絶対人に立ち入らせなかった部分である』という作詞に、プロデューサーでもある季泰栄氏の協力を得、井上大輔氏、筒美京平氏といったソングライター群、岩崎工氏、佐久間正英氏を始めとする奇才達のアレンジによって、NOKKOらしさをバランス良く引き出した楽曲の集大成になっている。

91年のREBECCA解散後、渡米し92年ソロデビューを果たした彼女だが、最初の2作「Hallelujah」「I will catch U」は、いかにもアメリカで制作しましたよっという雰囲気の、たてノリのクラブミュージック風の曲が中心で、加工されたという印象ばかりが先立って、私には彼女自身が窮屈そうにしているように感じられてならなかった(こういったエネルギッシュさも彼女のいい一面なんだけどね)。また、ジャケットに写る彼女も、これがNOKKOなのかと思うくらいの厚化粧で、本当のNOKKOは何処に？ という印象がないわけでもなかった。

ところがこのアルバムでは、宇宙やアジアの民族性、どこか帰るべき故郷、胎児がお腹の中で母親の心臓の鼓動をリズミカルな音楽として聴いているような、"思い出"よりもっと根源的なノスタルジーが全編に溢れ、とにかく"懐かしさ"がこみ上げて来て、地球を包む大気の中を漂う、よりどころを失った人工衛星にでも乗っているような不思議な心地に誘い込んでくれる。

自然に、ありのままに。忘れがちな本来の自分の姿、宇宙の中で、地球の中の日本で、人間として生を受けた自分という存在……なんだか哲学臭くなってしまったが、聴いていて「楽に行こうよ― 自分らしく―」という気持ちにさせてくれるはず。CDジャケットの裏に写るNOKKOも、小学生の頃から習っていたクラシックバレエの練習をする、ありのままの姿で、そうメッセージしているかのようでさえある。

もちろん、ドラマ、CMタイアップなんてよけいな力なんか全く必要なかった名曲「人魚」「ライブがはねたら(もうはなさないVersion)」も収録されています。お聴き漏らしのないように。

(文・平田かつみ)



「Communication」
FLYING KIDS

ある日、TVのCMからラップっぽいナンバーでカッコいい曲が流れてきた。その画面の隅っこには『FLYING KIDS』という名前が…。最近、やたら画面の隅っこに、この『FLYING KIDS』という活字を見る。FLYING KIDSと言えばイカ天出身バンド。イカ天出身バンドと言えば、個性的と言うよりイロモノ的なバンドが多く、中にはTHE BLANKY JET CITYやMARCHOSIAS VAMPのようにイカ天に出なくても実力だけで話題になれたであろうバンドもいるが、やはり「ええかげんにせぇー」と怒りたくなるバンドがほとんどだったというイメージがある。そして、このFLYING KIDS。初代グランド・イカ天キングというぐらいだから、さぞかし超イロモノなバンドだと思い、音も知らずにアルバムのジャケット等のビジュアルだけで、そう勝手に判断していた(ここ最近のブレイクで、FLYING KIDSがイロモノ・バンドでないことを知った…)。しかし、このCMの曲を耳にして聴く価値はあると思いCDを購入。いつもヴィジュアル系やハードロックばかり聴いていて、このテのサウンドは全く聴いていなかった私だったが、ざっと44分20秒、しっかり聴いた。

他誌のレビューで書かれている通り、1曲1曲の完成度は高い。耳障りがいいというのではなくハートに響くクセのあるような曲が収録されており、聴く度に『味』が出てくる(スルメのようなアルバム)。日本語の歌詞で字余りな歌でも自然に聴かせるソウルフルな浜崎のヴォーカルは、一度「この声ええやん」と思わせてしまうと、そのアクの強い声にひかれていきそうだ。歌われている内容も『青春の淡い恋愛』が多く、高校生や大学生の人が聴くとたまらないだろうなと、『おっさん』化してしまった私は思ってしまう。『男と女の恋愛。それは、お互いのコミュニケーションから始まる』とでも言えそうな、歌詞に登場するウブな主人公の恋。これは、浜崎の恋愛感というものなのだろうか？

やはり、その中でも「セクシーフレンド・シックスティーナイン」。今のヒット・チャートに無い、異色のカッコ良さを放っている。ファンキーなビートに乗って浜崎のラップ調で、どこか投げやり気味なヴォーカルが見事にマッチして心地良いグルーヴ感を感じる。テレクラで生まれる、今の時代ならではの『LOVE≠SEX』の男女のコミュニケーションを一歩引いた冷めた目で書いているのが、何とも良い。

このアルバムは、『FLYING KIDS』といういいバンドの存在を教えてくれたが、メンバー共々でのドラマ出演はいただけない。ミュージシャンなら、特異なキャラクターはブラウン管でなくスピーカーからのアピールだけにしてほしいのだが…。

(文・28才会社員)



「Blue」
VOICE

『ヴォーカリスト』と呼ばれている様々なアーティストたち。最近売れている若手のバンドの傾向かどうかは知らないけど、妙に個性的な人が多いよね。それはヴォーカリストとして、独自のスタイルを追求しているんだろうから大いに結構。でもね、ただオリジナリティーという言葉だけに甘えてるヤカラが多すぎるんじゃない？ 日本語なのか英語なのか分からない、ヘンな巻き舌で何を歌っているのか不明なモノや、歌声を楽器の一部としか考えていない、まるで右の耳から左の耳へ流れるだけの役割でしかないモノが氾濫しすぎ。ヴォーカリストとしてのカッコ良さって、そんな作られた、うわべだけのことで出せるもんじゃないんじゃないかなあ。それって滑稽なの、悪いけど。何かを伝えたいと思って音楽を、バンドをしてるんだったら考えてほしい。それは、メジャー、インディーは関係なく、もちろんジャンルにも関係ない。ヴォーカリストとしてのプライドはないのかって、最近ライブを見る度に思ってしまうのも情けない話。

そんな中、このVOICEは、私に元気を取り戻してくれた。ひょんなことから彼らのライブを見る機会があり、そのステージから流れてくる2人の歌声は、飾り気も作りごとも無い自然そのもの。一語一句にハートを感じるヴォーカリストだった。アコースティックなサウンド中心の曲の中には、軽快なモノや、ロックっぽいナンバーもあって飽きさせない。久しぶりだったなあ〜、こんな気持ち。

93年にメジャーデビューを果たした彼らは、北海道苫小牧出身の双子デュオ。これまでに2枚のアルバムを発表し、そのセカンドアルバムがこの「Blue」。ノスタルジックな想いをしっとりと聴かせるナンバーが多い中、ロックンソウル(このテのサウンドの代表的な存在はホール&オーツだろう)調の「Hole in the wall」は意表をつく秀作。いきなりシンセ音が入り、続いて軽快なキーボード音とファンキーなギターのカッティング。そして何よりロックしているドラム。ヴォーカルの2人はというと、目まぐるしい都会に対する心情をその歌唱力で迫力満点に歌い上げている。

彼らには、「これしか歌えない」という限度はないだろうと思わせるほど、ヴォーカリストとしてのプロフェッショナリズムを感じた。その中には、もちろんカッコ良さが存在するわけ。VOICEのお2人には、今の気持ちのままずっと歌い続けてほしいな。

(文・村田圭子)



「ロマンティック伝説」
Tokyo No.1 Soul Set

仲のよい男達が集まった時に作り出される雰囲気が、私はスキだ。そこには自分が女であるためのあこがれと嫉妬が大いに含まれているのだが、女の子といるときとは違う笑顔、興味のある話に熱中しているときの瞳、ふざけているのか喧嘩しているのか分からないような会話、そんな些細なことにさえ「男同士っていいな…」とうらやましく思えてしまう。もちろん女にも女同士でしか作り出せない雰囲気はあるが、男が作り出す雰囲気と女が作り出す雰囲気は全く違うし、それぞれの境界は無防備に見えて実はしっかり固められた砦のように踏み込むことはできない。それは最近流行しているスカートをはいた男の子であっても、男言葉を話す女の子であっても不可能で、その不可能さが余計に私のうらやましさを駆り立てるのだ。

Tokyo No.1 Soul Set。彼らが作り出す音楽は、仲のよい男達が集まったことで作り出された世界そのものだ。その中には、無言の信頼によって生まれるソウルを楽しむ3人の男達が、悔しいくらいさりげなく存在している。特にアルバムタイトルにもなっている「ロマンティック伝説」は、"時代遅れの指輪""ゆるんだ下腹部"といったけっして歌詞に使われそうにない言葉が連なり、目をそらしたくなるようなまっすぐな詞が聴く者の耳につきささるのだが、私にはこれこそ男同士でしか作り出せない世界のように思える。カッコ悪そうな言葉がこんなにカッコよく聴こえるのは、それが女には見せない男同士の本音であり真実であるからではないかと思うのだ。

もちろんこの世界は、男が集まればだれにでも作り出せるものではない。BIKKEのちょっと頼りな気でうつむきかげんなボーカル、川辺ヒロシの作り出す洗練された音、そしてその声と音を引き立てる渡辺俊美のコーラス&ギター。それぞれがそれぞれにしか出せない個性をフルに発揮して出来上がった世界だからこそ、あこがれや嫉妬がわき出て来る。「戦場のこの街で唯一／神に放牧する事を許された最も美しい狼達よ、女達よ／どうぞ彼女達に昼の太陽を」という売春婦を題材にした歌を、哀しく切なくそして何よりもロマンティックに響かせることができる男達だからこそ、うらやましくなるのだ。

悔しいことだが「女同士ではこんな世界は作り出せない」とあらためて教えてくれる1枚だ。私の無い物ねだりにも似た感情は、永遠に終わることはないのだろう。

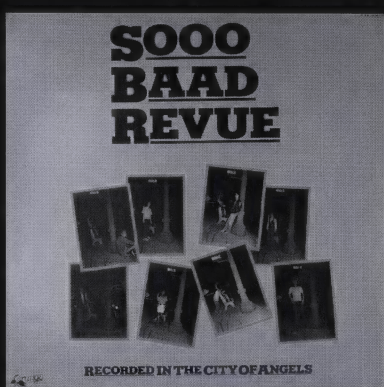
(文・やまだ[illegible]こ)

J-ROCK classic

関西ソウル







1975-76　関西ソウル・ムーブメント

1970年代初め、東京の音楽シーンでは「はっぴいえんど」を筆頭とするシティロック派が徐々に拡大し日本のロックの中心を担っていくが（12月号参照）、関西ではフォークの後を埋めるように、京都を中心にブルース・ソウル系のバンドが盛り上がりをみせ、全国に波及していく。ウエスト・ロード・ブルース・バンド、上田正樹、憂歌団、ブルース・ハウス・ブルース・バンド、ストーミー・マンディー、ファッツ・ボトル、ウィーピング・ハープ・セノオ（妹尾隆一郎）らがその担い手であった。

最初の盛り上がりは74年4月、京都のライブハウス「拾得（じゅっとく）」で開かれた「ブルース・ゴールデン・ウィーク」で、当時のほとんどのブルースバンドが参加した。彼らがよく出演した場所は京都では「京大西部講堂」やライブハウス「磔々（たくたく）」（これらは今も健在。西部講堂も前衛イベントやライブなど現在でも70年代している）。大阪ではライブイベント「8・8ロックデイ」「春一番」等だった。

今回はこれらブルース・ソウル系の中でも独特の関西弁ソウル色を持った、上田正樹とサウス・トゥ・サウス、ソー・バッド・レビューのアルバムを取り上げて、なぜその時〝関西〟であったかを説き明かしていきたいと思う。

●ぼちぼちいこか／上田正樹&有山淳司（1975年）

私は今までこれほど大阪の街と人間を人情味豊かに楽しく紹介している音楽を知らない。アコースティック・ギター、ホンキートンク・ピアノ、ハモニカ他、ジャグバンド風（いわゆる台所用品など、本来楽器でないガラクタを使用する音楽）要素も取り込んだラグタイムミュージックなのであるが、音楽と歌詞がマッチしている日本で唯一最高のラグタイム・アルバムと言うことができると思う。

M-1は千日前の売り声のSEから入るが、初めて大阪へ出てきた若者の大阪弁への戸惑いと徐々に慣れて大阪の人になっていく姿が微笑ましい。

M-2は〝おかま〟の歌なのであるが、その彼女（彼？）の女としての心意気、可愛さがテーマとなったこれまた何ともいえぬペーソスのある曲である。

M-3、5は当時の金のない若者の願いをうまく表している。

M-4は〝小粋なおばはん、おっさん、しかめっ面のヤンキーのあんちゃん、すましたねえちゃん〟に〝踊りにいこう、呑みにいこう、けんかだけはかんにんして〟しまいには〝連込みホテルへいこう〟と誘うのだが、楽器のカズーで〝オ○○○〟と発禁すれすれの四文字言葉を折り込んだ軽快かつ抱腹絶倒の内容である。この手の曲、M-8、9が輪をかけてこのアルバムを楽しいものにしている（M-8は語り口調の曲で、とったらあかんもの「女子の下着」につい手が出て監獄に入る、歌というよりお話。M-9は友達に借金を重ねていくうちにわけがわからなくなる話）。一方でM-7の欧陽菲菲（オーヤンフィーフィー）の「雨の御堂筋」にも匹敵するようなポップなご当地ソングやM-10のシリアスな曲も含めて、ペーソスと笑いの詰まった、大阪漫才のような軽妙な仕上がりとなっている。ほとんどが二人の作詞作曲に、上田のヴォーカル、有山のギター・ヴォーカル（彼の高めの歌声にもまた味がある）、中西康晴のピアノ、藤井裕のベース、正木五郎のぶらし・くいだおれだいこ、堤和美のカズー・ギター・ウッドブロック、妹尾隆一郎のハープらが効果的な演奏を披露している。

●この熱い魂を伝えたいんや／上田正樹とSOUTH TO SOUTH（1975年）

これは同年9月に神戸芦屋ルナホールで行われたライブ・アルバムである。メンバーは「ぼちぼちいこか」と同じで正式にサウス・トゥ・サウスと名乗り、ゲストに北京一（しゃべり）、石田長生（ギター）、それにトランペット、テナートロンボーン、バストロンボーンを加え前作品とは違ったソウルフルなブラス・ファンク・バンドの演奏を繰り広げている。M-2、5、6、8、9は外国有名曲のカバーであるが「オーティス・レディング」にも匹敵するソウルフルな歌を聞かせ、その他の自作曲では関西弁は薄れているものの「ぼちぼちいこか」とはまた違った熱い魂をノリノリに伝えてくれる。特に当時感心したのは、中西のカッコいいエレピ。このプレイに影響を受けたキーボートプレイヤーは多いはずだ。

●SOOO BAAD REVUE／ソー・バッド・レヴュー（1976年）

〝地上最大のソウルバンド〟と鳴り物入りで76年にデビューしたのが「ソー・バッド・レヴュー」である。メンバーは漫才出身の北京一（ボーカル、「サウス・トゥ・サウス」のアルバムにもクレジットにあるように初めは司会をやっていたのだろう）、元ウエスト・ロードの山岸潤史（ギター）、元ジスの石田長生（ギター）、国府輝幸（キーボード）とチャールズ清水（オルガン）、永本忠（ベース）、土居正和（ドラム）それに砂川正和（リード・ボーカル）という、そうそうたるベテランぞろいで、しかも奇妙なバンドである。

作詞・作曲はほとんどメンバーが手がけているが、M-7、10はフォーク界の加川良が提供している。また、フォークとロックの交流があった証拠であろう。録音は当時関西のバンドとしては珍しくカリフォルニア・エレクトラ・スタジオであり、レコード会社の並々ならぬ入れ込み様を感じるが、それがあだになったのか少し肩肘張った硬さが目立ち、「サウス・トゥ・サウス」のような迫力と面白さに欠ける。

しかし、ツイン・リードのヴォーカル、ギターとキーボードは生かされており斬新なソウルアルバムとなっている。期待されていたバンドではあったが、彼らは短命なバンドで終わった。物の本によれば2枚のアルバムを発表して解散したということであるが、私が彼らを知るのはこのアルバムだけである。

＊現在、上田正樹の2枚のアルバムはTKージャパンよりCDでも発売されている。

なぜ当時関西からブルース・ソウルが盛り上がっていったか？　これは、前回のこの欄と今回を比べてもらうとわかるが、東京のシティ・ポップ路線に比べて、関西のロックは熱気と観客を巻き込める親しみやすさ、フォークで培ってきた地に足の着いた共感の共有、「ぼちぼちいこか」に凝縮されているマイナーな人間の意地・あこがれ等、自分達と同じ視線で物を眺めてそれを言葉にした＝ある意味で街角の芸能的な＝生活の一部として取り入れることの出来るものであったからだと思う。黒人のワークソングとしてのブルースが成立したように、関西は古くは〝文楽（人形浄瑠璃）〟という民衆芸能が音楽を伴って発祥した地であり、笑いとしての文化とともにブルースを取り込むには最適の環境にあったと見ることも出来よう。

前回も少し書いたように日本全体がぎすぎすしている状態の今、この関西に根ざしたロックが皆の共感を呼ぶ時代が次に来るのではないか、と思う。関西在住のロッカーは東京に出ていくことばかりを考えるのではなく、関西にいるからこそ出来る音楽を全国に発信するように頑張ってほしい。おそらくこのJ-ROCK magazineはそれを支援してくれるはずである。

（文・きし かなん）

●ぼちぼちいこか
上田正樹&有山淳司

1 大阪へ出て来てから
2 可愛い女と呼ばれたい
3 あこがれの北新地
4 Come onおばはん
5 みんなの願いはただひとつ
6 雨の降る夜に
7 むかでの錦三
8 とったらあかん
9 俺の借金全部でなんぼや
10 俺の家には朝がない
11 買物にでも行きまへんか
12 なつかしの道頓堀

●この熱い魂を伝えたいんや
上田正樹とSOUTH TO SOUTH

1 オープニング～サウス・トゥ・サウス
2 ウ・プ・パ・ドゥ
3 最終電車
4 こわれたコーヒーカップ
5 ラブ・ミー・テンダー
6 ブレイク・ダウン
7 むかでの錦三
8 わが心のジョージア
9 お前を離さない

●SOOO BAAD REVUE
ソー・バッド・レヴュー

1 ソウル地下鉄
2 最後の本音
3 ここを過ぎて悲しみの街
4 銀太郎
5 真夜中の歌姫
6 透明人間
7 おおきにブルース
8 青演小僧
9 しょぼくれ　あかんたれ
10 お母ちゃん俺もう出かけるで



ルースターズが解散し、花田裕之がソロとしてスタートを切ってもう5年の歳月が流れた。アルバムも既に4枚をリリース。しかし、まだどうもソロとしての花田にしっくりとこない。どこか居心地が悪いと言うか、まるで田舎から都会に出てきたばかりのヤツが、何とかその土地の言葉を使おうとするのにイントネーションが全く方言だったりするような、そんな妙ちきりんな印象がどの作品からも感じられ、いま一つ〝ソロ〟として手放しで歓迎することが出来ない。

1作目と4作目に起用した布袋寅泰のオーバー・プロデュース、2作目のいきなり老け込んでしまったかのようなクリス・レア路線、そして何も見えてこなかった3作目。1作毎に様々なアプローチを仕掛け、出来るだけルースターズとは違う、新しい自分の表現方法を見付けようとする気持ちは分かる。分かるけど、そのどれもが付け焼き刃的に感じられて仕方がない。ただ、これまでのソロ作を聴いて分かったことが一つだけある。それは、花田というプレイヤーは非常に不器用だ、ということ。下手という意味ではない、不器用なのだ。いろんなタイプのプレイは出来るが、いまひとつノリ切れていないのだ。本人は否定するかも知れないが、布袋がプロデュースした1、4作目を聴くとそれが歴然となる。言い方は悪いが、ミュージシャンの中でも特にエゴの強い布袋のほとんど言いなり状態とでも言おうか、らしさが全く感じられない。

では、花田裕之のらしさとは一体何か？　それは、いい意味での〝ぶっきらぼう〟さということ。ＣＤではそのらしさが表れないが、ことライブとなるとまるで別人。らしさ大爆発。特にヴォーカルにおいて、語尾があいまいになるというか、まるでつばを吐き出すかのような歌い方に勢いが感じられ、当然、そのパワーはギターをかき鳴らす手にも伝わっていく。こうしたことが何故アルバムに繋がらないのか？

そんな疑問に一つの答えを出してくれるのが、年明け早々にリリースされたニュー・アルバム『Rock'n Roll Gypsies』だ。ここには、ステージに立った時の花田がいる。〝いい意味で〝ぶっきらぼう〟で、荒々しい花田がいる。何故か？　それは、参加メンバーによるところが大きい。ドラムに池畑潤二、ベースに井上富雄のルースターズ・オリジナル・メンバーの2人と、中後期のルースターズ・サウンドの要となっていたギターの下山淳という、彼らの全面的バックアップ。しかも、ルースターズの作品でかなりの作詞を手掛けた柴山俊之が2曲提供。と、ほとんどルースターズ再結成アルバムとも言えるこの布陣。勝手知ったるわが家とでも言おうか、何の遠慮もなしに方言で話し合える仲間がいる、緊張から解放された伸びやかさにあふれているのだ。特に池畑の存在は、花田にとって大きいはず。初のソロ・ツアー時から常に池畑が後ろでドーンと構えていてくれたからライブではらしくなれたのだ。それがこのアルバムは周りが皆仲間たちだ。安心してすべてを負かせられる。

1作目をリリースした直後に行われた彼へのインタビューに「友達が少ないんだ」というコメントがあった。あれからかなりの時間が経ったとはいえ、不器用な彼のこと、そんなに数は増えていないはず。その辺のことがアルバム作りに影響していた、と言うのは言い過ぎだろうか。でなければ、新作でのこれ程のはち切れぶりはどう説明したらいいのか。

アルバムのラストに「オン・ザ・ロード・アゲイン」という曲がある。再び路上で。この〝路上〟こそ花田の帰るべき家であり、気の置けない仲間たちであり、もう一度、ルースターズを結成したあのころの気持ちでギターをかき鳴らそうという意思表示なのだろう。

ただ、誤解しないでほしいのは、これは後退ではないということ。例えて言うなら、らせん階段のように大きな円を描いた道が一周し、再び新たな周回へと昇っていく、本当の意味で次への第一歩を踏み出したということなのだ。

（文・中島伸也）

花田 裕之



以前から田島貴男がインタビューなどでよく語っていた音楽に対する想い。文章を読んでいるときは、彼の音楽へのこだわりや情熱がビシビシ伝わってくるのだが、CDで聴くオリジナル・ラヴの音からはイマイチその想いが感じられず、私は今一歩踏み込んで聴くことができなかった。しかし昨年発売されたアルバム『風の歌を聴け』では、こぞって絶賛する音楽誌ほどではなかったものの、生命力を感じるストレートなメロディー、人間的でワイルドな歌詞に形容しがたいトキメキを覚えた。初めてオリジナル・ラヴというバンドの音に歌に、田島の音楽に対する想いがわずかながら見えたような気がした。

●●●

そして迎えた12月7日。ライブを見た私が確信できたことは、「オリジナル・ラヴは〝カッコイイ〟ライブバンドである」ということだった。〝カッコイイ〟という言葉は、彼らには誤解されがちな言葉かも知れないが、あえて使いたい。それほどヴォーカル、サウンド、ステージ、観客との距離、メンバー間の雰囲気などあらゆる点でライブバンドとしての完成度が高く、カッコよかった。

定刻ピッタリに始まった、スピード感と熱気あふれるステージでは、心地よい緊張感の上に信頼という見えない糸を張りつめた9人のメンバーが、音楽の楽しさ、激しさ、温かさ、素晴らしさをそれぞれ音に包み込んで弾き出している。それは9人中6人がサポートメンバーであることを忘れてしまいそうな一体感だ。その中央で、田島は長い手足をグニャグニャと動かしながら何度も観客をあおり手拍子を誘って、距離を一瞬たりともあけない勢いで歌っている。もちろん観客も曲に合わせてそれぞれ好き勝手に踊り、手をたたき、声を張り上げて本当に楽しそうだ。まさに一体化！　これこそライブ！　この状況を目の前にしてジッとしていることができず、私は一観客と化して手をたたき踊りまくった。

次々演奏されるのは、もちろん『風の歌を聴け』からのナンバー。「It's a wonderful world」（レゲエ調）、「心」（アコースティック調）などライブアレンジの施された曲が多いがどれも新鮮で、MCで田島が言った「前回のライブよりも、より発展させたライブにした」という言葉も納得できる。また、各メンバーの見せ場もきちんと設けられ、それぞれが観客を引き込む素晴らしい演奏を披露。バンドをただのバックバンド扱いにしないで一人ひとりの力を最大限に発揮させたことが、全体の音のグレードアップ、すなわち高度なステージへつながっていると強く感じた。

おなじみの「SCANDAL」「LET'S GO!」で大いに盛り上がった後、ラストナンバーは「The Best Day of My Life」。ドラムとパーカッション以外のメンバー全員が手にした民族打楽器の音が、気持ちいいほどピッタリと重なり合って会場に響きわたる。田島は「オオサカ」を連呼しながらステージを駆け回り、観客も「オオサカの パワーを見せてください」と言う田島に負けじとパワー全開で、まさに約10分間の〝The Best Time of My Life〟となった。

しかしそんなハイテンションな状態の観客を残して、メンバーは一瞬にしてステージを去り、観客は高揚した気持ちのやり場がなくて、即刻アンコールの手拍子を開始。十分満足のいくライブであったが「このままでは帰れない」、全員がそんな気分だったように思う。アンコールには、「接吻」「朝日のあたる道」と最新のヒット曲をようやくプレイ。その演出がかえって、それまでの2時間のライブの充実度を印象づけた。そして私自身は、彼らのライブを見たことで田島の語る音楽への情熱がハッキリと見えて「ようやくオリジナル・ラヴに踏み込めた」「もっと踏み込んでみよう」そんな気になったのであった。

ただ今回のライブで残念だったのは、「田島くんカッコイイ～」だの「手振ってよ」だの他の観客の失笑を買いながらも、それに気づいてか気づかずか、かけ声をかける一部の女の子たち。彼女たちのかけ声には、熱した気持ちを瞬間的に冷ます効果がかなり含まれていたように思う。彼らはこれからも前進していく。ファンもそれに取り残されないように前進してもらいたいものだ。

（文・山田純子）

ORIGINAL LOVE



今、ミュージシャンの名乗りを上げて活動している多くの人たちは、そのきっかけがどうであれ何かに影響されて始めたはずだ。そして、好奇心が膨らみ自らも楽器を手にし趣味的感覚でやり始めたら、いつの間にかメンバーが集まり、バンドが誕生。ってケースは少なくないだろう。そして、ライブ活動を続けていく中、テクニックも上達し、バンドとしてのスタイルも確立し始め、と同時にファンもどんどん増えてきた。そろそろメジャーを意識した活動をしていこうと、コンテストなどに出場。そんな時、常に目を光らせ、可能性のある素材を探し求めているレコード会社新人発掘担当者たちは「これはいけるかも!?」とわれ先にツバをつける。

その後、うまくいけば年間契約(たいていは2〜3年)され、所属事務所も決まり、メジャーデビューの捺印が押されるという運び。デビューが決定した段階から、レコード会社の制作、宣伝、営業と、そして所属事務所が一体となり、売るための会議が行われる(ここでバンドサイドの意見なり希望がどの程度優遇されるかは分からない)。そうして決められたプロモーションが、デビューアルバム制作と並行して進められ、晴れて(?)メジャーの仲間入り。しかし、実際はここからが大変。メジャーになったということは、言わば、音楽業界に就職したわけで、バンド活動は一つの職業となり、これで生活していくってことになる。となると、必然的に売らなきゃいけない。それを考えるのは事務所なり、レコード会社なんだけど…。一つのバンドを売るためには最初にぱく大なお金が動く。ペイしようと思ったらライブの動員とアルバムのセールスを上げなければいけない。この時点でバンドは商品。もし、予定していたお金が戻って来なければ、売れなかった商品として処分されることも多い。実際、バンドブームの後かたづけでは多く見かけられたが、現在でも行われている話だ。

この『麝香猫』もその例に漏れず、89年にメルダックより『Jaco-neco』という名前で、ロザ(G & Vo)、デビル(B & Vo)、グレース(Ds)の3人組のレディースバンドとしてメジャーデビューをしている。当時はちょうど、そのバンドブーム絶頂期。そんな中、レディースバンドの数が多かったにも関わらず、そのテクニックは群を抜いていて、ライブでのパワーとパフォーマンスは男性バンドに引けを取らない高水準なバンドとして取り上げられていた。しかし、彼女たちのデビューアルバム「Jaco-neco」はインディーズ時代のころとは違い、ポップな要素の入った当たり障りのないロックに変化していたという。彼女たちも売れるためにアルバムをリリースし、全国ツアーを展開、また、イベント等にも出演するといった精力的な活動を行った。しかし、サードアルバム「3P」をリリースした91年末に、プロダクションの一方的な都合により突然の解雇通達をうけ活動休止。レコード会社との契約もプロダクション側に破棄されるという最悪の事態に陥ってしまう。この時、メンバーのグレースが脱退。この時点から、Jaco-necoの記事は音楽誌から姿を消した。

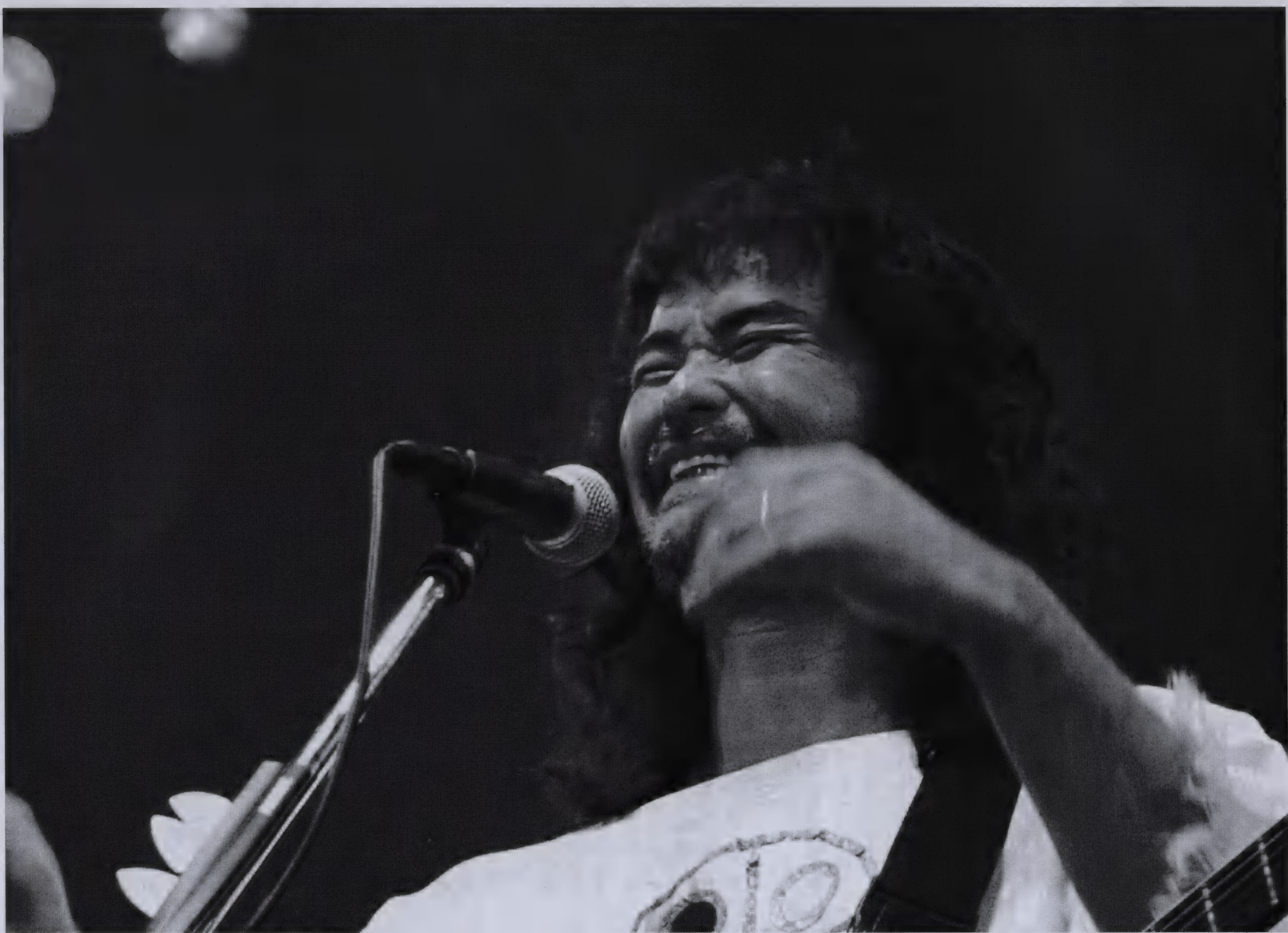
94年12月1日、大阪の十三ファンダンゴで麝香猫(インディーズとして活動を再開すると同時に名前も元に戻した)のライブを見た。メンバーは相変わらず3人だが、ドラムは男性(ブラザー)に変わっていた。現在の麝香猫は、メジャー時代の面影は全くなく、まるで別人のよう。特に2人の血の気が引いたような濃厚なメイクは怖ささえ感じる。ちなみにブラザーの髪の毛はモヒカン・スタイル。ライブは、何かを吹っ切ったようにも感じる半面、何かに向かって怒りをぶつけているのかとも取れるほどの迫力。もう怖いモノなしといったパワーでガンガン聞かせてくれるもんだから、こっちまで熱くなってくるぞ状態。ライブが後半に向かうほど3人のテンションは強烈に激しくなり出した。しかし、どんなに動き回ろうと決して乱れない演奏ぶりは、さすがに高水準と言われるライブバンドだ。演奏の途中で訴えるように「プロだったら自分たちにしか歌えないものをやれ!　カラオケで歌われるようなものはするな!」と言った、デビルのメッセージが印象的だった。

彼女たちが経験してきた『メジャー』は一体何だったんだろうって、ふと考えてしまった。インディーズという世界は自分たちのしたい放題ができる代わりに、時間や金銭部分で制約があり、それをすべて自分たちでコントロールしなければならない。反対に、メジャーの世界は音楽以外のことは全部人がやってくれる代わりに、精神的に制約されるところ。メジャーでも、成功すればまた状況も変わるんだろうけど、麝香猫のような場合は果たしてどうなんだろうか…。私個人としては、このファンダンゴで見た麝香猫はかっこいいと思ったけれど、もしまた彼女たちがメジャーのことを考えてるとしたら、今の日本の音楽業界ではきっと日の目を見ることは出来ない。でも、彼女たちはそんなことは百も承知だろう。それだから、あんなにかっこいいライブが出来るんだろうしね。

新しく生まれ変わった(いや元に戻った、かな?)彼女たちを応援したいな。

(文・村田圭子)

麝香猫



1977年の本土初上陸コンサートから17年。喜納昌吉&チャンプルーズが、再び中野サンプラザホールに帰ってきた。喜納昌吉自身が言うように、彼らのライブは現代の祭りである。祭りに備え、朝風呂に入り、ディズニーのボディソープで身を清めた僕は、開場の時刻よりも1時間も早く中野駅に到着。昔よく通ったサンプラザ近くの多国籍料理店「カルマ」に入り、ビールとキーマカレーを注文し、日の暮れるのを待った。アルコールと唐辛子の合法的トリップで、心身共に最後の仕上げをするためだ。

●●●

サンプラザホールの1階ロビーはいつもと様子が少し違っていた。沖縄県人会風の人達、バックパッカー風、ソウル・フラワー・ユニオン風ファッションの若者達等々、一見どんなイベントが行われるのか想像することは容易ではないといった感じだ。総じて言えることは、ヒゲ面が多いということだけだ。外国人のダフ屋というのも初めて見た。

暗転の中、メンバーがステージに現れる。チャンプルーズのオリジナルメンバー7人、笛の奏者1人、そして喜納昌吉。合計9人の大所帯である。何の前ふりもなく、いきなりオープニング曲「島小」が始まる。音がかなりでかい。音というのは不思議なもので、一定のレベルを越えると耳でなく腰の方から脊髄を通って脳にくる。それ故、その音の種類によってHIGHになったりBADになったりする訳だが、この場合はもちろん前者。

演奏は序盤からかなりのハイテンションで飛ばしている。ハイトーンのコーラスと三板の小刻みな響きに合わせ、胃の中の唐辛子が踊りながら頭に昇ってくるのがわかる。

やがてステージ後方のスクリーンが上がると、真っ赤な衣装を着て大小様々な太鼓を持った男達がずらりと並んで登場。昨年夏の「セントラルパーク・サマーステージ」でニューヨーカーの度肝を抜いたと言われるエイサー隊だ。ちなみにエイサーとは、太鼓やドラムを打ち鳴らしながら歌い踊る、沖縄の先祖供養のための祭りのことである。「ヒヤミカチ節」「ドンドン節」「騒乱節」の3連発。客は立ち上がり、思い思いの振り付けで踊り出す。席を離れながら通路へ出て行く自分の親父と同い年くらいのネクタイ姿のオッサンを、警備の若者も注意していいものかどうか困った顔をしていたが、結局見て見ぬふりをすることに決めたようだった。いつもと勝手が違うらしい。

終盤にさしかかったところで、名曲「花〜すべての人の心に花を〜」。目を閉じて聞いている者。一緒に口ずさんでいる者。それぞれがそれぞれの思いでこの曲を聞くと、映画「ロビンソンの庭」を思い出し、しんみりしてしまう。唐辛子に変わってアルコールが涙腺を緩める…。

がしかし、やっぱり「火神」では再び踊り出す唐辛子を止めることは出来ず、「ハイサイおじさん」では、唐辛子とアルコールの三位一体で、個人的にはかなり高レベルのトリップを体験することができた。

アンコールで再びステージに登場した喜納昌吉は、まだ踊りたりない僕達に向かってこう言った。「法律をちょっとだけ破るのは楽しいこと。でもそれは自分の責任でやらないとダメ」。これを訳すと「さー、みんなで歌って踊ろう。一緒に踊りたい奴は、ステージに上がってこい」となる。うそではない。その場に居合わせた僕達には、そう聞こえたのだ。そして始まったアンコールナンバー。沖縄の祭りにおいて、エンディングのスタンダード「唐船どーい」と「すくちな者」(「唐船どーい」は、ネーネーズのバージョンもなかなか味がある)。ステージ上は、チャンプルーズ、エイサー隊、ハゲオヤジ、サイケ小僧が入り乱れてのドンチャン騒ぎである。もはや警備員の目にも険しさはない。歌い踊ることが権力に対する無言の抵抗と成り得る事を、僕はこの目でしっかりと目撃した。今こそバカになる時なのだ。

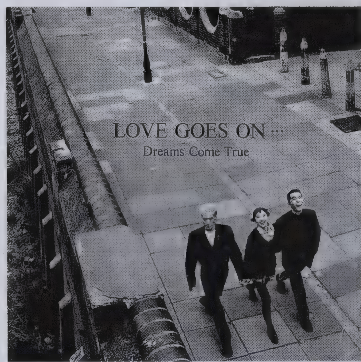
(文とイラスト・溝口イタル)



喜納昌吉&チャンプルーズ

SINGLE & ALBUM COLLECTION DREAMS COME TRUE















〝夢がかなう‼〟、何ともうれしいバンド名である。今回は春にニューアルバムをリリース予定である「ドリームズ・カム・トゥルー」を取り上げて、彼らの6枚のオリジナル・アルバムから詞と曲について探っていきたいと思う。

ドリカムは88年1月、現在のメンバーでバンドを結成。89年3月に1stアルバム「Dreams Come True」でデビューを果たす。メインヴォーカルで作詞作曲を主に行う〝吉田美和〟を中心に、すべての曲のアレンジ、シンセリズム・プログラミング、ベース、そして作曲も行う〝中村正人〟、キーボード、音色担当の〝西川隆宏〟の三人によるユニットである。音楽界では〝松任谷由実と松任谷正隆〟〝竹内まりやと山下達郎〟〝矢野顕子と坂本龍一〟等アーティストとアレンジャーの関係が後に夫婦に発展して良質の作品を多く生み出している場合が多いが、この彼らの三人の関係はこれからどうなっていくのだろう？　B級週刊誌的興味ではあるが、少し気になったりもする。

さて、彼らは同89年11月、2ndアルバム「LOVE GOES ON…」を発表(シングルヒットした「うれしはずかし朝帰り」収録)。翌90年11月、3rdアルバム「WONDER3」を発表。このアルバムがミリオンセラーになり一気にビッグアーティストの仲間入りをする。これから年一回のアルバム発売が続き91年11月には4thアルバム「MILLION KISSES」、92年11月には300万枚以上の売り上げを記録した5thアルバム「The Swinging Star」(93年1月にはNHK朝ドラマの「ひらり　オリジナル・ドラマ・トラックス」も発表している)、93年12月には6thアルバム「MAGIC」を発表する。そして昨年94年は、アルバム発売こそなかったが11月にシングル「すき」を発表して元気なところを見せている。

さて、それではこれら6枚のオリジナル・アルバムからドリカムの音楽に迫ってみよう。

★メロディー・サウンド・アレンジについて

何といってもドリカム音楽の肝は吉田美和のヴォーカルにある。バックのアレンジがどのように変化しようとも、その歌声を聞けばドリカムであることがすぐに分かる程、彼女の歌の位置はこのバンドのメインになっている。おそらく彼女が影響を受けているのはディオンヌ・ワーウィックやバート・バカラックに代表される60年代から70年代にかけてのポップセンスあふれた時代の曲ではないかと思うのだが、その中でも特に兄妹デュオで一時代を築いた「カーペンターズ」のカレン・カーペンターが彼女の師匠ではないかと思う。少し

鼻にかかったような独特の声、ゆったりしたヴィブラート、それにメロディーの変化にスムーズに合わせ詞を大切に歌う吉田の声は、カレンの安定した唱法を想い起こさせる。

ほとんどの曲の作詞・作曲は吉田が手がけ、時に中村も作曲しているが、彼らを大ブレイクさせたポップなメロディーの秘密として次に挙げる手法がある。

例えば「決戦は金曜日」を例に取ると、この曲はマイナーコード進行をベースにしているが、何回も1フレーズの最後の音がメジャーコード化しているのである。それもポップスの基本形循環コード進行の中のマイナー・メジャーでなく(例：C～Am～F～G7のコード進行の中のAm等)、突然何の前触れもなく一音あるいは二音、そこだけメジャーに変わる。この手法は3rdアルバムから見られるようになる(M-11「2人のDIFFERENCE」)。マイナーは一般的に暗い雰囲気となるが、この独特の転調?(と言わせてもらう)を使用してメジャーと混在することによって、ドリカム独特の他にはないイメージを出すことに成功している。

その逆にメジャーからマイナーに転調する曲もある。どこかのインタビューで見た記憶があるが、彼らが楽曲至上主義(あるいはメロディー至上主義)で新しいメロディーラインを産み出そうとしていることの証明の一つでもあろう。

サウンド・アレンジについてみると、1stからすべてシンセとリズムマシンで構成したバッキングにブラスのみ生音を配置し、それが4thまで続くが、1stは特にダンスポップの色合が強い。それに、少しファンク色の味付けをした曲もあるが、アルバム全体を通して聞くと少し一本調子である。

2ndから70年中期に黄金時代を築いたモーリス・ホワイト率いるファンクバンド「アース・ウィンド&ファイア(EW&F)」のアレンジの影響が色濃く出てくる(中村は大のソウル・ファンク・ファンで元々はそういうバンドをしたかったというのをインタビューで読んだことがある)。「決戦は金曜日」はその典型でEW&Fの大ヒット曲「セプテンバー」等によく似ている(今回17年前のEW&Fベストアルバムをひっぱりだして思わず聞いてしまいました)。

3rdでは先述の巧みな転調をメロディーに取り入れファンクも手慣れた感じになり、ミキシングも豪華になってくる。忘れていたが、ドリカムの作品は、1stからMIKE PELAという人が一貫してレコーディングとプロデュースを担当しており、録音場所はロンドン、バックのホーンセクションも毎回同じメンバーが担当し、一つのドリカム・ファミリーとして制作を重ねるごとに成熟していくのがアルバムを聞いてもわかる(アメリカのソウル・ファンクを参考にしながらイギリスで毎回録音とは、本当に日本のミュージシャンも恵まれたものだ)。4thは前作までとちょっと違って、ハウス・ラップ風のチープなリズムマシンの音色を使ったり、ハードロック風のギターが出てきたり、今までにない趣向の部分を見せる。

次に大ヒットした5thはそれまでの中で一番ポップで、しかもバラエティーに富んだ内容になっている。イントロは前作の4thの最後の曲「銀河の船」のフレーズをM-1「The Swinging Star」で再演し2曲目につないでいる。アレンジもジャズ・バートバカラック・ファンク・ユーミン風? と曲の味付けに凝っており最後まで一気に聞ける。このアルバムより生ドラムを使い始め、それも楽曲の幅を出すために一役買っている。

6thはビートルズ的なアレンジの要素も取り入れ(イギリス録音が効いている?)、「愛してる愛してた」のスパニッシュギター・デュオとタップ、「HAPPY HAPPY BIRTHDAY」のハンドクラップとタップにアカペラ、に見られるようにアコースティック・ナチュラルな感覚の曲も盛り込んでいる。こういう曲では吉田のヴォーカルが一段と冴え、ドリカムの楽曲の底力を見せつける。

★作詞について

詞はすべて吉田が提供しているわけであるが、一枚目より順に見ていこう。

基本的に彼女の詞は"恋の歌"がほとんどで、1stでは男性にあこがれる気持ちを歌った詞が多い。近ごろのポップスの歌詞には珍しく彼女の詞にはあまり外国語が使われていない(メインはそうだがバッキングヴォーカルはほとんど英語を使っている。これはバッキングに外国人シンガーを使っているため? と、しゃれたイメージを出すため?)。これも、吉田のメロディーをきっちり伝えるためではないかと考えられる。しかし、1stには英語を折り込んだ曲が数曲ある。

2ndでは積極的に攻める女性の姿を歌った歌詞が登場する。「うれしはずかし朝帰り」、この曲のサビ・フレーズと言葉のマッチングは、それからのドリカムの大ブレークの予感を秘めている。自分の気持ちと周りの雰囲気・情景を見事に歌った極上のポップスである。"ユーミン"のとらえ方に似通った部分もある「未来予想図II」では、卒業した二人のことを歌っているのであるが、"ユーミン"と違って、未来は"思った通りにかなえられていく"。これが世代の違いであろうか?

3rdでは「戦いの火蓋」のように、一人の男に火花を散らす女性の心理を歌っている。活発でしかも自立している女性の姿がこのアルバムより明確に出てくるようになる。このイメージが4th、5thと続き「決戦は金曜日」のような大ヒット曲になっていく。

この曲では"愛を告白するのが金曜日の夜"なのだが、どこにも"告白する""言うつもり"といった表現は出てこない。"一人悔やむ週末にはなりたくない""今日こそは決戦だ"と言う気持ちが、感情の動きの中でひしひしと伝わってくる。詞としても楽曲としても素晴らしい出来である。「眼鏡越しの空」では、バカラック調の曲に乗せて"あなたのようになれたら"と、好きというより男性の生き方・姿勢にあこがれる、女というより人間としての気持ちをさわやかに歌っている。

6thでは、「go for it!」。考え方のまるで違う二人の事を、それぞれの引力が違うからこそ世界はもっと広がってくる、と歌う。

いずれにしろ、自分をしっかり持った自立した女性が、男性と同等な立場で恋をしていく心情を歌った詞が彼女のテーマとなっている。

★これからのドリカム

タイアップによる安易なヒット曲が氾濫している日本のポップス界の現状。長期的に見てアーティストにプラスになるとは思えないし、曲は知っていても歌い手の顔の見えない"アーティスト不在"の時代にあると思う。その一方で、松任谷由実やこのドリームズ・カム・トゥルーはソング・オリエンテッドなアーティストの重要性を、ある部分証明してくれる。売り手もただ商売に走るのではなく、作品として残っていく音楽の社会での意味を再認識してほしい。作り手は自分の表現したいことを正直に伝える必要があるし、音楽業界に関わる者はそのアーティストが発するメッセージ・感覚をストレートに聞くものに届ける手助けをする義務があると思う。

ドリカムのメンバーは今、次作を生み出す難産の真っ最中だろうが、これからは"恋の歌"だけに留まらずすべての世代が耳を傾けることの出来る、素晴らしい作品を届けてくれることを心から願って待ちたい。

(文中の敬称は省略)

(文・毎日映像音響システム 中伏木寛)

INDEPENDENCE

THE PORT INTERVIEW



村上(Vo)と三島(Ds)を中心に、それまでのアシッドジャズ的なサウンドにピリオドを打ち、歌中心のシンプルなロックを目指すバンドとして、92年3月に結成された『THE PORT』。そのサウンドは、アコースティックな世界をポップに、そして繊細に聞かせるロック。そんな彼らが、これまですべて英詞だった楽曲に日本語の歌詞の曲を加え、そして、そのサウンドさえも変化させようとしている。バンドとして活動していく中で生じる様々な葛藤と向き合い、試行錯誤しながらも自分たちの理想を追求、成長していきたいというTHE PORT。洋楽志向の彼らが、今、日本のロックバンドとしての意識を持ちながら、あくまでも『ROCK』に対するひたむきさと、奥深いこだわりを感じさせ始めた。

●「PORT」という言葉には何か意味があるんですか?
村上(Vo):別に意味はなくて、言葉の響きがいいなあというところで。イギリスのFALLとかFELTっていうバンドがあるんですが、なんかそういうシンプルでロゴみたいなのがカッコいいなあと思ってつけたんです。
●4曲入りのCD「a bird and me ...」がインディーズのポルスプエストからリリースされていますが、これはいつごろにつくられたんですか?
村上:1年ほど前ですね。
●このアルバムでは歌詞はすべて英詞なんですが、最近は日本詞の曲も作り出したとのことで、その変化はどういうところから?
村上:僕はもともと洋楽が好きで聞いてて。で、日本のロックにはええもんがないっていうか…、どうしても歌謡曲に近いイメージがあったんです。でも、最近は「あっ! カッコいいな」って思うもんもあるんですけどね。もともと商売商売って考えてやってなかったし、やっぱり、ロックは英語やなというのもあったし…。でも、英語はしゃべれないんですよ、全然ね。そこの葛藤ってあるんですよ。イギリスから来日したバンドの前座もやったことあるんですけど、なんか自分の中でしっくりこなくて…。この1年、悩んでたことなんです。
三島:最初はこだわってやってたんやけど、やってみたらそのこだわりが取れちゃったってところはあるんですよね。
村上:日本語に関してはこれからやと思うんですよね。日本語にするから、サウンドの部分でもっと考えたいなあっていうのはありますね。英語やったらただカッコいいですむところでも、日本語の場合はいくら曲がロックしてても、その辺にいるバンドと一緒になってしまうんで、更に、オリジナリティーの部分を出さないとだめだと思うし、そこで何とか頑張れたらいいんですけど。自分らなりの日本語をね。
●村上さんの書く詞の世界ってどんなものなんですか?
村上:う~ん、これはねあんまり話したくないんですよね。あくまでも「詞」なんでね…。敢えて言うと、自分の中にある二面性の部分にすごく興味があるんです。それは、「闇」と「光」というか、ちょっとええかっこして言うと「愛」と「悪」(笑)。それは常に同居するもんだと思うんですよ。僕はやっぱり、『愛』(照れくさそうに)がテーマやと思ってるんです。目に見えないものを信じる気持ちっていうかね。P-ファンクのジョージ・クリントンの好きな言葉で「FANTASY IS REALITY」っていうのがあるんですけど、「幻にこそ現実があり、現実にこそ幻がある」っていうね。だから、そのどっちなんかっていうところで…。詞に関しては言い切れないですね。ただ、押しつけだけは絶対したくないんですよね。
●曲はアコースティックを前面に打ち出したポップなものなんですが、日本語の歌詞ということも含めて目指していくサウンドというのはどういうものなんですか?
村上:今まではすごく民主的にやり過ぎたなというのがあって、メンバー4人のね。だからちょっと、とっちらかってる部分もあるんですけど。アコースティックというのはTHE PORTをやり始めた時からのものなんでね。と言ってもエレキも使ってるし、シンセも使ってるんで、まあ、アコースティックな感触はずっと持ち続けていって。もちろん、詞の世界とも連結させていきたい。僕



の場合は、歌いたいことがまずあって、それを曲にするので。今までの曲は、さっき話した一面のあったかい部分ばかりが出てたんです。でも今後は、一種の浮遊感とか、覚醒感、サイケデリックというところを出していけたらなぁと思いますね。具体的には、60年代後期～70年代初頭のブリティッシュサウンドをやりたいんです。例えば、ビートルズの『サージェントペパーズ』の世界（67年にリリースされたビートルズ中期の代表的なアルバムで、それまでのスタイルを根底から覆した異色の作品）を。だから、もうちょっと毒というか、ヒネリの部分を出したいなあと。

●で、ライブなんですけど、結構クールなのかなあと思っていたら、そうでもなかったりするんですね。

村上：クールにしたり、アットホームっぽくなったり。別に、意識してるわけじゃないんですけど、その時の状態でバラバラですね。

三島：ライブの時の村上さんの状態で決まりますね。

村上：ライブはほんまに『水モン』ですからねえ。「今度がんばるぞ！」って思ってても、ステージに立った一瞬でテンションが下がったりねえ。ライブはほんま、どうなるのか全然わからないですね。

●THE PORTはライブバンドだな、と思ったんですが？

村上：いや、僕の理想はレコーディングバンドなんですけど（笑）。僕の夢なんです。ライブももちろん好きなんですけどね。作品が出来たらレコーディングして、CDを作ってね。なんか、ライブでは楽しんでもらって、CDではじっくり聞いてもらいたいんですよ。

●CDはこれからも作っていくんですね。

三島：もちろん。

村上：ちゃんと時間かけれたら…。ビートルズのサージェントの時代にあこがれるっていうのは、スタジオが自分の家じゃないけど解放状態でしょ。サウンドにも実験につぐ実験っていうのが出てますよね。僕は、『実験』という言葉が好きなんですよ。うちにはキーボードがいるんで、いずれはホーンとかストリングスとかパーカッションなどを入れたいなっていうのは一つの夢なんです。

●レコーディング大好きって感じですね（笑）。

村上：しんどいんですけど、やっててゴッツイ充実感がありますからね。

●THE PORTとしてはメジャーを目指しているんですか？

三島：音楽に没頭できる時間が一日中あるとなったらメジャーしかないでしょうね。

●でも、そうなるとまた、いろいろと制約が出てきたりしますよね。

村上：お金がからんでくるからね。売れる曲をするのが当たり前っていうね。

●このままでは売れないけど、変えれば売れるぞ！　みたいなね。

村上：ほとんどそうですよ。

三島：絶対そうだと見てますね。

村上：だからね、自分で葛藤してますよね。そこで、今まで大事にしてきたモノを全部つぶすんやったら、結局やれないと思うんですよ。やっていけなくなって、結局つぶれると思うんですよ。そこが、ディレクターなり、プロデューサーとの戦いだと思うんですけど。それをしたたかにやっていけるのがプロという意味じゃないかなあと。でも、ある種、純粋な気持ちを残していこうとしたら、すごく難しいと思うんですけど。

●そうなると、よっぽどの覚悟が必要になりますよね。

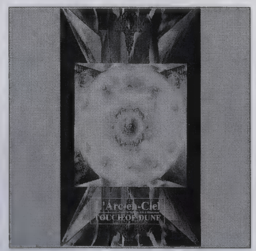
村上：アメリカとかでね、R.E.Mというバンドがグラミー賞を取ったり、インディーズでも、好きなバンドがみんなから尊敬されてるっていうのは、すごくあこがれますよね。インディーだけど、音楽だけで生活が出来たらうれしいですけどね。そういうのは日本にはないですからね。

●最後に、今年の展開としては？

三島：作品は発表したいですね。

村上：今年は、それを形にしてね。あとは、自分たちの世界を表現できるようになったら、おのずと何かは付いてくるだろうって思うんですよ。それは自信でもあるし。

（インタビュー・村田圭子　撮影・佐藤潤一）



「TOUCH OF DUNE」/ L'Arc~en~Ciel

ヴィジュアル系と言われるバンドは、『ヴィジュアル』と言われるだけに写真や映像というものに重点を置いているバンドが多い（ヴィジュアルだけに重点を置き過ぎてサウンドがお粗末なバンドも多いが…）。しかし、彼等の写真や映像は、きまって素顔が分からない程の厚化粧で黒い服を身にまとい、ドロドロしたサタニックな雰囲気を漂わし、血が飛び交う殺ばつとしたイメージの映像か、またはアイドル・タレントのビデオのようにソレっぽいロック版イメージ・ビデオのようなものが氾濫している（中には評価できるクオリティーの高い作品もある）。

別にジャンル分けなんて『ROCK』ということだけで必要ないと思うが、一応このL'Arc~en~Cielも、そのヴィジュアル系の枠に入れられている。それは、ヴィジュアルを大事にしているバンドということであって、「化粧しているから」などという低次元の振り分けで入れられるのではないと言っておきたい。

そんなL'Arc~en~Cielがインディーズ時代にリリースした「TOUCH OF DUNE」（93年10月21日発表）。インディーズ・チャートの第1位を飾ったアルバム「DUNE」の中から、タイプの違う3曲を選び映像化したビデオで、限定[illegible]本でリリースされたため瞬く間に完売となった。当然のことながらインディーズ・チャートで1位を記録した作品である。

このバンドの音は知らなくてもヴォーカルのhydeがカセット・テープのTVCMに坂井真紀嬢と共演している（最近、見なくなったが…）ので、その美形ぶりはご存知の人も多いことだろう。そんな特異なアーティストのいるヴィジュアル系バンドの出すビデオなのだから、本作品はこの美形ヴォーカリストをアイドルっぽく撮って商品にした映像ソフトとなって…というものではけっしてない。

「曲から得たイメージを絵に描いて、自分がその世界にいるという気持ちで詞を書いている」というhydeの言葉のとおり、曲に合わせたイメージの映像として完成度の高い作品に仕上がっている。

サウンドというのは目に見えないもので、耳と体全体で感じ個人それぞれがイメージを描いている。このL'Arc~en~Cielというバンドのサウンドを表現するとすれば、どうなるのか…『木々のざわめき』『あたたかい陽射し』『やさしい微風』etc.と自分を温かく包み込む自然のもののように私は思う。

そんな独特のサウンドを送り側であるバンドのイメージを重視した映像として表現したこのビデオは、スタジオや野外ロケで撮影された映像を巧みに使い、幻想的な雰囲気を醸し出している。またライブに近い演奏シーンでは、ファンの女の子が失禁(!?)してしまいそうなhydeの視線も盛り込まれて、ファンにはうれしいアイテムだろう。

ただ、限定でリリースされたため、現在は入手不可能で、極悪非道な悪徳商人によって高額なプレミアが付けられ取引されているという残念なアイテムでもある。やっとファン・クラブも発足したことだし、せめて入会した人達だけにでも再リリースしてあげてほしいものだ。

収録曲：

「DUNE～失われた眺め」

砂丘に蜃気楼のように浮かぶhydeの姿。そして、一枚の扉がその世界を閉ざす。「DUNE」は、その扉の向こうからメンバーが現れて始まる。

壁も床も真っ白で楽器以外のものは何もないセットで演奏するシーンと、メンバーが登場した扉とそれにつながる数段の階段が中央に置かれた黒い壁と白い床のセットで演奏するシーンが動きのあるカットで交差。開かれた扉の向こう側には、三日月が浮かぶ砂丘が見えている。時折、砂丘の映像の上に演奏シーンを重ねたり、メンバーの一人一人が砂に溶けていくカットを交えながら、ライブ的な演奏シーンが繰り返される。扉の向こうの三日月の浮かぶ砂丘の中へhydeが溶けていくシーンで終演を迎え、「失われた眺め」のピアノが奏でる悲しい旋律の中、有刺鉄線に囲まれたメンバーが映る。

「Floods of tears」

メンバーそれぞれの持つイメージを映像化。雨に打たれながら壁を背にして膝をかかえ歌うhydeの姿をメインにメンバーの映像が入る。激しく人が行き交う都会の雑踏の中にたたずむtetsu。牧師のような格好で教会を後にし、何本ものローソクの灯に囲まれ、手にしていた十字架を捨て去るken。牢獄の中で愛撫するように抱きしめていたキリスト像を投げ捨てるsakura。そして、妖精のように湖面に立つhyde。その姿は鳥肌が立つほど美しい、神秘性を醸し出している。その後に雨に打たれる[illegible]が物語の終わりを告げるかのような切ないメロディーを刻む。

「As if in a dream～VOICE」

眠りから覚めたhyde。しかし、その瞳は再び閉ざされたままで、その時に一瞬見る夢のシーンのような幻想的で解放感のある映像が画面いっぱいに広がる。

青く壮大な空をバックに大自然に溶け込むL'Arc~en~Ciel。所どころに生い茂る草（置いているようであるが…）から生命を感じる大地のステージ。自然の霧と太陽の陽射しによる演出効果、そして空に溶けるように歌うhydeの声。やはりL'Arc~en~Cielは、自然というものにマッチする。しかし、tetsuのピンクの衣装が、バンド自体がバックの自然と同化してしまうのを拒むかのように衝撃的で、それが逆にL'Arc~en~Cielの存在をより一層幻想的なものに思わせる。

エンディングの「VOICE」では、雲が流れる抜けるような青い空をスクリーンに、ライブの映像が映し出される。開放的な大自然をバックにしていたメンバーが、同じ衣装で閉鎖的なスペースでライブを行うといった、幻想的であり現実的なシーンが収められている。

（文・樹音檸檬）



「LIVE」/おかげ様ブラザーズ

ここ最近は劇団☆新感線（羽野晶紀、古田新太のいる劇団）のオロチ・ロックショーや、『お笑い』の後ろに隠されていた怒涛のテクニックをオーディエンスに浴びせかけているきんた・ミーノ以外のおかげ様ブラザーズ。

その『おかげ様ブラザーズ』の母体となる『トミーとミーノ』というフォーク・デュオが誕生したのが[illegible]年。翌年、このデュオに金子鉄心が加わり、アコースティック・ギター2本と尺八という異様なユニットとなった。更に80年、きんたがドラムをたたいていた『他力本願』が、このユニットに合体し、トミーとミーノ＆かねてつおかげ様ブラザーズが誕生。数々のメンバーチェンジを繰り返し、85年にトミーが脱退したためバンド名を『かねてつおかげ様ブラザーズ』と改名（"かねてつ"とバンド名に付いていれば、いずれ某食品会社からCM依頼がくるだろうと付けられたらしいが実際は来なかった）。

86年、メジャー・デビュー。バンド名も某食品会社以外からのCM依頼も考え『おかげ様ブラザーズ』となった。[illegible]アルバム「X-GUN」「おかげ様ブラザーズ」と12インチ・シングル「FOUR OF KIND」を発表。しかし、おかげ様ブラザーズにとっては、常に表現規制との戦いだった。そんな鬱憤（うっぷん）を晴らすかのように、91年12月に本アルバム「LIVE」をインディーズで発表。メジャーでは発表できない昔の名曲が数多く収録された。

収録曲：

「100%ダッチワイフ」

歌詞がまともなら…と考えてしまうが、この歌詞で弾けるように歌うきんた・ミーノには感服。「中森明菜タイプ」と歌った後に、「デザイア」と力の込もったバックコーラスが入るあたりの笑いのセンスはサスガ。

「人間ポンプ」

関西ローカルの深夜TV番組「イミダス」（出演・羽野晶紀、立原啓裕他）のテーマ曲だった。人間ポンプの安田里美氏の芸に深く感銘し作られた曲。

「鶴亀」

基本はR&Rやハードロック風のハイトーン・コーラスやスカ調にも変化するアレンジなど[illegible]ない演奏力を披露。

「世直し音楽隊」

市民権を得たが商業的な音楽となってしまったJ-ROCKへの怒りの曲。『笑い』で攻めるのがなんともおかげ様らしいが、だからこそ本当のことがスパッと言えるのだろう。インディーズ盤ならではのMCは、うなずける。

「ドラムの叩き語り」

『ドンドンパンパン～』『うちの親父はハゲ頭』という掛け声で行われるドラム・ソロ。半端でないテクニックであるからこそ許されるソロである。

「AIDS」

サビが様式美化したり、フェイドアウトするアレンジ。おかげ様の演奏力を実証する。

「狂劇パラダイス」

かなり危ない歌詞。宮崎[illegible]事件（覚えていますか？）を題材にしたらしい。

「MC」

笑いの絶えないMC。関西人は笑えます。

「ちょっといいですか」

吉幾三のバックでハードなギターが鳴っているような『演歌＋ロック』サウンド。布教活動に奮闘する外人さんの歌。

「ドラムの叩き語り～WE LAW」

下手なドラマーが同じ事すると許せないだろう。また、LOUDNESSのようなヘヴィーなサウンドで歌われる「WE LAW」は名古屋名物の[illegible]なくてもいいだろう。QUEENのような「ウィロ～・ザ・チャンピオン」というコーラスは笑える。

「アルツハイマー」

キーボードが前面に出、メロディアスな歌謡曲の持つ[illegible]さを引き立たせている。

「近親相姦」

チョッパーで攻めてくるベース・インパクトのあるヤンキーな曲。レコ倫に引っかかってメジャーで出せなかったらしい。12分にも及ぶ高い演奏力を披露するパフォーマンスは圧巻。当然、笑いも有り。

「子宮の中へ」

歌詞の主人公である、行き詰まった会社員「僕28才」をリアルに感じてしまう…。ユニコーンの「大迷惑」を彷彿させる。

「信心」

歌詞を変えれば、日本人好みの演歌ロックとして発表できるかも…。

「鉄心音頭」

[illegible]スの金子鉄心の[illegible]を[illegible]愛情の込もった音頭。

（文・28才会社員）

PresS ManiA
volume 4

［末田 晃］

単なる音楽ファンである僕は例に漏れず音楽雑誌が大好きだ。当然様々な音楽情報が得られるのが最もうれしいのだが、同時に、聴覚に訴える音楽を半ば強引に視覚的に写真や文字で読者に伝えようとする、“けなげ”で“はかなげ”な姿がたまらなく愛しい。毎月毎月手にする愛すべき様々な音楽雑誌(当然このJ-ROCK magazineも含む)。その数々の音楽記事や雑誌にまつわる出来事を、単なる素人音楽好きの目で観察し、あくなき挑戦に“全く勝手に”一喜一憂してみたい。礼儀知らずな奴、業界のしきたり知らずのバカ者などと攻撃せずに、せっかくだから何とかの独り言と思って一緒に楽しんでもらえたら幸いだ。

●長渕剛氏と桑田佳祐氏の問題は相変わらず、ある所では真剣に一種の過激さをはらんで、またある所ではお気楽なギャグとして語られている。今年の正月このテのジョークを何回、TVのバラエティー特番で耳にしたことか。全然笑えないですね。

なぜか某V誌１月号に、長渕氏のこの件に関するインタビューが「俺は桑田佳祐を許さない」というタイトルで掲載されていた。彼の発言は当然「怒り」に満ちていて、これはただじゃすまないぞ的な怖さを感じたけど、正直言って僕はどちらがどうだとかいうことには全く関心はない。どこまでが真実なのかなんて僕たち一般人には見えないことだし、何だかどこかの芸能トップ屋さんに踊らされてるみたいで嫌だ。何と言ってもそんなこと両氏の音楽に何の関係もないことですからね。桑田氏のあの曲を初めて聴いた時には、キツイなって感じたけど、きっと両氏は音楽でやりあうのだろうって考えてた。でも、今では何だか週刊誌ネタみたいになってしまって……。お願いします。僕は両氏のファン同士がいがみ合う姿だけは絶対見たくありません。

●シングル「MOTEL」が好調のB'zの約１年間を費やしたThe 9th Bluesツアーが終了。A誌、P誌では代々木体育館でのライブの模様がレポートされていた。

開演前のサウンドチェックのギターの音に妙にこだわってしまう記事は、いいのか悪いのかいまいち判断できない。妙な形容詞を連発して、何だか書き手の“どうにかこの衝撃を文字で伝えねば”というあせりにも似た努力を感じさせていた。でも、ライブを観ていない僕には、どちらかと言えば、面白味はなかったものの、単純にあったことを文字どおりレポートしている“あらすじ”みたいな記事の方が役に立った。

こんな風に同じコンサートを違う雑誌が取り上げた記事を読み比べるのは雑誌好きにとっては、至高の喜びである。ライターの力や、その雑誌の編集方針が明確に浮かび上がってくるのだから、たまらない。素人の皆さんもこういった機会に、自分が信頼できる雑誌を選べばいいのではないでしょうか。

そういえばJR誌は、昨年６月の大阪城ホールでのコンサートを、面白くレポートしていたので、少し期待していたのに、今回は取材してないのでしょうか？ 逃げてるんじゃないでしょうね。

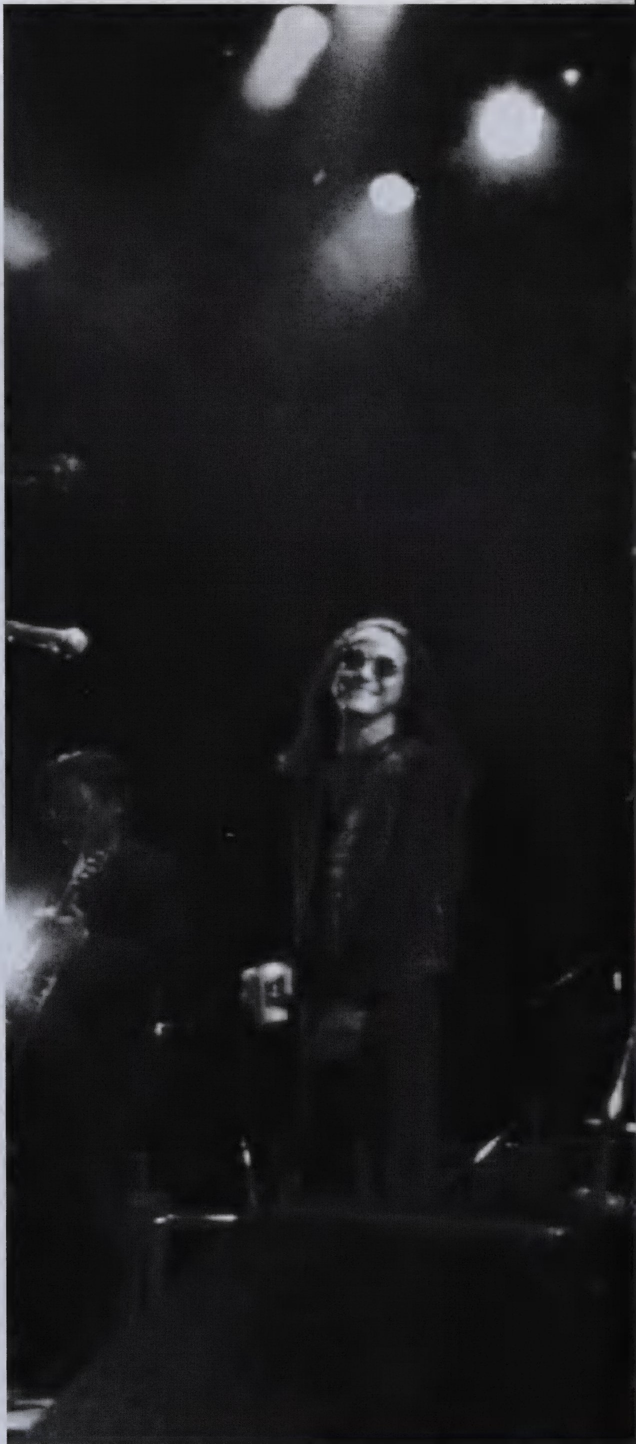
●B誌に興味深いcorneliusの小山田圭吾のインタビューが掲載されていた。とても面白かったのは、彼がコンサートの前に実施される来場者のアンケートにすべて目を通しているという所。こういうのって普通、事務所の人が読んでマーケティングの貴重なデータにするだけだと思ってたけど、全部読んでしまう熱心なアーティストもいるんですね。アンケートには応えてみるものですよ。

どうも彼は自分の音楽を聴いてる人達が他にどんなアーティストが好きなのかというのが気になっているようだ。気持ちは分かります。ピチカートファイブとか小沢健二、奥田民生あたりの名前が出ているのは納得しているようだが、一部、納得できてないアーティストの名前もあるようで、ちょっとニンマリしてしまった。けっこうハッキリ言いますね、この人は。

●V誌では、VOGUEのCHIKAの印象的な発言があった。彼は、最近の若いバンドに、自力でイベントやプロモーションをしようという自発性がないことを指摘している。他力本願だということだ。派手なルックスに隠されがちな彼のバンド活動に対するポリシーがはっきり伝わって来て、とてもたくましく感じられた。

「編集の人と知り合いになれれば雑誌に載せてくれるなんて考えはおかしい、自らが主体的にアクションを起こさないと…」と彼は言う。確かにこんな安易な考えが若いバンド達に巣くっているのは悲しい現実だ。自分たちの音楽で編集者を惹きつけるのが先決でしょう。でも、雑誌側にも問題がないわけではない。雑誌とアーティストの仲の良さが、誌面から感じられても、そんなもの何になるんだろう？ 対等な立場で「良い・悪い」が言い合えない関係なんて……。





すべてのロックミュージックの父であるブルース。今、色々な所でブルース復興がささやかれている。ブーム？トレンド？　バカバカしい話だ。ブルースは僕たちが現在親しんでいる本当のロックに常に息づいている〝濃い血〟〝太い骨〟のような音楽なのだ。『トレンド』みたいな軽薄な言葉で語るべき音楽ではけっしてない。近ごろメジャーで元気いっぱいのビッグ達の中にもブルースを敬愛してやまないミュージシャンがあふれ、彼らの思いは確実にその音に体現されている。

その時々の流行音楽やミュージシャンに短絡的に熱中するのも楽しいだろう。しかし、彼らのルーツを知ることで、その音楽は聴くものにとって、より深いものへとその価値感を高める。

彼らは自分たちのサウンドであなたたちの手を取り、奥深い音楽の入り口に誘(いざな)っているのかも知れない。一歩踏み出すのは簡単。ブルースはいつでも大きく腕を開いて、孫達が訪ねて来るのをにこやかに待っている。

繁華街の路地を一本入ると、ぼやけた灯の下から、かすかに音楽が流れてきた。興味半分で、その音のする場所に立つ。そこには、時の流れを感じさせるすすけた感じの木の扉があった。一瞬の躊躇(ちゅうちょ)とわずかな勇気を携えて、ちょっと重めのドアを開けると地下に向かって伸びる階段が現れた。両サイドの壁は、黒人のポスターと落書きで埋め尽くされている。視点も定まらぬまま、階下の扉を開けると、タバコの煙とアルコールの匂いの中、「BLUES IS ALLRIGHT」が胸に飛び込んで来る。

演奏の迫力に呆然としていると、薄暗い室内に目がだんだんと慣れてきた。客席を見渡すと、グラス片手に聴き入る人、ノリの良いリズムに合わせて指を鳴らす人、プレイヤーのソロに合わせて「Allright」と叫ぶ人と、その場にいる観客一人ひとりが、自分自身のスタイルでライブを楽しんでいる。だれ一人として全員でこぶしを突き上げて盛り上がろうなんて考えていない。自由な音楽の前では自分も自由でありたいとただ願っているだけだ。都会の生活の中で、周りに気を遣いけっして自分をさらけ出すことの無かった自分にとって、プレイヤーと観客が生きる喜びを分かち合っているこの場に存在できたことは何物にも換えられない、無上の喜びとなって胸を高鳴らせた。

おもむろにステージで、リーダーらしきギタリストが「次はDのブルーズ」とだけつぶやいて演奏が始まった。曲名の無いその曲は、12小節のテーマを数回繰り返した後、ギターのソロに切り替わっていった。ひとしきりスクイーズなギターのフレーズが終わると、そのフレーズに答えるようにサイドのハープが絡んできた。フレーズの掛合いは、時に激しく互いの個性をぶつけ合いながらコール&レスポンスを繰り返している。激しい個性のぶつかり合いは、得てして一方的な主張に終始して〝争い事〟を生み出したりするけれど、お互いが相手の個性を尊重し、信頼することが出来れば、争い事など起こらないんだという事を二人のプレイは教えてくれているようだった。

こうして、徐々にではあるが、今までのコンサートやライブとは違う自分なりの楽しみ方が分かってきたことが無性にうれしかった。気がつくと僕は自然と「Allright」と叫んでいた。

ライブもいよいよ佳境に入り、ドラムはシャッフル・ビートをたたき出した。白熱する演奏に身を委ねながら、以前一人のブルーズマンが言った言葉を想い出した。

〝Thank You For Loving The Blues〟

ブルーズの素晴らしさを教えてくれたすべてのブルーズマンに感謝。

（文・富樫 力）

【SUNDAY BLUES LIVE at アメリカ村・グランカフェ】
毎週日曜18時スタート ¥2000（1ドリンク付き）
問合わせ：06（213）8637

2月5日　永井〝ホトケ〟隆(VO)：山岸潤史(G)、松本照夫(Ds)、他
12日　塩次伸二(G)：妹尾隆一郎(VO&harp)、松本照夫(Ds)、他
19日　近藤房之助(VO&G)：小島良喜(P)、井上茂(Ds)、他
26日　QUNCHO(VO&G)：井上茂(Ds)、他
3月5日　塩次伸二(G)・予定
12日　永井〝ホトケ〟隆(VO)・予定
19日　QUNCHO(VO&G)・予定
26日　近藤房之助(VO&G)・予定



PLAY List

1 les pizzicato five
2 キャッチー
3 東京は夜の七時
4 自由の女神
5 ハッピー・サッド
6 スーパースター
7 if I were a groupie
8 CDJ
9 スウィート・ソウル・レヴュー
10 ゴー・ゴー・ダンサー
11 Me Japanese Boy
12 Magic Carpet Ride
encore
E1 万事快調
E2 陽の当たる大通り

会場は思い思いにおシャレをした男女が半々の割合であふれかえっている。スーツできめている男の子もいれば、Gパンにダブルのライダースといった者もいる。女の子は、東京アート系というのか東京モード系とでもいうのか(何となく言っていることが分かるでしょ?)、とにかくそんなおシャレな娘たちがひしめき合う。

コンサートは、さすがピチカート・ファイブ! 完成された音楽とショー・アップしたステージで存分に楽しませてくれた。ファッション・ショー会場のように花道のあるステージ、そして中央には銀幕が降りている。ここには随時、曲のイメージにマッチした映像が映し出され、コンサートを盛り上げるのだ。その内容も海外のモデルの映像もあれば、デザイナーへのインタビュー、はたまた外国映画に登場する変な日本人特集など様々である。また、時として野宮真貴のシルエットが映し出されたりと抜群の演出効果も発揮する。さすが小西康陽といったところか…。

ゲスト陣も多彩で、『自由の女神』では高木完が、『スーパースター』では花田裕之が、『if I were a groupie』では斎木しげるが登場し、コンサートを盛り上げた。また、今夜の影の主役である小西康陽も小太鼓を叩いたり、水色のベースを弾いたり、ぬいぐるみを着たりとサービスを怠らない。そして何と言っても今夜の主役であるスーパースター野宮真貴! 四度に渡る衣装替えに、3人のモデルを従え観客を魅了する。特に『スウィート・ソウル・レヴュー』でのイエロー、グリーン、ピンク、オレンジという4色の衣装を各自まとってのウォーキングは、観客をアナザー・ワールドへ連れ去ってしまった。野宮真貴の堂々としたスーパースターぶりは圧巻、クールな歌い方もグッドだ。下品でキュートでゴージャス! 彼女は本当に素敵だ。『自由の女神』の時にシルクハットのつばを片手でつまんで、斜めに構えてすますポーズも好きだ。下品でキュートでゴージャス! これぞ、ロックン・ロール・スーパースターの極致だと思う…。

野宮真貴は、それほどルックスがいいとは言えないと、僕は思う。でも野宮真貴は素敵だ。それはファッション・センスの良さが理由ではない。彼女の堂々とした態度から醸し出される、不思議な魅力のせいだ。それは、ロックな生き様とでも言うべき独特のアレだ。ファッションなんてしょせんはゼロ記号に過ぎない。彼女の魅力はそんなところにあるのではなく、その下品でキュートでゴージャスな生き様にあるのだ。彼女はロックンロール・スーパースターの鑑(かがみ)だ。そして、その最高の素材を見事に調理した小西康陽は、少し固執するが、やはりさすがだ。

某誌のインタビューで、小西氏はピチカート・ファイブの音楽がポップスという言葉で片付けられてしまうのが残念だと語っていた。また、ちまたで「ロック、ロック」と言ってる人々はロックに対して非常に狭い考え方をしているとも語っていた。僕も同意見だ。そんな連中に限ってその本質よりもファッションとか、行動でものを言ってるように思える。実際、ロックをうたい文句にしておきながら、ロックっぽいのはファッションだけで、音楽性は完全に歌謡曲というバンドが少なくないし、ロックを語るには、やはりその本質をしっかりととらえなければならない。

ファッションも長髪もギターもゼロ記号に過ぎない。問題はそれらを使用して、いかなるものを創造するかという点にあるはずだ。「ロック、ロック」とうるさい連中は、セックスやドラッグやバイオレンスなど、限られた一面からのみ、ロックを語っているように思えてならない。そして、彼らはそれを真理とした演繹法(えんえきほう=組み立てた理論によって特殊な課題を説明すること)によってロックの命題を生み出している。しかし、ありとあらゆる音楽を吸収してきた小西氏の場合は、様々な音楽体験から帰納法(きのうほう=個々の具体的な事柄から命題や定義を導き出すこと)でロックの定義を導き出している。演繹法での解釈が間違っているとは言わないが、それでは解釈の幅が狭くなってしまうのは当然で、ロックに対する考え方が狭いと言われても仕方ないだろう。

そういう悪癖を持った方には是非一度ピチカート・ファイブのニュー・アルバム『OVERDOSE』を聴いてほしい。必ずや小西氏のロック観を理解できることだろう。そもそもロックっていう音楽ジャンルは『ビートを強調した音楽』ってことでしょ? 『ビート』って『リズム』のことでしょ? ほらっ、もう何だか解らなくなってきたでしょ。そんなもんなんですよ、ロックなんて。だからロックはいいんですよ、ねぇ。

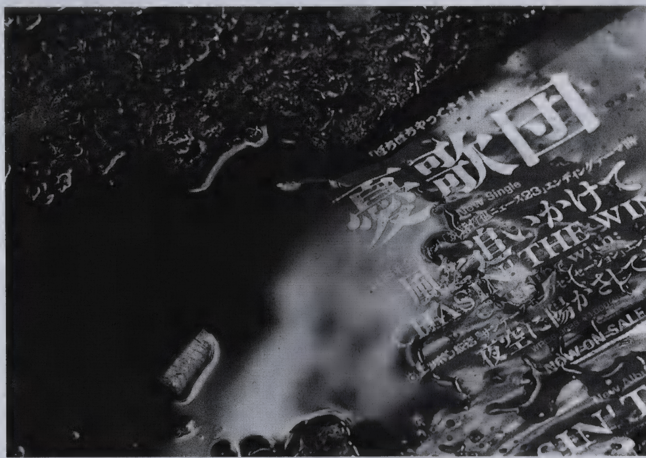
(文・ささきたかし)



PIZZICATO FIVE CATWALK 1994.12.4 恵比寿ガーデンホール







「知ってるかい!?」ライブツアー'94

1994.12.26 大阪W'OHOL

憂歌団が出演するテレビ番組や雑誌記事の見出しには、必ずブルースという言葉がくっついている。『憂歌団は日本一のブルースバンド』『憂歌団のブルースは最高!』。しかしこのテレビや雑誌でたびたび登場する賛辞は、私のようにブルースという言葉に対してガチガチに固まったイメージ(『暗い』とか『哀しげ』とか『オジサン』とか)を持っている者には、小さな壁を作ってしまうのだ。もちろんブルースに対しては、勝手に作り上げたイメージ以外に何の知識もないのだが、一度作ったイメージを壊すことは難しいし、簡単だと分かっていても壁を飛び越えるきっかけはなかなかつかめない。そんな私が憂歌団のライブに初めて足を運んだ。

ライブは、私の中にあったブルースのイメージをブチ壊すに値する『明るく、楽しく、元気になる』ものだった。メンバーは間違いなくオジサンなのだが、彼らが発するエネルギーには年齢など無関係で、若いつもりでいるだけの若年寄りなんかより、よっぽど心に響く勢いとパワーを持っている。特にヴォーカル木村の個性あふれる圧倒的なキャラクターは、この場所でしか体感できない空気を生み出し、同時にその空気をけっして忘れさせない魔法を観客にかけているかのようだ。各メンバーは呪文を木村にまかせ、さらに魔法の威力を高めようとそれぞれ熟練した音を奏でている。そこにはただ年月を重ねただけのバンドではなく、ブルースという言葉を無意味にしてしまう憂歌団というバンドの世界が存在していた。

私が持っていたブルースのイメージは、その音楽に対してだけ持っていたものではない。例えば、ステージ上では暗い照明の中でボソボソとしゃべり、淡々と次の曲へ進むといったものを想像していた。しかし憂歌団の場合、メンバーが最初にステージに現れた時から連発されたのが「アホー」という掛け声。もちろん他のライブでは考えられない言葉であるが、そこには「待ってたぞー」とか「がんばれよー」と言った応援や愛情がひしひしと感じられて、何だかこっちまで楽しくなってしまった。さらに木村は「アホて言う奴がアホなんや!」と笑いながら答えたり、彼の歌うCMソングのリクエストに応えたりと出来る限り観客の声に応え、他のメンバーが「はよ、やるで」と言わんばかりに曲を始めるまでそのやりとりを続けている。

もちろん歌も、私がイメージしていたブルースの世界とはまったく違った。今回はアルバム「知ってるかい!?」が中心のためカバー曲が多かったが、それらを含めてエレキギターを使った、ロックとしか言いようがない曲や、ブルースという言葉を忘れさせるような明るく楽しい曲、スローでもけっして暗くはない曲ばかり。ブルースというイメージにとらわれていた自分がバカらしく思えて、情けない気持ちになったほどだ。そして憂歌団はブルースバンドだからと作り上げた壁は、現実を目の前にあっさりと消え去り、憂歌団は憂歌団でしかないということだけが頭の中にしっかりと残った。イメージもウワサもまずは自分の目と耳で確かめることの大切さを、この日の憂歌団が教えてくれたのだ。

ただ今回のステージを見て一番興味をそそられたのは、関西以外でもこのノリでライブをしているのかということである。憂歌団自体のマイペースさは変わらないのだろうが、関西ノリが強く感じられるライブがうれしくある半面、全国各地でどのようなライブを繰り広げているのか気になった。また、憂歌団というここまで大きくなったバンドを、これからどのように展開させていくのかにも大いに注目したい。年令も性別も関係なく愛される、日本では貴重なバンドだからこそ、彼らにしかできない技に磨きをかけて、これからも何十年と頑張り続けてもらいたいものだ。

(文・山田純子　撮影・金原 誠)

PLAY List

1 FINE & MELLOW
2 MIDNIGHT DRINKER
3 パチンコ
4 私の彼氏
5 シカゴバウンド
6 おそうじオバちゃん
7 気分上々
8 十九の春
9 LOVE IS OVER
10 石狩挽歌
11 僕は燃えている
12 GOOD TIMES ROLLIN
13 胸が痛い
14 スティーリン
15 君といつまでも

encore

E1 ファンキーモンキーベイビー
E2 TALK TO ME BABY
E3 SHAKE YOUR MONEY MAKER
E4 WOO CHILD







VOICE









編集部には、毎月たくさんの投稿が封書やFAXで送られてくる。好きなアーティストのアルバムを1曲ずつ解説したもの、話題の音楽ジャンルに対する評論的なもの、ライブレポート…。しかし、それらに共通して感じられるのは「音楽雑誌的な文章だ」ということだ。

音楽雑誌の「理屈っぽい、カタカナが多い、総合的な感想が多い。個人の率直な感想がわかりにくい。あえてけなさない」と言った独特な書き回しや〝熱さ〟のない文章は、職業ライターに任せておけばいい。読者には読者だからこそ書ける内容や表現で投稿してきてもらいたい。音楽雑誌が氾濫する中、「音楽についての文章はこういうふうに書くものなんだ」といった概念が読者の中に出来上がってしまったのかも知れないが、君たちが本当に書きたいことはそんなことなのかと問いたい。好きな音楽・アーティストや自分の感動・怒り・考えを書くのなら、理屈じゃない自分の素直な気持ちを出すべきだ。

J－ROCK magazineでは、文章のウマいヘタよりも読者の素直で熱い気持ちを強く感じる、そんな投稿を待っている。今回の投稿は、最近の音楽事情に対する素直な意見、ファンとしての率直な思い、大好きなアーティストのライブレポート。これらを読んで、自分の思いや考えを再確認したり、反論したければ、どんどんJ－ROCK magazine編集部まで君の意見を送ってきてほしい！

「一つの意見」

TVやラジオをつければ必ず流れている〝今時の音楽〟というものが私は嫌いだ。嫌いというより、興味が湧かないといったべきかもしれない。かといって、批判する気もないし、ただあまりにも偏った現代の音楽事情というものが、何か許せないのです。

人気があれば良い曲、雑誌や評論家の人達は絶対に悪く言わない。初め、何もなくて人気が出るわけはないので、それなりに良い曲なのかもしれないけど、大衆が受け入れる曲が必ずしも良い曲といえるのでしょうか？ 人気がある程度出れば、どんな曲でも売れてしまうし、だいたいは同じような曲で、「わざわざ新曲を出す必要もないんじゃないの」と思ってしまいます。

以前はよく音楽雑誌を読んでいましたが、バンドブームの終わりと共に数も減り、ファンの人達も消耗品を捨てるように、次の人気商品に飛びついていきました。私の周りでも、カラオケで歌う為にレンタルでわざわざ借りて覚えたら、「ハイ次の曲いってみよー」っていう人が多いのは事実です。その人達をバカにしたりはしたくないけど、何のポリシーも感じられない。

私は音楽を生きがいに日々生活をし、音楽の為に生き、音楽によって生かさせてもらっているといっても過言ではないでしょう。そこまで私が言い切れる音楽とはやはり〝ロック〟なのです。回りくどい言葉も飾りもない、ストレートな〝NAKED HEART〟なのです。

時代のせいにはしたくないけど、何でも使い捨ての時代だからこそ、本物の音楽を大切にしていかなければと思います。だから、『J－ROCK magazine』には期待してます。人気者にはやさしいくだらない雑誌は他にたくさんあるので、アーティストに媚びない硬派な雑誌でいてください。音楽を心から大切に思ってくれている人が他にも大勢いると思います。そんな人達に一つの意見として読んでもらえたらうれしいです。

（投稿・熊本県　二宮明美）

「X・LUNA SEAを愛して」

私はXとLUNA SEAを愛してます。両方同じくらいに大好きです。3年前XとLUNA SEAに出会っていなければ…と考えると、哀しくなっちゃいます。私にとって人生であり、命に近い存在であり、生きがいなのです。それだけ私はこの2つのバンドを必要としています。

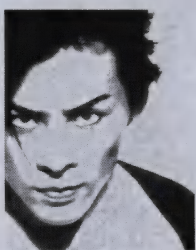
しかし、この2つのバンドだけでなく他のバンドでもそうですが、いろいろ問題が上がってます。それは、たくさん数え切れないほど(!?)あるのではないでしょうか？ コスプレのこと、リンチのこと、追っかけのこと、(メンバーの)肉親にイタズラをすること、ライブでのマナー…。

音楽という原点に戻ったとき、本当の音楽の楽しみ方とはどういうものだと思いますか？ 音楽ってある種、束縛されたこの現代社会から解放される自由ではないですか？ なのにたくさんその音楽の中で問題が上がっちゃって…。すごく悲しいです(わかりきったような言い方でゴメンなさい)。

別に自由だからといって、あれもこれも悪いことをしてもよいなんて言ってない。ただ、私はメンバーを愛しているから、大好きだから、メンバーに信じられるファンになりたいし、信じていくし。離れたくないからメンバーがイヤがることはしません。メンバーがしちゃいけない。これはしてほしくないって言っているのにそれでもする人がいる。メンバーがそれを知ったら一番悲しむんじゃない？ メンバーを愛してるけどメンバーがイヤがることをする。何か矛盾してない？ メンバーを愛してるなら自由の中でも自然としちゃいけないんだって思うことができない？ 行動できない。











　私もメンバーを愛してるから…って思って絶対しちゃいけないことは守ってる。だってメンバーが「そんなことするファンなんて大キライだ」なんて言ってきたら、とてつもなく悲しくなるもん。そう思うよね？　みんなそう思うよね？　だってそうだもんね？　私はXとLUNA SEAを愛してる…。すごく感謝してる…。だって私はXのおかげで、LUNA SEAのおかげで、たくさんの大切な友人ができた…ライブ仲間ができたし。大キライだった英語も今じゃ一番得意だし。XがいるからLUNA SEAがいるから生きていけるんだし。ライブで見れるメンバーの笑顔が、ライブ仲間の笑顔がどんなに私の心の支えになっているか…メンバーや友人の一言一言ってすごく大切だし、宝物だし、幸せだし、私もその支えになれてたらいいし…。

　最後になったけど、ナマイキなことばかり並べてゴメンなさい。でもわかっている人がいるなら言葉がほしいです…。

（投稿・新潟県　美杉秀尾）

「Eins:Vier ライブレポート」
1994.12.13 at 神戸チキンジョージ

　人間の感情で一番表現しにくいのは何だろうか？　怒ることだろうか。それとも泣くことだろうか。どれとも断定はしがたいが"喜"と"楽"という感情は、簡単なようでいてなかなか表現するのは難しい物である。とりわけ"笑う"こと。それもおなかを抱えて笑うのではなく、微笑むことはなかなか奥深い感情である。あくまで自然に、心の底から素直に微笑むのは簡単ではない。Eins:Vierのライブはこの"微笑"を自然なまでに体現させる。観ているうちに、たとえようのないうれしさと喜びに気がつくと、知らぬ間に微笑んでいる、満面の微笑みを浮かべているのだ。

　12月13日、神戸チキンジョージ。関西では約3か月ぶりのEins:Vierのライブである。今回はイベントとは言え、Eins:Vierが好きだという気持ちはいつもどこでも一緒なのだろう。どのファンの顔も待ち遠しさでいっぱいだ。やがて照明が落とされ、ファンの大歓声の中、コクトー・ツインズのSEが流れる。歓声がひときわ大きくなり、メンバーが現れた。

　1曲目は「君がすて去ろうとも」。昨年6月に行われたLa+miss Rationで初めて演奏された曲なのに、もうすっかりEinsの定番となってしまっている。2曲目は「For Love that is not Love」。伸びやかなHIROさんのヴォーカルにしばし酔いしれる。MCの後、続く曲は「Notice」。そして次の曲はガラスのように美しく繊細なギターフレーズが印象的な「Not yet saved」。1曲目と同じくこれもまだ音源化されていない曲だが、ステージではもう幾度となく演奏されてきたお馴染みの曲で、Eins:Vierのポップな面を代表する曲でもある。優しくそして繊細なメロディーに、本当に出会えたことを幸せだと思う自分に気づく。

　そして5曲目は、「1日も早くここ地元でやりたかった曲です。ニューシング『L.E.S.S.O.N.』!」というMCにより始まった。前回のツアーのファイナルとなったパワステでのみ演奏されたこの曲は、本来Eins:Vierの持っている過激な一面を再確認させるような激しい物だった。力強いヴォーカル、激しくかき鳴らすギターのリフなど、どれを取ってみてもEins:Vierの新境地と言えるのではないだろうか。激しかったこの曲に続くのは、うってかわって穏やかな「The Hallucination」。光が差し込み目の前が開けたような感のある「Both we and audience」。どちらも彼らのライブでは中心に位置する曲である。

　本編終了後、1回目のアンコールは彼らの代表曲の一つである「In your dream」。彼らと私達との間に生まれた一体感はより比重を増し、絶頂に達していたかに思われたファンのボルテージは更に上昇し、彼らが退いた後、信じられないくらいのアンコールを求める絶叫が起こった。その熱狂に応えるかのように始まった曲は、彼らの持つ優しさが切々と伝わってくる「I feel that she will come」。6月のLa+miss Rationの二日目、私はフロアを二分する柵の後ろにいた。その時、Eins:vierなんて用無しとばかりに柵の前に棒立ちになっている黒夢のファンがいた。その内の一人が、本編ラストに演奏されたこの曲で、控えめながらもEinsファンと同じ手のフリをしていた時の事を鮮明に覚えている。聴く者を引き込まずにはいられない彼らの楽曲の魅力。彼らの曲を聴き、感動のあまり何度涙を流したことか。彼らに出会えたことにどれだけ感謝したことか。彼らのライブを観れば観るほど、その想いはより一層強くなっていく…。

　95年はEins:vierにとって更なる飛躍の年となるだろう。しかし、どんなに大きくなろうとも、この心地良い空間はいつまでも変わらないでいてほしい。ここには、彼らにしか表現することのできない優しさが溢れている。かなうなら、その優しさにずっと包まれていたいと思う。

（投稿・奈良県　南典余）

J-ROCK Original Chart

タイアップのTV番組「J-ROCK ARTIST Count Down50」も好調で、本誌チャートにも多数のハガキが寄せられるようになった。応援ありがとう！
今回の締め切りは1月15日、応募総数3809通から、上位50人のアーチストを挙げる。
次回締め切りは2月15日だ。さあ、キミの投票でチャートを変えよう。とじ込みハガキアンケートに本誌セレクトアーティストの名前を1名書いて送ってほしい！

SELECTED ARTIST RANKING

順位	アーティスト	票数
1位	X JAPAN	234票
2位	T-BOLAN	221票
3位	WANDS	201票
4位	B'z	196票
5位	LUNA SEA	192票
6位	大黒摩季	168票
7位	黒夢	156票
8位	BUCK-TICK	141票
9位	THE STREET BEATS	118票
10位	BY-SEXUAL	115票
11位	ZARD	114票
12位	Mr.Children	99票
	Eins:Vier	
14位	THE YELLOW MONKEY	95票
15位	DEEN	87票
16位	浜田省吾	86票
17位	JUDY AND MARY	85票
18位	サザンオールスターズ	79票
19位	THE MAD CAPSULE MARKET'S	77票
20位	D.T.R	62票
21位	松任谷由実	60票
	L'Arc～en～Ciel	
23位	氷室京介	58票
24位	布袋寅泰	57票
25位	近藤房之助	55票
26位	小室哲哉	54票
27位	DIE IN CRIES	53票
28位	幻覚アレルギー	50票
29位	Gilles de Rais	49票
30位	DER ZIBET	47票
31位	DREAMS COME TRUE	45票
32位	久保田利伸	43票
33位	LOUDNESS	42票
34位	山下達郎	41票
	THE BLUE HEARTS	
36位	長渕剛	39票
37位	FEEL SO BAD	38票
38位	CHAGE ＆ ASKA	36票
39位	筋肉少女帯	34票
40位	DEEP	32票
41位	ZYYG	31票
42位	NOKKO	29票
43位	SOUL FLOWER UNION	27票
44位	憂歌団	25票
45位	甲斐よしひろ	23票
46位	織田哲郎	22票
47位	MANISH	21票
48位	尾崎豊	18票
49位	MORRIE	16票
50位	小沢健二	14票

今回も前回に引き続きJ-ROCK Artist Count Down50に加え部門別のチャートを用意した。
本誌がアンケートを元に客観的な視点から選んだヴォーカリスト、ギタリストのランキング・ベスト20である。お目当てのアーティストは入っているだろうか？ このランキングに不満のある読者諸君は編集部にお便り、または投票していただきたい。

VOCALIST 20

1ST	森友嵐士	(T-BOLAN)
2ND	上杉昇	(WANDS)
3RD	稲葉浩志	(B'z)
4TH	RYUICHI	(LUNA SEA)
5TH	TOSHI	(X JAPAN)
6TH	櫻井敦司	(BUCK-TICK)
7TH	大黒摩季	
8TH	吉井和哉	(THE YELLOW MONKEY)
9TH	清春	(黒夢)
10TH	坂井泉水	(ZARD)
11TH	二井原実	(SLY)
12TH	吉田美和	(DREAMS COME TRUE)
13TH	桑田佳祐	(サザンオールスターズ)
14TH	NOKKO	
15TH	氷室京介	
16TH	川島だりあ	(FEEL SO BAD)
17TH	桜井和寿	(Mr.Children)
18TH	ØKI	(THE STREET BEATS)
19TH	Hirofumi	(Eins:Vier)
20TH	木村充輝	(憂歌団)

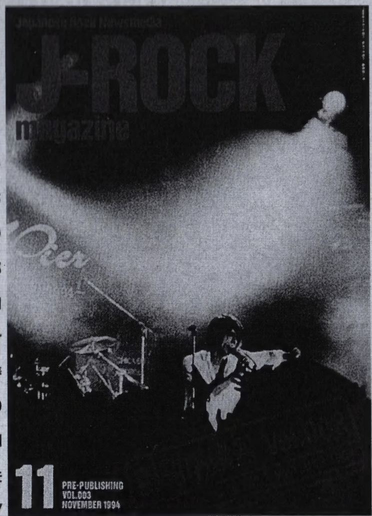
GUITARIST20

1ST	HIDE	(X JAPAN)
2ND	INORAN	(LUNA SEA)
3RD	柴崎浩	(WANDS)
4TH	五味孝氏	(T-BOLAN)
5TH	松本孝弘	(B'z)
6TH	SUGIZO	(LUNA SEA)
7TH	PATA	(X JAPAN)
8TH	高崎晃	(LOUDNESS)
9TH	今井寿	(BUCK-TICK)
10TH	星野英彦	(BUCK-TICK)
11TH	Char	
12TH	菊池英昭	(THE YELLOW MONKEY)
13TH	布袋寅泰	
14TH	倉田冬樹	(FEEL SO BAD)
15TH	臣	(黒夢)
16TH	橘高文彦	(筋肉少女帯)
17TH	ISHIGAKI	(THE MAD CAPSULE MARKET'S)
18TH	瀧川一郎	(元BODY)
19TH	SEIZI	(THE STREET BEATS)
20TH	Yoshitsugu	(Eins:Vier)

TV Count Down 50 1/20 ON AIR

1ST	B'z
2ND	BY-SEXUAL
3RD	Mr.Children
4TH	WANDS
5TH	LUNA SEA
6TH	ZARD
7TH	THE YELLOW MONKEY
8TH	T-BOLAN
9TH	X JAPAN
10TH	大黒摩季
11TH	THE STREET BEATS
12TH	近藤房之助
13TH	氷室京介
14TH	Gilles de Rais
15TH	奥田民生
16TH	黒夢
17TH	CHAGE＆ASKA
18TH	米米クラブ
19TH	松任谷由実
20TH	DER ZIBET
21ST	BUCK-TICK
22ND	NOKKO
23RD	L'Arc～en～Ciel
24TH	DEEN
25TH	サザンオールスターズ
26TH	小室哲哉
27TH	DREAMS COME TRUE
28TH	MANISH
29TH	THE MAD CAPSULE MARKET'S
30TH	LOUDNESS
31ST	JUDY AND MARY
32ND	布袋寅泰
33RD	忌野清志郎
34TH	FEEL SO BAD
35TH	長渕剛
36TH	Eins:Vier
37TH	久保田利伸
38TH	山下達郎
39TH	DEEP
40TH	佐野元春
41ST	尾崎豊
42ND	少年ナイフ
43RD	織田哲郎
44TH	小沢健二
45TH	渡辺美里
46TH	D.T.R
47TH	GARGOYLE
48TH	SLY
49TH	ZYYG
50TH	GLAY

BACK NUMBER



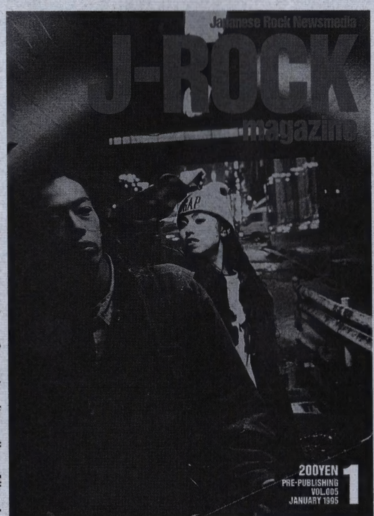
浜田省吾
黒夢
PINK CLOUD
忌野清志郎
憂歌団
Eins:Vier
佐野元春
MAKI OHGURO
X JAPAN
早川義夫
GLAY



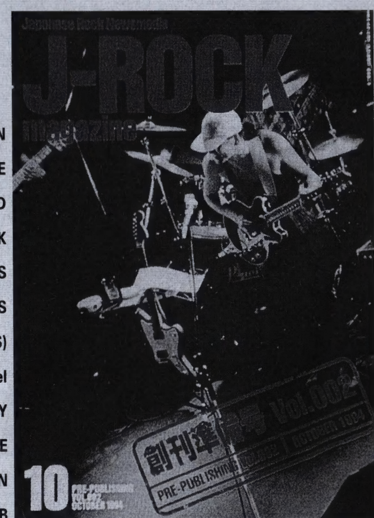
坂本龍一
DEEP
SION
SUPER JUNKY MONKEY
SOUL FLOWER UNION
cornelius
THE STREET BEATS
B'z
ACTION
VOGUE
SCHAFT
THE MAD CAPSULE MARKET'S



B'z
KAI FIVE
WANDS
黒夢
Eins:Vier
MOJO CLUB
GLAY
THE SUZUKI
ACTION
MAKI OHGURO



DER ZIBET
氷室京介
PSYCHEDELIX
TERU'S SYMPHONIA
山岸潤史
矢沢永吉
夜来香
松任谷由実
はっぴいえんど



T-BOLAN
DREAMS COME TRUE
DIRTY TRASHROAD
BUCK-TICK
THE STREET BEATS
THE COLLECTORS
JUN SKY WALKER(S)
L'Arc～en～Ciel
THE YELLOW MONKEY
SHONEN-KNIFE
BLUES IN HEAVEN
L·S·B



1994.12.26 OSAKA W'OHOL PHOTO：M.KANEHARA

●「J-ROCK magazine」は、KBS京都(毎週金曜日 23：30〜24：00 放送)をネットに、神戸サンテレビ、テレビ和歌山、びわこ放送、岐阜放送、千葉テレビ、テレビ埼玉で放送中の音楽番組「J-ROCK ARTIST Count Down 50」に協力しています。
この番組は、新譜の売上チャートではなく、読者の皆さんの投票によって決まる、アーティストの人気ランキングを毎回発表していく番組です。既に解散したアーティストでもOK! 言ってみれば、J-ROCKファンが選ぶJ-ROCK ARTISTのベスト50を発表していくわけです。読者の皆さんも、番組作りに協力してください。投票の仕方は下記の通りです。
◎右のとじ込みハガキに自分が投票したいアーティストの名前１名と住所・氏名・年令・職業を明記の上、KBS京都・「J-ROCK CD 50 」係　宛お送りください。
◎投票者には、毎回抽選で番組からの記念品が贈られます。
●「J-ROCK magazine」では、音楽にこだわりを持った色々な人達が「誰かに伝えたい」と思いながらも、自分の中に葬り去っている「こだわり」、「ネタ」、「意見」や「批判」を発表する場になりたいと考えコーナーを設けています(VOICE)。ライブレポート、ディスクレビュー、アーティスト評、またアーティストへのメッセージなど、とにかくどのようなスタイルでもOK。本音を投稿して下さい。
《投稿規定》
・文字数：1600字程度まで　・原稿用紙での投稿を基本とし、フロッピーディスク(MS-DOSファイル)、FAXでも構いません。
●また、本誌や今の音楽シーンに対する、読者の皆さんの意見、感想、主張や提案などのフリー・トークもあわせて募集します。ハガキやFAXにて、編集部宛にどんどんお送り下さい。
●本誌は、今後、基本的に定期刊行していきます。本誌を継続して読みたい方は、住所・氏名・年令・職業・電話番号及び、「○月号より購読希望」と明記し、無記名の郵便小為替1800円分を送ってください。６カ月間お届けします。
●右ページに紹介されているJ-ROCK magazineのバックナンバーを購入希望する方は、希望する号数(９月号は売り切れ)と冊数・住所・氏名・職業・電話番号を明記し、本の代金(200円×冊数分の無記名郵便小為替)十送料(１冊270円、２冊390円、３〜５冊700円、６〜12冊950円分の切手)を「バックナンバー係」までお送り下さい。なお、希望されるバックナンバーが売り切れた場合は、小為替または切手で返送しますので、ご了承下さい。

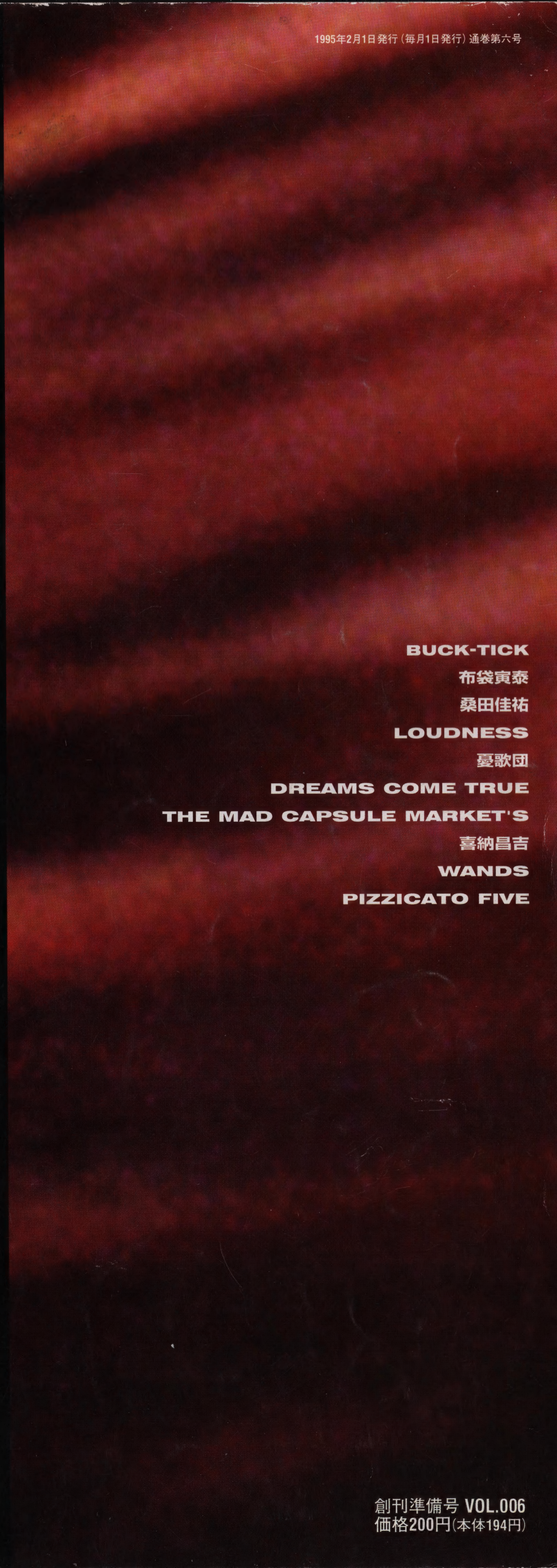
●送り先：株式会社ジェイロックマガジン社・編集部　〒542　大阪市中央区西心斎橋1-10-25　コモド西心斎橋 403　●問い合わせ：06-243-2161　●FAX:06-243-2171

1995年2月1日発行（毎月1日発行）通巻第六号

2·3

PRE-PUBLISHING
VOL.006
FEB · MAR 1995

編集・発行人：辻村和周　編集・発行：ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋1-10-25
TEL: 06(243)3611 / FAX: 06(243)3651



BUCK-TICK
布袋寅泰
桑田佳祐
LOUDNESS
憂歌団
DREAMS COME TRUE
THE MAD CAPSULE MARKET'S
喜納昌吉
WANDS
PIZZICATO FIVE

創刊準備号 VOL.006
価格200円（本体194円）